

魔法少女さとり☆マギ カ

へっくすん165e83

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

さとり「……いや、こいごいよ」

古明地さとりがまどマギの世界に行くだけの小説。果たしてさとりは世界の終わりを回避できるのか!?

平成30年4月22日完結

目次

魔法少女さとり☆マギカ連載開始!

1

第一話「へえ、運命を感じちゃいますね」

5

第二話「でもそれ大迷惑なのわかってま

す?」

56

第三話「私としては、そう思えた瞬間が一

番怖いですけどね」

85

第四話「奇跡じゃなくて必然です」

117

第五話「それはきつと錯覚です」

141

第六話「ええ、私もそう思います」

167

第七話「その言葉、そっくりそのまま返し

ます」

第八話「え? 今頃気が付いたんですか

?」

第九話「別に貴方の許しなんて欲してい

ません」

第十話「あ、はい。ご勝手に」

第十一話「確かにそれを辿れば目的地に

到達するかも知れませんね。目的を達せ

られるかはさておいて」

第十二話「ありがとう。そう言ってくれ

279

るのは貴方だけです」

—

魔法少女さとり☆マギカ連載開始！

「おつきろー！」

私、古明地さとりが朝起こされたところからこの物語は始まります。

見覚えのない天井。知らない布団。そして目の前の少女の屈託のない笑顔。正直まぶしいです。

（——ッ!? 何故教室にあんな化物が……）

妖怪なので魔法少女からは怪しまれます。撃たないでください！

「得体の知れない存在は全部敵って事ですか。いじめられっこの発想ですね……」
精一杯煽ってはみるもの……

「もう逃げません。逃げる気もありません。手を出さないで……」

魔法少女には敵いません。果たして私はこの一か月を生き延びることができるのか！

魔法少女さとり☆マギカ！ 一月七日連載開始！

「……っ、さとりいつ……」

次回、さとり死す。

え？ 千文字以上喋らないと投稿できない？ ……。

魔法少女さとり☆マギカ、連載開始！

え？ あと七百文字？ え、え〜……えーと……

基本的にはアニメまどマギのストーリーに準じています。いわゆる迷い込んだ系になるのでしょうか。大まかには私、古明地さとりが読心能力を隠しながらほむらの手伝

いをする物語です。東方キャラはあまり出ません。キュウベえは相変わらずです。オリキャラも出ません。そして、私の戦闘力は限りなく弱いです。

これで半分？ あとこの倍も何を宣伝すると？

残酷な表現は度々出てきます。といっても若干の微グロ程度です。エッチな描写はありません。多分。第一話の投稿は一月の七日に予定しています。毎週更新する予定です。

文字余りまくるので私の自己紹介でも。私の名前は古明地さとります。所謂覚妖怪で、幻想郷の地下に広がる旧地獄に建てられている地霊殿という建物で灼熱地獄址と怨霊の管理をしています。能力は人の心を読むことと、モノマネです。相手の嫌がることを率先してやるのが大好きです。よく根暗とか卑屈とか言われますが、私は元気です。動物のペットを沢山飼っています。特にお燐とお空はお気に入りです。家族は妹が一人います。可愛く、愛らしい妹ですが、なかなか心が通じ合いません。でも、可愛いし、大切な家族です。

幻想郷は今日も平和です。旧地獄では毎日喧嘩ばかりですが、慣れてしまえば前衛的なお囃子にも聞こえてきます。この前鬼に殴られてお腹に穴が開きました。痛いです。

私をあまり知らない人のために簡単に容姿の説明を。紫の髪で身長はそんなに大きくはないです。体から第三の目と呼ばれる人の心を読むための器官が生えています。

4 魔法少女さとり☆マギカ連載開始!

スリーサイズは上から——あ、千文字行きましたね。じゃあこの辺で宣伝終わろうと思います。どうぞ魔法少女さとり☆マギカをよろしくお願いします。

第一話「へえ、運命を感じちやいますね」

ベルトコンベアで流れていくアタッシユケースの川を見る。あの一つ一つに色んな人たちの生活が詰まっていると考えるだけでまどかは心が躍った。

「うくん……しっかし遅いなあ。飛行機はもう着陸してる筈だし、迷ってるのかな？」

詢子はガシガシと後頭部を掻く。その仕草を見て、まどかは少し不安になった。

「大丈夫……だよな？ ママは会ったことあるんだっけ？」

「ん？ いや、ないよ。和子から写真を貰ってるだけさ」

「じゃあどんな子なのかもわからない……ってこと？」

まどかは詢子の持っている写真を不安そうに覗き込む。詢子は優しげに微笑むと、まどかの肩を抱いた。

「大丈夫。向こうの学校も推薦してるし、写真を見た感じ大人しそうな娘じゃないか。それに、しっかり日本語も喋れるらしい」

「お友達になれるかな？」

「そいっただけは、まどか次第だね」

まどかは視線の先に先程写真で見た顔を捉える。紫色の癖のあるショートヘアに

可愛らしい洋服を纏った少女が、まっすぐまどかの方へと歩いてきていた。

「……鹿目さん、でよろしいでしょうか」

少女は二人の前で立ち止まると詢子の顔を見上げる。無表情に近いそれは、まるで人形のようにだった。

「ああ、私が鹿目詢子。ホームステイのホストさ。日本へようこそ」

詢子は少女と握手を交わす。少女は何かを考えるように詢子の顔をじっと見たあと、今度はまどかの方を見た。

「では、貴方がまどかさんですね」

「えっ!? あ、はい! 鹿目まどかです。よ、よろしくお願いします……」

まどかが恐る恐る差し出した右手を、少女は優しく握り返す。そして、微かに微笑んだ。

「古明地さとりです。よろしくお願いします」

「それでは、私はまどかさんと一緒にクラスになるんですね」

さとりは流れていく窓の風景を見ながら詢子に聞いた。

「ああ。和子が気を利かせてくれたらしくてね。……つと、和子つてのはさとりちゃん

のクラスの担任。早乙女和子。ちよつと抜けてるけど人柄は保証するよ」

「早乙女先生はいい先生だよ」

空港を出た三人は詢子の運転で鹿目家へと向かつていた。

「それにしてもこの時期に一ヶ月間の交換留学なんて珍しいね。それとも、アメリカじゃ普通なのかい？」

詢子の質問に、さとりは少し考えてから答える。

「急な提案だったらしいですよ。この話も一週間前に決まったことです」

「まあ、なんにしても若い頃に色々経験しておいたほうがいいよ。じゃないと大人になつてから苦労する」

「経験……ですか」

さとりは後部座席からじつと詢子を見る。その様子を見て、詢子はくすりと微笑んだ。

「まどかもだぞ？ さつきからさとりちゃん以上にカチンコチンに固まつちやつて」

「そ、そんなことないよ？」

「その割にはさつきからだんまりじゃないか。折角さとりちゃんも日本語が喋れるんだ。言葉が通じれば心も通じる。会話っていうのは自分の思いを相手に伝える行為だ」

詢子のその言葉を聞いて、まどかは何か話そうと必死に思考を巡らせる。その様子を

見て、さとりはくすりと笑った。

「大丈夫ですよ、まどかさん。貴方の気持ちは十分伝わってきています。私も貴方と友達になりたいです」

「えへへ、じゃあ私達、今から友達だね」

まどかはさとりの手を握る。それは先程の様な挨拶などではない。もつとあたたかい何かだった。

「さて、到着つと」

車を走らせること数時間。日が暮れる頃に車は鹿目家へと到着した。詢子は慣れた手つきで車を駐車スペースに入れると、あまり大きくないさとりの荷物をトランクから取り出す。

「あ、自分で持ちます」

さとりは少し慌てて詢子から荷物を受け取ろうと手を伸ばすが、詢子はその手を避けるように荷物を遠ざけた。

「さとりちゃんは今日は客人だ。客に荷物を持たせるわけにはいかないね」

さとりは真意を探るように詢子の顔を見る。そして呆れた顔で言い返した。

「わかりました。では明日から自分で持ちます」

「うん。いい心がけだ」

詢子とさとのりの間では何か意味のある会話だったようだが、まどかにはさっぱりだった。まどかがこのやり取りの意味を理解するには、些か人生経験が足りない。

「さあ、ここが我が家だ。今日はいらつしやい、古明地さとりちゃん」

「今日はお邪魔します。そして、これからよろしくお願いします」

さとりはドアの前で一度礼をして、家の中へと入る。最初で最後のお邪魔しますだ。

「取り敢えず、部屋はまどかと共同ね。空き部屋がないこともないんだけど、あるのは生憎部屋だけさあ。肝心の家具が揃ってない」

「いえ、私としてはとても嬉しいです。まどかさんのお邪魔にならなければ良いのですが……」

「そんな！ 私は全然……。……私も、嬉しいかな？」

まどかとは半分照れながらそう言った。さとりは何か諦めたように微笑んだ瞬間、きよんとんとした表情になる。その後何かを言いかけ、咄嗟に口を噤んだ。

「よつしつ、荷物は私が運んどくから、アンタら二人はパパに挨拶してきな。この時間ならタツヤも起きてるだろうし」

詢子はさとのりの荷物を持って廊下を進んでいく。残されたまどかとさとりは互いに

一度顔を見合わせたあと、まどかの先導のもとりリングへと向かった。

「君が古明地さとりちゃんだね。ママから聞いてるよ。僕は鹿目知久。で、こつちがタツヤ」

「よろしくお願いします」

さとりは知久の顔をジッと数秒見た後、片手を横に突き出す。その二秒後、タツヤがさとりの腕の中に収まった。タツヤがさとりの腕に突進したからだ

「こら、駄目じゃないか。ごめんね、大丈夫かい？」

タツヤはさとりの腕の中でもぞもぞ動くと、さとりの顔を見上げる。

「(ハ)……(ハ)おっ？」

タツヤは首を傾げながら何かを言おうとする。さとりはそつとタツヤの頭を撫でた。

「古明地、古明地さとりですよ。古明地は難しいのでさとりで結構です」

「さとりおねーた？」

タツヤはさとりの顔を見て、何か納得したらしい。さとりが頷いたのを見て、につこりと笑った。

「さとりおねーたー！」

「口に合うといいんだけど……どうかな？」

その日の夕食の席、知久が料理の出来をさとりに聞いた。さとりは一度ナイフとフォークを止める。

「とても美味しいです。このような美味しいハンバーグは久しぶりに食べました」

「それは良かった。……」

知久は「おかわりもあるからね」と言いそうになり、慌てて口を噤む。おかわりもあるからというセリフは、相手に気を使わせることを知っているからだ。ましては、相手は女の子。男の子ならまだしも、女の子は色々気にすることもあるだろう。

「パパの作る料理はどれも美味しいよ」

「同感。流石、私の夫だ」

まどかかと詢子も知久の料理を褒める。知久は少し照れながらも首を横に振った。

「僕なんてまだまださ。ママの料理には敵わない」

「そうかい？ 私はパパの料理には敵わないと思ってるけど」

知久と詢子は互いに笑い合う。さとりはそれを見て、少し考えた後、食事を再開した。

「えつと……これで全部だよね？」

さとりがまどかの家に来てから三日。まどかとさとりは学校に行く準備をしていた。電子化が進んでいる見滝原中学の準備物は意外と少ない。だが少ないということはその一つ一つの重要度が高いと言いうことだ。

「ええ。これで問題ないはずです。あとは明日に備えて早く寝ることですね」

「えへへ、楽しみすぎて寝れるかな？」

まどかは冗談混じりにそう言う。さとりはそれを聞いて何かを諭すように言った。

「大丈夫です。今日は夢も見ないほど熟睡できますよ」

「おつきろーっ！」

「——ッ!?!」

朝、急に起こされたら人によっては混乱するだろう。状況が飲み込めず、完全に目が

覚めるまで右往左往してしまう。私もいきなり起こされて、非常に混乱している。もつとも、私は寝ぼけてもいなければ起こされたことに対して驚いているわけではない。私は単純に、状況が飲み込めないだけなのだ。

私の目の前には可愛らしいともいえるような年頃の女の子が立っている。肩まで伸びている桃色の髪、身長は低いように感じるが、それは私にも言えることだ。問題は彼女はいつたい誰で、ここはどこかということだ。

「もう、さとりちゃんまだ寝ぼけてるの？ ほら、顔洗いに行くよ（さとりちゃん、朝は弱いのかな？ てひひ、寝ぼけてる顔可愛い）」

少女は私から布団をはぎ取ると、私の手を握る。なんにしてもこの少女は私に対し敵意を抱いているわけではないようだ。状況が全く飲み込めない今、取りあえずこの少女に従っておくしかないだろう。私は少女に手を引かれるままに部屋を出て廊下を歩く。廊下を歩いている十数秒の間に私は少女の記憶を読んだが、頭の痛くなるような情報しか手に入らなかった。

この少女が記憶する限りでは、私は海外からの交換学生らしい。三日前からこの少女、鹿目まどかの家にホームステイしているらしく、彼女が私に対して抱いている印象は……

「……友達？」

「ん？ さとりちゃんどうかした？（へんな夢でも見たのかな？）」

まどかに手を引かれるままに私は洗面所へとたどり着いた。一軒家には少々大きすぎるように思える洗面所では、一人の女性が顔に化粧を施している。まどかはその女性の隣に入ると、元氣よく挨拶した。

「おはようママ（ママ、今日は起きてる。あ、そうか。今日からさとりちゃん学校だもんね）」

「おはよう。まどか、さとり。よく眠れたかい？（さとりは今日から転入だもんね、緊張で眠れないんじゃないかと少し心配だったが、あの顔見る限りでは大丈夫かな？）」

「おはようございます。……詢子さん」

軽く記憶を読む限りでは彼女はまどかの母親で間違いないだろう。鹿目詢子。私に對する記憶もまどかと大差ない。交換学生をホームステイさせている母親だ。

「時差ボケもあつて大変だろうけど……まあ、そのうち慣れるさ。……よし、完成（今日も完璧、女は見た目で舐められたら終わりだからねえ）」

詢子は化粧を済ませると、洗面所を去っていった。二人で使うにはあまりにも大きすぎる洗面所に、私とまどかが取り残される。

「とりあえず顔洗つて私たちも朝ごはん食べに行こっか（今日からさとりちゃんと登校か。さやかちゃんたちびっくりするだろうな）」

何をどうびっくりするのかはわからないが、取りあえずお腹の中に何か入れるのは賛成である。妖怪である私は基本的には何も食べなくても生活はできるが、腹を満たすだけが食事ではない。腹を満たすためだけに食事するのは、畜生と変わらない。

手早く顔を洗い終え、まどかと共に食事に向かう。キッチンでは眼鏡を掛けた男性がいそいそと朝食を準備していた。この家で雇われている使用人かと思つたが、どうやらまどかの父親のようだ。

「おはよう。まどか、さとりちゃん。朝食の準備は済んでるよ（たしかさとりちゃんはコーヒーだったな）」

彼の名前は鹿目知久。簡単に記憶を読む限りでは、いわゆる専業主夫というやつだ。私がテーブルに着くと軽食とコーヒーが私の前に並べられる。なんとも美味しそうだ。

「さとりちゃんは今日から学校だね。準備は大丈夫かい？（といっても、しっかりしているようだし、心配いらなかな?）」

「大丈夫だよ。パパ。昨日の夜私と一緒に念入りに準備したもん！（準備、したんだけど。ちよつと不安……）」

まどかの心を読む限りでは、昨日私はまどかと共に学校とやらに行く準備をしたらしい。まどかが覚えている『昨日の私』は、私の記憶と照らし合わせても違和感がないぐらい『私』だった。もしかして、私がいきなりこの変な場所に連れてこられたわけでは

なく、私の記憶が消えただけなのか？

朝食を食べて少し冷静になった私は、ようやくこの状況の打開を図るべく頭を働かせる。まずは、私にとっての正常を思い浮かべた。私の名前は古明地さとおり。その名の通り覚妖怪であり、人の心を読むことができる。旧地獄に建てられた地霊殿に住んでおり、地底と旧地獄の管理をしていたはずだ。そんな私が何故こんなところで少女に起こされ、のんきに朝食など取っているのか。原因は全くもってわからない。ここまで意識がはつきりしていると、夢というのも考えられない。だが、一つわかったことがある。ここは所謂『外の世界』というやつなのだろう。

「見滝原中学校……」

「うん、そう。歩いていける距離にあるよ（時間……まだ大丈夫だよな？ 転校初日から遅刻させちやつたら可愛そうだもん。なんとしても遅刻しないように頑張らなきゃ）」
健気だ。心を読めるからわかることだが、このまどかという少女は私が見たことがないほど純粹で、裏表がない。私にとっては非常に付き合いやすい相手とも言える。同時に、利用しやすい相手とも言えるが。

「まあ担任が和子だし、心配することはないさ。なるようになるよ（つと、もうこんな時間か。折角早く起きたんだ。今日は早めに出勤するかね）」

詢子はコーヒーを一気に飲み干すと、鞆を持って立ち上がる。

「よっし、行つてくる（さて、今日も一日頑張りますか）」

詢子は知久にキスをすると、まどかとハイタツチを交わす。そのままの勢いで私にもハイタツチを求めてきたので、私は静かに手を上げた。詢子は私の手を軽快に叩くと、力強い足取りでキッチンを後にする。

「私たちも学校行く準備しようか（さとりちゃんの制服姿、きつと似合うんだろうな）」

まどかも詢子に合わせるように席を立つ。私は少し考えた後、素直に席を立った。どうしてこのようなことになっているのか全くわからないが、少なくとも今すぐ私の身に危害が加わるようなことはなさそうだ。だとしたら、今はこの世界でいう『普通』を演じよう。人の心が読めるため、人に合わせるのは得意である。読心能力を持っていることがバレなければだが。

「いつてきまーす！（何か変わったことがあると、登校するだけでも新鮮だ！）」

「いつてきます」

「気をつけて（まどかはおつちよこちよいだからなあ）」

知久に挨拶し、私とまどかは家を飛び出した。まどかは私の転入を自分のことのように楽しみにしているようで、正直少しやりにくい。でもまあ、悪い気はしなかった。

まどかに合わせて小走りで見慣れない街中を進んでいく。目に付くもの全てが見たことがない私にとつて、それはそれはストレスの掛かる行進だったが、道案内がいる分いくらか気分は楽だった。

「おつはよー! (時間通り……のはずなのになんでもう二人ともいるの?)」

まどかが道の途中で待っている少女二人に話しかける。美樹さやかと志筑仁美だ。二人ともまどかと友達らしく、毎日一緒に登校しているらしい。

「おつす! まどか! (あれ? まどかの後ろにもう一人……こりやまどかのやつハンカチでも落としたか?)」

「おはようございます。まどかさん (後ろにいる方……こつちを見ているようですが。もしかしてまどかさんの知り合いでしょうか?)」

どうやらこの二人は私が転校してくることを知らないらしい。まどかは二人の視線に気がついたのか、少し自慢げに私を紹介した。

「紹介するね! 今日うちのクラスに転校してくる古明地さとりちゃん。ほら! 先生が言つてた交換学生の! (えへへ、どつきり大成功だよ!)」

「え!? あれうちのクラスだったんだ。でもそんないきなり……まどか、さてはあんた隠してたな! (一人で転校生を一人占めにして、許せん! 許せんぞ!!)」

さやかは両手をワキワキと前に出すと、まどかに抱き着き、くすぐり始める。

「そんな悪い子はこうだ！　うりやうりや！（ふふ、転校生なんかにまどかを渡すもんか！）」

「あらあら（本当に、この二人は仲良しですわね）」

「……」

まあ、誰とも知らない人間が、いきなり自分の親友と仲良くしていたらあまりいい気はしないだろう。私としても、この三人の友情関係を崩すつもりなどない。そして、その中に入っていく気もさらさらなかった。

「まー、なんにしてもよろしくね！　古明地さん！（古明地って、変な名字だな。それに海外からの交換学生なのに日本人みたいな名前……）」

「よろしくお願い致しますわ（一緒に登校なされたということは、古明地さん、まどかさんの家に住んでいらしてるのかしら。それはなんとというか……少し羨ましいですわね）」

「……よろしく願います」

「うんうん、よろしくしてくれたまえ（うわあ、少し反応薄いな。クールなのか暗いだけなのか。それとも転校初日で緊張しているのかな？　だとしたらあまり絡まないほうがいいか？）」

二人と合流し、さらに学校のほうへと前進する。人間が初めて会った者に対する第一

印象などこんなものである。まどかが特殊すぎるのだ。学校にいったら更に更に色々な人間の思考を読むことになると思うと、少し気分が沈んだ。まあ、もう慣れたものだが。「あ」

そういえば、完全に失念していた事項がある。覚妖怪という性質上、私は人の心を読むための『第三の目』を持ってはいるのだが、それは人間から見たらあまりにも異様に映るもののはずである。それこそ、交換学生という第一印象を吹き飛ばす程度には。だが、この二人は反応しない。もしか、見えていないのか？

私はわざとらしく第三の目を掴み、さやかの前に掲げた。もし見えているはずなら、なにかしらの反応をするはずだが……。

「……う？（転校生、なにやってるんだ？ 何かを掲げるふり？ 水戸黄門的な？）」

やはり、見えていない。あることが自然に見えているわけではなく、第三の目が透明になっているかのように物理的に見えていないのだ。それがいいことなのか悪いことなのかはわからない。だが、一つ困ったことはある。もしこの世界にこの第三の目を見ることができるとしたら、私が人間ではないと一発でバレてしまうということだ。

「いいですか皆さん。味噌汁というのは何気ない日本料理の一つですが、何気ないから

こそ素晴らしいものがあるのです。女子の皆さんは是非とも美味しい味噌汁の作り方を勉強するように。男子の皆さんは、どんな味噌汁が出てきても「おいしいよ」と言える大人になること。毎朝聞ける「おいしい」の一言が、女性にとつては何よりの励みになりますからね！（今日もご飯が美味しいって褒められちゃった。また彼に美味しい料理作ってあげなきゃ）」

「（先生、また惚気てるよ……でも、今回は結構うまく行ってるみたい）」

朝のホームルーム。私は担任の先生、早乙女和子の指示で皆からは見えない位置で待機していた。ホームルームで紹介すると言っていたが、一向にその気配がない。心を読む限りでは、忘れているわけではないようだが。

「あ、それと。今日は転校生を紹介します。古明地さん？ 入ってきて（いけない。忘れるところだったわ）」

本当に忘れかけてたらしい先生に少し呆れながらも、私はガラス張りの教室をぐるりと回り、入り口から中に入る。このような全面ガラス張りで、耐震等は大丈夫なのだろうか。

「では古明地さん。自己紹介をどうぞ（きて、ここが正念場よ。頑張つてー）」

先生とまどかの応援の視線が少し痛い。

「古明地さとりです。よろしくお願いします」

「古明地さんは海外からの交換学生です。日本にはあまり慣れていないらしいので、皆さん、助けてあげてくださいね（うーん古明地さん。もう少し元気よく挨拶できるといいんだけど。難しいかしらね）」

余計なお世話である。それにほら。

「（うわ、美人。クール系美人？）」

「（レベルたけえ……俺このクラスでよかった！）」

「（なんか暗いなあ。緊張してるのかな？）」

「（上条のやつツイてないな）」

ほら、印象はまあまあである。私は先生に案内されるがままにまどかの前の席に座る。真横にはさやかかいて、斜め後ろには仁美がいる。

「よろしくね、さとりちゃん（これで仲良し四人で固まれるね）」

「よつろしくー、古明地さん！（まどかの前の席が不自然に空いてるなど思ってたけど、このためだったのか!? くっそー、陰謀を感じる!）」

「近くになれてよかったですわ（早くお友達にならないと!）」

「よろしくお願ひします。みなさん」

私は周囲に対し軽く頭を下げる。ホームルームが終わると同時に、案の定私は人間に囲まれてしまった。

「どこの国から来たの? (名前が日本人ってことは、帰国子女ってやつ?)」

「前の学校どんなだった? (あ、いや交換学生だから正確には前じゃないのか?)」

「日本はどう? (古明地さんをうちのグループに引き込めたらいいな)」

質問を飛ばしてくるのは女子ばかりである。男子はというと、遠巻きに私を観察しながら思いつきの思考をしていた。

「背は小さいな。まどかよりも低いかな?」

「(お近づきになりてえ、あわよくば付き合いてえ)」

「(クール美人系って俺のストライクゾーンど真ん中。なんとしてもあの女子たちの質問攻めから趣味や好きなものを探らなければ)」

「(巨乳派だったけど、小さいのもいいな)」

まあ、子供が考えることなどこんなものである。こんな環境の中でしばらく生活しないといけないと思うと少し頭が痛くなった。

「もうみんな、一度に質問したらさとりちゃん困っちゃうでしょ(さとりちゃんを一人占めするつもりはないけど、できれば一番の仲良しになりたいな)」

「あ、ごめんね(ちえ、やっぱり転校生はまどかたちのグループ入りかな)」

「いえ、気にしてないです。お構いなく」

私としても友好関係を広げるつもりはない。友人というのは多くいればいるほど便

利ではあるが、それを維持するのに多大なコストが掛かるものだ。友人というのは少数でいい。まあ私は別にまどかのことを友達とは思っていないが。

「——ッ!! ……はあ……はあ」

目が覚めた瞬間、さりと乾いていた全身の皮膚から大量の汗が沸き出る。その汗が寝間着を肌貼り付け、私はなんとも言えない気持ち悪さを覚えた。それはまるで絶望が身体に貼り付いているようだ。居ても立つてもいられなくなった私は布団を押し退けてベッドから降りる。

「また、まどかを救えなかった」

いつになったら私は貴方との約束を守ることができるのだろう。姿見の前で三つ編みを解き、魔力で視力を回復させた。これは弱い私を捨て去る儀式。前回の私から今回の私へ変わるためのおまじない。

「今度こそ、私はまどかを」

新たな決意を胸に抱き、私は病室の窓から外に飛び出た。

私がこの世界に迷い込んで既に一週間以上経過しているが、特に何か変わった点は無い。しいて言えば、少しクラスに馴染んできたことぐらいか。だが、いつまでも転校生面しているわけにも行かなかった。何故なら、今日からまた新しい転校生が来るからである。

「まどかさん、そろそろ……？」

まどかを起こそうと声を掛けたが、躊躇してしまう。横で寝ているまどかが非常に変な夢を見ていたからだ。破壊され尽くした見滝原。巨大な化物と戦う黒髪の少女。そんな様子を猫のようなものと眺めているまどか。

『酷い……』

『仕方ないよ。彼女一人では荷が重すぎた。でも、彼女も覚悟の上だろう』

猫のようなものがまどかに話しかける。まどかはその言葉を聞いているのかいないのか、悲鳴にも似た声を上げた。

『そんな……あんまりだよっ！　こんなのつてないよ……』

『諦めたらそれまでだ。でもね、まどか。君なら運命を変えられる』

猫のようなものは説得するように言葉を続けた。

『避けようのない滅びも、嘆きも、全て君が覆せばいい。そのための力が君には備わっているんだ』

『本当に？ 私なんかでも、本当に何かできるの？ こんな結末を変えられるの？』

不安げなまどかに猫のようななにかは嫌に明るいい声で言い切った。

『勿論さ。だから僕と契約して、魔法少女になってよ！』

「せー」

「へぶっー！」

悪夢とまでは行かなくても、決していい夢ではなさそうだったので、私はまどかの頭にチョコップを食らわす。まどかは眠たそうに目を擦りながら軽く周囲を見回した。

「……夢オチ？（へんな夢）」

「どんな夢を見てたんですか？ ほら、リピングの方に行きましよう？」

「……えへへ、おはよっ、さとりちゃん（うう、まだ全然眠いよう）」

まどかは寝ぼけながらも私に抱きついてくる。ペットにじゃれられているようで、悪い気はしなかった。私はそんなまどかの手を引いてリピングの方へと向かう。そこでは知久が、趣味で作っている家庭菜園からトマトを収穫していた。

「おはようパパ（パパは相変わらず朝は早いなあ）」

「おはよう（ぎ）います」

「おはよう。まどか、さとりちゃん（まどかとさとりちゃんは同着三番つてとこか。やっぱり詢子さんが一番遅いな）」

三番と言うことはタツヤは起きているのか。

「ママは？（まあ、多分寝てるよね）」

「タツヤが行ってる。手伝ってやって（流石に三人がかりなら起きるだろう）」

「はあい。いこ、さとりちゃん（おひさま作戦、発動だよ）」

……なかなか残酷なことを考える少女だ。だが、社会人に遅刻は許されない。ここは心を鬼にしなければならぬだろう。

「ママ、マーマーあ。おきて、あさ、あーさー！（ままおきてー!）」

タツヤが詢子の上に乗っかりバシバシと布団を叩いている。私はカーテンの端を掴みスタンバイした。

「さとりちゃん、行くよ!）」

まだかの目配せを合図に、私は一気にカーテンを開ける。それと同時にまだかが詢子の被っていた布団をはいだ。

「おつきろー!（ナイスタイミング、さとりちゃん!）」

「おつきろー!」

まだかほどハイテンションとまでは流石に行かないが、私も一応声を出す。

けるか悩んでいるようだ。私はまどかの持つている赤いリボンに対して妙な既視感を覚えた。あのリボン、何処かで見たような。詢子は無言で赤いリボンを指差した。

「ええ、派手過ぎない？（イメチェンがすぎるよう）」

「それぐらいで良いのさ。女は外見で舐められたら終わりだよ？（実際、私は赤の方が似合うと思うしね）」

詢子の勧め通り、まどかは赤いリボンを髪につける。それを見て、私は思い出した。確か夢の中のまどかも赤いリボンをつけていたような。

「いいじゃん。これでまどかの隠れファンもメロメロだ。（流石私の娘。今日も可愛いな）」

「いないよ！ そんなの……（いるわけ、ないよね）」

まあ、実を言うという。むしろ高嶺の花である仁美より人気があるぐらいだ。

「いると思っておくのさ。それが、美人の秘訣（女は見られると綺麗になるのさ）」

詢子は手をフラフラと振ると洗面所を去っていく。私達も手早く洗顔を済ませその後を追った。

「おっはよー！（さとりちゃんと話してたらちよつと遅れちゃった）」

「まどかおそーい。さてはその可愛いリボンを付けるかどうか小一時間悩んだな？（にしてもまどかにしちやセンスのいい色のリボンだな）」

「ち、違うよう！ でも、少し派手過ぎない？（やっぱりいつも通りにしとけばよかった……）」

「とつてもお似合いですわ（髪の色とも合ってますし、とても可愛らしいですわ）」

通学路でさやかと仁美と合流し、一緒に学校に向かう。話題は自然と仁美のラブレターの話題にシフトしていった。

「ママが言うには、ラブレターじゃなく直に告れるような男じゃないと駄目だって（そういうもの……なのかな？）」

「くうー、相変わらずまどかのママはカツコイイな。美人だし、バリキャリだし（まどかはもう少し詢子さんの力強いところを受け継いでいたらなあ）」

「さとりちゃんはラブレターとか貰ったことある？（さとりちゃん可愛いからモテそうだけだなあ）」

まどかの質問に、私は少し言い淀む。貰ったことがないと言えば嘘になる。だが、まどかが期待しているようなものではないだろう。

「いえ、無いですよ」

「私もさっぱりだあ〜！　くう、私は直で告つてくる男としか交際せんぞ!!（恭介が直で告つてくれたら……あの朴念仁にはまずそんな発想自体ないか）」

「そんな風にキツパリ割り切れたらいいんですけど……（直で告らなないとダメ……勉強になりますわ。いつか上条くんに……）」

と、こんな具合にさやかと仁美の好きな男は一致している。取り合いになることは必ずだらう。複雑な三角関係を築くのはいいが、私の関係ないところでやってほしいものである。

「いいなあ。私も一通ぐらい貰つてみたいなあ。ラブレター（でも人に告白されるつていうのは少し怖いかも）」

「ほほう。まどかも仁美みたいなモテモテ美少女に変身したいと。それでリボンからイメチェンですかな？（まあリボン一つで女としての魅力が上がるなら……悪くはないよね）」

「ち、違うよ!?　これはママが——」

「さてはママからモテる秘訣を教わつたな？　けしから〜ん！　そんなハレンチな子は……こうだ！（よーし、マドニウムを補給だ!）」

まあ、間違つてはいない。確かにモテる秘訣は教わっているし、リボンはそのモテる秘訣の一部だ。さやかはまどかに抱きつくと、脇腹をくすぐり始める。

「ちよ、さやかちゃん……やめ！ あははは！（半分図星だから強く言えないよう）」

「はっはっは、可愛い奴め。でも男子にモテようだなんて許さんぞ？ まどかは私の嫁になるのだあ！（うりうりー、ここがいいのか？ こっちか？）」

「おほん、お二人とも、遅刻してしまいますわよ。（なんというか、少し羨ましいですわ）」
仁美に注意され、ようやくさやかはまどかから離れる。時間にあまり余裕がないため、早く学校に行かないと拙いだろう。

「今日は皆さんに大切なお話があります。心して聞くように。目玉焼きとは、固焼きですか、それとも半熟ですか？ はい中沢君！（もう、何なのよあの男!!）」

今日の和子先生は一段と機嫌が悪かった。どうやら三ヶ月ほど交際していた男と些細な喧嘩をし、別れたとのこと。まあその程度の喧嘩で別れるということは、その程度の関係だったということだ。

「えつと……どつちでもいいんじゃないかと……（どういう質問なんだこれ!!） ということかどう答えたら正解なんだ!?!」

「その通り！ どつちでもよろしい！ たかが卵の焼き加減なんかで女の魅力が決まると思ったら大間違いです!! 女子の皆さんはくれぐれも、半熟じゃなきや食べられない

なんてぬかす男とは交際しないように！（あの男、今度あったら叩きのめしてやる）」
「駄目だったみたいですね」

「駄目だったんだね（最長記録もここで打ち止めかあ）」
クラスの全員が苦笑いをするしかなかった。だが、私的にはそんな話どうでもいい。
重要なのはここからである。

「あとそれと、今日は皆さんに転校生を紹介します。（いけない忘れるところだったわ）」
「そっちが後回しかよ！（和子先生相変わらずだなあ……）」
「じゃ、暁美さん、入ってきて（待たせすぎたかしら）」

ガラス張りの教室をぐるりと回るように廊下を歩き、転校生、暁美ほむらは教室に入ってきた。私はその顔を見て素直に驚く。それはまさにまどかの夢の中で化物と戦っていた少女そのものだったからだ。まどかもそれに気がついたのか、とても戸惑っている。

「うおー！ すつげえ美人！（こりや仁美と同等……いやそれ以上かも）」

そんな事情を知らないさやかは、純粹に新たなクラスメイトを歓迎していた。

「それじゃあ、自己紹介いってみましょうか（さて、最初の頑張りどころよー）」

「暁美ほむらです。よろしくお願ひします（今度こそ、絶対貴方を救うから。まどか）」

それを聞いて、私は今日のまどかの夢がただの夢じゃないと悟った。この暁美ほむら

という少女は普通じゃない。体内に秘められた魔力然り、その記憶然り。ほむらはまどかを見つと見た後、視線を私に向ける。そして、少しの間硬直した。

「——ツ!? 何故教室にあんな化物が……というか、他の生徒には見えていないの?」
……ついに私の第三の目が見えるものが現れたか。私は意識を集中させ、ほむらの記憶を探る。そして、後悔した。

この世界に蔓延る魔女を殺す存在、魔法少女。インキュベーターと呼ばれる宇宙人と契約を結んだ少女は一つの願い事と引き換えに人間を辞めさせられ、魔女と戦う責務を負わされる。魔法少女の魂であるソウルジェムが濁りきった時、魔法少女は魔女へと変化を遂げ、世界に絶望を撒き散らす。このシステムを作ったインキュベーターの目的は、希望から絶望へ移り変わる感情をエネルギーに変え、宇宙の延命を図っているのだとか。そして、基本的にインキュベーターはその事実を魔法少女に隠しているのだとか。

ほむらはそんな事実を知りながら、何度も何度も時間を戻し、まどか一人を救うために戦い続ける。数週間後に出現するワルプルギスの夜と呼ばれる巨大魔女を殺すために準備を進めている。時間を止める魔法を使いながら、銃器を武器に戦い続ける。

そんな記憶を見て、私は少し頭が痛くなつた。これから面倒なことに巻き込まれるのか。更に言えば、もしまどかが魔女になった場合、この世界が滅びる。これは今のうち

にまどかを殺しておいたほうがいいのではないかとも思ったが、それをしたら私の命はないだろう。まどかを殺せば私はほむらに殺される。だとしたら、ほむらに協力したほうがいいだろう。

考えを巡らせているうちに、いつの間にかホームルームは終わつたらしい。一時限目が始まるまでの時間に、ほむらはクラスメイトから質問攻めにあつていた。

「不思議な雰囲気の方ですわね。 暁美さん（少しさとりさんに似てますわ）」

「まどか、あの子知り合い？　なんかさつき凄いいガン飛ばされてなかった？（さとりは丁寧系、転校生はクール系ってどこか？）」

「えっと、どうだったかな？（夢の中で、会つたような……）」

まどかが夢で見た光景は、前の時間軸での出来事なのだろう。つまり、あれは実際にあつた出来事なのだ。何故まどかが前の時間軸の夢を見たのかは分からないが、魔力的ななにかだろう。

ほむらはクラスメイトの質問に答えつつも完全にこちらを警戒していた。まあ、仕方のないことだろう。こんな気味の悪い臓器を持ったやつがいたら、警戒して然るべきである。ほむらは私のことを魔女か使い魔か何かだと思つているようだった。

「（あのイレギュラー、まどか達と普通に会話してる……つまりまどかにはあの少女が見えている。もしかして、あの不気味な眼だけ見えませんか？　まどかに忠告したいけ

ど、あのイレギュラーをどうにかするのが先ね。いや、今回はまどかに好意的に近づいて、常時監視したほうがいいかしら。イレギュラーは完全にあの三人の中に馴染んでみるみたいだし」

ほむらはそこまで思考すると、わざとらしく頭を押さえる。

「ごめんなさい。緊張しすぎて……少し、気分が。保健室に行かせて貰えるかしら（なんにしても、まどかからイレギュラーの情報を仕入れるしかないだろう）」

周りが心配する中、ほむらは係の人に連れて行ってもらおうと言つて席を立つ。そして真つ直ぐまどかの方へと歩いてきた。

「鹿目まどかさん。貴方がこのクラスの保健係よね。連れて行って貰える？ 保健室

（まずはまどかをこいつから引き剥がす）」

「えっと、その……うん（どうして私が保健係って知ってるんだろう）」

「私も付いていっていいですか？」

なんにしても、このタイミグでまどかとほむらを二人きりにしないほうがいいだろう。私とその場にいれば、いきなり第三の目のことをバラされることもないはずだ。

「え？（そりやまあ、心強いけど……私一人じゃ会話も続かないだろうし）」

まあ、わかつていたことではあるが、そんな提案をした私に対し、ほむらが最大限の警戒を向けてくる。

「私、保健室の場所知らないんです。いい機会なので一緒に確認にいつても良いですか？」

「そうだっけ。じゃあ一緒に行こっか（私一人じゃ心配だったし、丁度良かった……）」
「構わないわ（こいつ、一体何を考えているの？　まどかに取り入ってなにがしたいの？

なんにしても、少しでも早くまどかと仲良くなつて監視ができるようにしないと）」

廊下に出て、ほむら、まどか、私の順で保健室に向かう。ほむらは既に保健室の場所を知っているためか、なんの迷いもなく廊下を進んでいった。

「えっと、曉美……さん？　もしかして、保健室の場所知ってるのかな……なんて（これじゃ私が先導されてるみたいだよ……）」

「ほむらで良いわよ。早乙女先生から聞いたの。貴方が保健係であること含めて……そうね、いい機会だし、保健室に着くまでの間、軽く自己紹介でもする？（私の対人スキルはあまり高くない。でもまあこうすれば、少しはイレギュラーの情報が得られるはず。取っ掛かりさえあれば……）」

「そ、そうだね。転校してきたばかりだもんね（私もほむらちゃんのこと知りたいし、丁度いいや）」

なんというか、ほむらは案外まどかの香気な性格に救われているのかもしれない。例えばこれで相手がさやかだったなら、今頃必要以上に警戒されているだろう。ほむらは

長い髪を手で掬うように払うと、軽く後ろを振り向いた。

「改めまして、曉美ほむらです。……、……（どうしよう。なんとなく自己紹介しようとしたけど、自己紹介ってどうやってやるんだったかしら）」

名前だけ言って、ほむらは固まってしまふ。一体何なんだこの不器用な少女は。少し可愛いと思ってしまった。仕方ないから少し助け舟を出すことにした。

「変わった名前、ですよ。あ、いえ。別に馬鹿にしているとかそういうのじゃなくて」「……自分でも変な名前だと思ってるから気にしないで（私はこの名前を気に入っている。まどかが褒めてくれた名前だから）」

「ええ、私はカツコイイと思うけどなあ。なんか燃え上がれ、って感じで（クールな感じのカツコイイほむらちゃんにピッタリの名前だよ）」

まどかがそう言うのと、ほむらは少し頬を染める。そうか、ほむらにとっては、まどかは自分の命と引き換えにしても守りたい友達で。だけど、時間を繰り返すことに認識が噛み合わなくなってくる。

「じゃあ、今度は私だね。私の名前は鹿目まどか。みんなからはよく不器用って言われちゃうけど、仲良くしてね？（ほむらちゃんと仲良くなれるといいなあ）」

「ええ、よろしく（さて、次が問題の……）」

ほむらはなるべく表情を変えないように取り繕いながら、私の方を見る。いや、正確

には私の第三の目を見た。

「古明地さとりです。この学校には先週転校してきました」

「そう。転校生同士仲良くできると良いわね。……失礼を承知で聞くわ。貴方、それは？（もしかしたら黙認されているだけのただの痛いコスプレ少女かも知れない。それとも使い魔に取り憑かれているとか？）」

コスプレ少女……散々な言われようだ。まあそれで誤魔化すこともできるかもしれないが、私は敢えて含みを持たせて言った。

「……なんの話ですか？もしかして、私の顔に『何か付いて』いますか？」

「——ッ!? ……いえ、私の気のせいよ。（やはり、アレはまどかには見えていない。しかも、古明地さとり自体はあれが見えていると考えるのが妥当ね。やはり彼女は人間ではない。でも、なんでそんな存在が学校に？）」

ほむらはそこまで考え、もう一度第三の目に視線を落とす。

「(なんとというか、『気持ち悪い』わね)」

……まあ、普通の感性を持ち合わせていたらそう感じるだろう。

「そういえば、今日の放課後は空いているかしら。ずっと入院していたせいであまり見滝原は分からないの（なんにしても、今日、まどか達は魔女の結界に迷い込んでしまう。

ここは少し無理やりにもまどか達についていきましよう）」

「今日はみんなで放課後お茶する予定なんだ。ほむらちゃんもおいでよ！（ほむらちゃんも積極的だね。これは早く仲良くなれそう！）」

まどかは凄く楽しそう。だが、特殊な事情を抱えている私とほむらは純粋に楽しむこともできない。まどかはここにはいないさやかと仁美のことを楽しそうにほむらに話し始める。そうしているうちに、私たちは保健室にたどり着いた。

「ここが保健室だよ。ほむらちゃん、さとりちゃん（あれ？ 保健の先生いない）」

まどかは保健室の中に入り、部屋の中を見回す。どうやらいつもならここに保険の先生がいるらしい。今は何処かへ行っているようだった。ほむらはまどかに続いて保健室に入ると、まどかに軽く頭を下げる。

「ありがとうございます、まどか。先生が来るまでここで待ってるわ。授業に遅れたら悪いし、貴方は教室に帰りなさい（まどかを連れ出す口実作りだったから、体調は別に悪くないのよね）」

「うん。また後でね！ じゃあさとりちゃんも行くっか（ほむらちゃん、大丈夫かな？ すぐ戻ってこれるよね？）」

私がまどかに続いて保健室を出ようとしたとき、ほむらがボソリと私に囁きかけた。その声はとても小さく、私が妖怪じゃなかったら聞き取れなかっただろう。

「わかっているでしょうね（こいつに構っている時間はない。まどかに危害を加えるつ

もりが無いのなら、排除する必要もないだろう)」

「私はあえて第三の目をほむらに合わせる。ほむらはそれを了承と受け取ったのか、ベッドに腰掛けそれ以上追及してくることはなかった。」

「くっそ〜文武両道、才色兼備、完璧か！ パーフェクトなのか!? ごふっ……（机にぶつけた頭痛い）」

放課後に寄った飲食店で、五人揃ってお茶をする。話題は自然と転校生のほむらに向いた。

「でも本当に羨ましいですわあ（でも一番羨ましいのは、そのストレートの髪ですわね）」
「そんなことないわ。それに、文武両道才色兼備なのは仁美のほうじゃない？ 私なんて仁美に比べたらまだまだよ（一番行動が読めないのは、古明地さと。先程から全く喋ってないけど、話を聞いてないということはなさそうね）」

ほむらはさやかや仁美と話しながらも、意識はこちらに向けている。ほむらの言う通り、話を聞いていないわけではない。

「そういえばさ。ほむらとまどかは知り合いだったりするの？ ホームルームの時に見つけ合ってたけど（いや、どっちかというと睨まれてたけど）」

ふと、さやかが核心を突くようなことを言う。ほむらはそれを聞いてピクリと反応するが、話すつもりはさらさら無いようだった。

「えっと、常識的にはそのはずなんだけど……（夢の中で会ったなんて言えないよね）」
「早乙女先生から保健係と聞いていたから。確認していたのよ（やつぱり目につく行為だったかしら）」

このほむらという少女。やはり場数を踏んでいるだけあってその場その場の対処が上手い。？をつくときに不自然な仕草が全くないのだ。

「あら、もうこんな時間……ごめんなさい。お先に失礼致しますわ（本当はもう少しご一緒したいのですが……）」

不意に仁美が時計を確認し、席を立つ。どうやら、習い事があるらしい。仁美はテキパキと自分の席を片付け始めた。

「今日はピアノ？ 日本舞踊？（私達もボチボチ移動しますかね。恭介にあげるCDも見たいし）」

「お茶のお稽古ですわ。もうすぐ受験もあるのに、いつまで続けさせられるのか（本当は勉強したいわけではないのですが……）」

そう言つて、仁美は隠すようにため息をつく。無理矢理作つた苦笑いがなんとも痛々しかった。

「小市民に生まれてよかったわあ（私だったら死んじやうね）」

さやかも苦笑いを浮かべながらケラケラと笑う。表面上はおちやらけているが、内心は仁美に同情している。仁美の苦労をある程度わかつているようだ。

「私達も行くつか（ほむらちゃんに見滝原を案内しないといけないしね）」

まどかが提案し、皆席を立つ準備を始める。そんな中、警戒心を強める者がいた。そう、暁美ほむらだ。

「（この後、このショッピングモールに魔女の結界が現れる。まどかが巻き込まれないようにしなければ）」

ほむらは残ったコーヒーを飲み干すと、自分のトレーの上を軽く整理する。

「みんな、この後CD屋に寄っていい？（いいCDがあるといいけど……）」

そんなほむらの心配とは裏腹に、さやかはこのショッピングモールに留まることを提案する。

「私はいいいけど……他のみんなは？（多分上条くんへのプレゼントを買いに行くんだよね）」

「いいわよ（無理やりショッピングモールから引きずり出すのも反感をかうわね。私が常時監視していれば問題ないか）」

「はい。構いませんが」

仁美と別れ、私たちは四人でCD屋に入る。先程思考していた通り、さやかは上条恭介という男子生徒へのプレゼントを見繕いにクラシックコーナーに向かう。ほむらはこのように、まどかにべったり張り付いて一緒にCDを見ていた。本人は監視していると自分に言い聞かせているが、アレは確実に楽しんでいる。私はというと、CDのジャケットを眺めていた。

このまま何もなければなんの問題もないのだが、そうもいかないらしい。まどかはず意にヘッドホンを外すと、キョロキョロと辺りを見回し始めた。

「誰？ 誰なの？（誰かが助けを呼んでる……助けてって……）」

ほむらはまどかの変化をいち早く感じ取り、警戒心を強くする。

「まどか？ ——つ、まどか、どうかしたのかしら？（インキュベーター、まどかを誘き出すつもりね。そうはさせないわ）」

まどかの思考を読む限りでは、何者かがまどかを名指しで助けを求めているらしい。ほむらの予想が正しければ助けを求めているのはインキュベーター。あの例の夢に出てきた猫のような何かだ。

「誰かが私に助けてって。私、行かなきゃ……（急がないと）」

「まどか、貴方疲れているんじゃない？ 私にはそんな声——」

「で、でも！ 急がないと!!（間に合わなくなっちゃう!）」

まどかはかなり焦っているようにも見える。ほむらは深くため息を着くと私の方をちらりと見た。

「古明地さん、美樹さんとここで待っていてもらって良いかしら。まどかと私で行ってくるわ（私が一緒にいれば、上手く近づかないように誘導できる）」

「何か用事ですか？ なんにしても、待っているだけでいいんですね？」

「ええ（ついでにイレギュラーの排除もできるし、一石二鳥だわ）」

やっぱりそれも目的の一つか。まあ彼女にとって私は不気味で得体の知れない存在でしかない。その反応は妥当だろう。

まどかはほむらの手を取ると、CD屋を出て行く。その様子を見ていたのか、さやかが小走りでこちらに駆け寄ってきた。

「なになに？　なんかあったの？（今まどかがほむらを引っ張ってCD屋を出ていったような）」

「用事だと言っていました」

「そんなのんきな様子じゃなかったけど。それこそ、何処かで事故でもあったみたいに（私もついていかなきゃ）」

「戻ってくるまでここで待ちませんか？」

一応提案をするが、説得するのは不可能に近いことはわかっている。さやかは人の話

を聞かないし、信じない。

「いや、まどかに何かあったら、私はきつと一生後悔する。ちよつと行ってくる！(何も起こらなければいいけど……)」

「私も行きます」

走り出したさやかを追うようにして私も走り出す。もうこうなつてしまつたら行くところまで行こう。

「私を呼んだのは貴方なの？」

上手く誘導するつもりだったのだが、インキュベーターに先回りされてしまつたようだ。まどかは優しい手つきでインキュベーターを持ち上げる。インキュベーターは傷だらけの体を震わせ、気絶しているようだった。次の瞬間、インキュベーターの思惑通り、魔女の結界が展開された。

「何？ 一体何なの!？」

「……仕方がない。まどか、それを守りながら目を瞑つてて！」

私は咄嗟に変身し、時間を止める。そして盾から89式小銃を取り出した。マガジンを装填し、コッキングレバーを引く。ガシャンという薬室に弾薬が装填される小気味よ

い音を確認してから、セレクトターレバーを一杯まで回し、5. 56 mmの鉛と銅の塊を一発ずつ使い魔に撃ち込んでいった。全部の使い魔に弾丸を撃ち込んだことを確認し、小銃を仕舞って時間停止を解除した。

「きゃああああ!!」

まどかの悲鳴と共に音速を超えた鉛の弾が一斉に使い魔を駆逐する。私はまどかが顔を伏せているうちに変身を解いた。魔女は逃げたようだ。

「あ……ああ……ほ、ほむらちゃん。無事?」

何が起きたのか認識できていないまどかはインキュベーターを抱えながらオロオロしている。私はまどかからインキュベーターを取り上げ、ソウルジェムを取り出して治療した。

「えっと、ほむらちゃん。さっきのは一体……」

……こうなってしまうては隠す必要もないだろう。インキュベーターと接触してしまった時点で、遅かれ早かれまどかは魔法少女について知ることになる。

「助けてくれてありがとう。君は魔法少女のようだけど……」

体が回復した途端、インキュベーターは話し出す。その様子にまどかは凄く驚いていたが、先程よりかは落ち着いているようだった。

「ほむらちゃん、魔法少女って?」

「魔女を退治する者のことさ。先程のは魔女が生み出した使い魔のようだったけど、それでもあの速度で全滅させるとは……君は随分ベテランの魔法少女のようだね」

「ほむらちゃんも魔法少女なの？」

「僕の記憶が正しければ、僕はまだ君と契約を結んでいないはずなんだけどね。でも君は間違いなく魔法少女のようだ。一体どんな手段を用いて魔法少女になったのかは分からない。でも君から言わせたら、君は僕と契約をしたんだろう？　僕が覚えていないだけで」

「えつとつまり……？」

私はまどかの手を握ってまどかを引き起こす。

「そうね。説明するわ。でも、ここは危ないから違う場所で。キュウベえもそれで良いでしょう？」

「僕は別に構わないけど……魔女を追わなくていいのかい？」

「まどかを危険に晒してまで追いかけるような相手じゃないわ。それよりバママミは？」

どの時間軸でも、バママミはこの場にいたはずだ。このように私がまどかを助けるとい
うのは珍しい展開と言える。

「ママミのことも知っているんだね。ママなら近くまで来ているよ」

やはり、バママミも来ているのだ。では、何故ここにいないのか。……少し嫌な予感が

する。

「キュウベえ、バマミのところまで案内しなさい」

「ほむらちゃん、さやかちゃん達と合流するのを優先したほうがいいんじゃない——」

「だからこそよ。もしかしたら……バマミに襲われている可能性がある」

「はあ……はあ……もう、さやか……少しはペースを考えなさいよ」

先程まではなんとか追いつけていたが、完全にはぐれてしまった。あまり体力はないので、もう少しペースを考えて欲しいものだ。私は人気の全くないシヨツピングモールの裏側を一人歩く。暫く歩いていると、明確な敵意を読み取り、ゆつくりと両手を挙げた。

「私に敵意はありません。人に害を与えません。見逃して頂けないでしょうか」

四十メートル先から私を照準している存在がいる。私が声を掛けたことで、私の後方に凄いい速度で移動し、私の後頭部に銃口を突き付けた。

「信用すると思つて？（人の言葉を喋る魔女？ 魔力は感じるけど魔法少女ではない。どちらかというと魔力の質は魔女のそれ。それに、あの不気味な目玉。人間ではないことは明らかね）」

なんとも面倒くさい展開ではあるが、そこまで危機的な状況ではない。私はこの少女を知っている。今、私にマスケット銃を突き付けている少女、巴ミミを知識として知っている。それに、少し離れたところでは、さやかが消火器を持ってスタンバイしていた。どうやら私を助け出す機をうかがっているようだ。私は後ろを振り返ろうとするが、ミミは更に強く銃口を押し付けた。

「動かないで。少しでも長生きしたいならね（なんにしても、不意打ちを受ける可能性もある。ここで始末しておいたほうがいいかしら）」

「得体の知れない存在は全部敵って事ですか。いじめられっこの発想ですね……さやかッ!!」

私はさやかに合図を送るように声を張ったあと、さやかがいる方向とは全く反対の方向を振り向く。ミミがつられてそっちの方向に振り向いた瞬間、さやかの消火器が炸裂した。

「さとリッ！（ナイスだよ！）」

さやかがミミに消火器を投げつけ、私の手を取って走り出す。だが数メートル走ったところで体に何かが巻き付き身動きを封じられた。まあ、ミミのリボンなのだが。いくら攻撃を読むことができたとしても、避けれるとは限らない。

「逃がさないわよ……（あの青髪の子、魔力を感じない。まさか一般人？）」

ママはマスキット銃を私に向ける。指は既に引金に掛かっていた。

「なんだよあんた！ コスプレで通り魔かよ！ さとりが一体何を……（やばいよあの
人、完全にさとりを撃つ気だ。でも、身動きできないし……）」

さやかは何とか抜け出そうと体を振る。……面倒くさいが、この状況を打開する必要
があるだろう。頭の中で策を組み立てる。……よし、なんとかなるか。私はまず一つ目
の手札を切った。

「もう逃げません。逃げる気もありません。彼女だけでも解放してください。さやかに
は、手を出さないで……」

私は若干掠れた声でママに懇願する。目に涙は……少し厳しいか。

「さとり！ あんたなんてことを！（なんでそんな諦めたような目をしてるの？）」

ママは警戒するような目つきで私を見たあと、私とさやかの拘束を解く。いや、私の
両腕は後ろで縛られたままだったが。なんにしてもこれで少しは拘束が緩んだ。特に
さやかが自由に動けるようになっただけでも大きい。私はそのまま膝をつく顔を伏
せた。

「……（一体何を考えているの？ こいつの目的は一体何？）」

ママは私の頭にマスキット銃を突きつける。さて、第二段階だ。私は二つ目の手札を
切った。

「さやかさん……ごめんさい。目を、瞑つては頂けないでしょうか。見せたくないから……さやかさんには。私が死ぬところなんて……」

そう、私がマミに植え付けようとしているもの。それは罪悪感。マミはこういつた悲劇のヒロインが出てくる作品が好きなようだ。だからこそ、そういった作品に重なるように演技を続ける。

「……っ、さとりいつ……（なんで……こんなことに……）」

「——ッ（何よこれ。私、完全に悪役じゃない!）」

さて、これでよし。これで簡単には私を撃てなくなった。別に私はマミを再起不能にしたいわけじゃない。ただ、少し時間を稼げればそれでいいのである。何故なら——

「一体何をしているのかしら、巴マミ（私の悪い予感がここまで正確に当たるなんて……）」

気がついた時には、私はさやかの横にいて、腕の拘束が解かれていた。マミはいきなり目の前から私がいなくなったことに驚きつつも、声のした方向にマスケット銃を向ける。

「こつちよ（まずは対等な立場で会話ができる状態を作らないと）」

「——ッ!?!（え? 反対!?!）」

だが、声がした方向の反対から、ほむらは9mm拳銃を突き付けた。マミは咄嗟に反

転しようとするが、ほむらは更に強く拳銃を突きつける。

「動かないで。変身を解きなさい（いつでも時間を止められるようにしておかないと。この人だけは油断できない）」

「気がついてないのかしら。セーフティが掛かつてるわよ？（一度言ってみたかったのよね。これ）」

ママはほむらの視線を逸らすべく、銃に意識を向けさせようと声を掛ける。だが、ママの試みは無意味に終わった。

「9mm拳銃にセーフティはないわ。少なくとも、貴方が期待するようなものはね（多分言ってみたかっただけでしようね）」

「……（何よそれ！ 完全に私恥ずかしい子じゃない！）」

恥ずかしさのあまりか、ママは変身を解いてからほむらの方を向く。

「貴方もアレの肩を持つつもり？（この子、魔法少女ね。それもかなり腕の立つ）」

「少なくとも、まだ何もやってないわ（殺しておきたい気はあるけど、今殺すのは拙い。まどかは古明地さとりに入れ込み過ぎている。今古明地さとりがいなくなれば、彼女を生き返らせる為に契約しかねない）」

ママの意識が私から外れたのと同時に、まどかがこちらに走ってきた。

「さとりちゃん！ 大丈夫!?（どうしてこんな酷いことをするの？ さとりちゃんが—

体何をしたっていうの?」

まどかは地面にペタンと尻もちをついている私の手を取ってゆっくり起き上がらせる。さやかは私とまどかを守るようにその前に仁王立ちした。

「まずいよマミ。ここは一旦引いたほうがいい。それが双方のためだ(古明地さとり、暁美ほむら、彼女たちは完全にイレギュラーだ。ここでマミを潰されるのは勿体無い)」

キュウベえがスルリと現れ、一瞬ほむらの射線に入る。その一瞬のうちにマミは変身し一氣に距離を取った。

「貴方達、この得体の知れない化物の肩を持つっていうの? どう見ても人間じゃないじゃない(まさか私以外に見えていないとかないわよね?)」

マミは私を見て叫ぶ。それを見て、まどかとさやかは不可解な顔をした。まあ、第三の目が見えてないなら当たり前か。

「なんでさととりちゃんが酷いこと言うの? 貴方の言ってること、全然理解できない(さととりちゃんが人間じゃない?)」

流石に少し不憫になってきたのか、ほむらは小さくため息をついたあと、マミに助け舟を出した。

「……魔女は逃げたわ。追わなくていいのかしら(まさかこんな展開になるなんて)」

ほむらはじつとマミを見つめる。マミは少し後ずさりしたが、すぐに言い返す。

「私があるのは——」

「飲み込みが悪いわね。見逃して上げるって言ってるのよ。多分、貴方が勘違いをしているわ。そんな状態で話し合っても、余計なトラブルを生むだけよ（いつか、同じようなことをママから言われたわね）」

ママは諦めたようにため息をつくど、踵を返してその場を去っていく。ほむらはペタンと座り込んでいる私を軽く睨むと、ママと同じようにため息をついた。

「ママの名誉のために言っておくと、別にママは悪い人間じゃない。今回は双方の認識の違いによって生まれたことでしかない。あれでも普段は優しすぎるほど優しい人間だよ（魔法少女の手法のような魔法少女だからね。できればまだか達にはそちらを参考にして貰いたいんだが）」

キユウベえがまどかのほうを見ながら喋りだす。

「なんにしてもだ。僕、君たちにお願いがあって来たんだよ。僕と契約して、魔法少女になってよ！（美樹さやかはともかく、鹿目まどかの素質は凄まじいものがある。彼女が契約すれば、宇宙の熱的死を回避できるかも知れない）」

その顔は軽く微笑んでいるようにも見えたが、そこに感情は感じられない。まるで思考する機械を見ているような、不思議な感覚だった。

第二話「でもそれ大迷惑なのわかってます?」

「改めて、自己紹介をしておくわ。私の名前は暁美ほむら。この街に引っ越してきた魔法少女よ（まさか私が魔法少女の説明をすることになるなんてね）」

あの後私たちはほむらに連れられて、ほむらの家に来ていた。魔法で内装をいじつてあるのか、ほむらの家は見かけよりも内部が広い。私とまどかとさやかか三人は、ほむらに案内されるままにテーブルについていた。ほむらはというと、キッチンでいそいそとコーヒーを用意している。その様子はどこか楽しそうだった。

「ほむら、魔法少女っていったいなんなの？ アニメや漫画みたいなアレ？（もしそうだとしたら、女の子の憧れの存在だよな。って、もうそんな歳でもないか。将来の夢は魔法少女ですって言えるのは幼稚園までだよな）」

こだわり派なのか、豆からコーヒーを抽出しているほむらに対し、さやかがもつともな質問をした。これぐらいの歳の女の子にとって、魔法少女というのは遠いようで身近な存在だ。

中学生にもなつて魔法少女に憧れている者は中々いないだろうが、そこに夢を持つ者はいらるだろう。だが、ほむらはそんな夢い中学生の夢を木っ端微塵に粉碎した。

「そうね。返しきれない借金を抱えた中年オヤジのようなものよ。多額の生命保険を掛けられて、死ぬことを期待されているね（魔法少女に憧れなんか、持たせちゃいけない）」
ほむらの説明はどこまでも的を射っていて、それと同時に大人気なかった。まあほむらは子供だが。

「ええ〜……（なんか夢が壊れるよう）」

「なんか思ってたのと違う。魔法少女つてもつと夢のあるものなんじゃないの？（少なくとも、クールな転校生には似合わない程度には可愛らしい衣装だったような）」

ほむらがコーヒートを配り終わると、机の中央に置いてある角砂糖の入った瓶に手を伸ばす。皆思い思いにコーヒーの中に砂糖を入れた。

「簡単に、魔法少女に関して説明するわね。キュウベえ、なにか間違っていたら訂正して頂戴（でも、ちゃんと説明しないと、この子達は納得しないでしょうね）」

「わかったよ（僕から説明してもいいんだけど。どうも暁美ほむらは二人を魔法少女にしたくないらしい）」

ほむらは指輪の形になっているソウルジェムを本来の形に戻し、机の上に置く。ほむらの記憶を探る限り、あれはほむらの魂らしい。

「これが魔法少女、ソウルジェム。キュウベえはどんな願い事でも一つ叶えてくれる。その代償に、私たちの体の中からコレを抜き出すの。魔法少女の仕事は、このソウル

ジエムを濁らせないことよ。ソウルジエムは魔力を使うと濁りを溜めていく。その濁りを浄化するのに必要なのが——」

ほむらはポケットの中からグリーンフシードを取り出し、ソウルジエムの横に並べた。

「この、グリーンフシードってわけ。でも、グリーンフシードを入手するには魔女と呼ばれる化物を狩らなきゃいけない。勿論、命懸けの戦いよ（嘘は言っていないわよね。というか、こつちのほうが真相に近いし）」

「それを浄化するのが仕事って……濁りきつたらどうなるの?（あんまり、良い予感はないな）」

さやかはじつとほむらのソウルジエムを見ながら聞く。ほむらは少し迷ったように視線を泳がせたが、まどかの目を見て決意を固めたようだった。

「ソウルジエムが濁り切るといふことは、与えられた責務を全う出来なかったということ。その時は、死よりも重く、残酷な罰が与えられるわ。たった一度の奇跡のために、人生を捧げることになる。それが、魔法少女というものよ（間違っていない間違っていない）。どうか、少し話しすぎたぐらいかしら）」

「そんな……（酷すぎるよ、こんなものってないよ!）」

「……（願い事って聞いた時は少しときめいたけど、そんなの、本当に借金をするようなもんじゃん。あまりにも、代償が重すぎる）」

まどかときゃかはじつとほむらのソウルジエムを見つめることしか出来なかった。あまりにも痛々しすぎて、ほむらの顔を見ることが出来ない。そんな中、ほむらは淡々と続ける。

「魔女との戦いというものも、楽ではない。怪我なんて日常茶飯事だし、戦いの中で死ぬ魔法少女もいる（実際、マミやさやかはよく死んでるし）」

「……ほむらちゃんは、その……誰かが死ぬところを何度も見てきたの？（私、なんでこんなこと聞いているんだろう）」

まどかがそんな質問をした理由。それは、魔法少女への憧れからだ。少しでも魔法少女という存在に希望を持ちたい。

「そうよ（まどか、なんでこんなこと聞くのかしら）」

「何人ぐらい？（一人か、二人ぐらいだよね？）」

だからこそ、次のほむらの回答に、まどかは大きなショックを受けた。

「数えるのを、諦める程（何度ループしたか、もう覚えてないわ……）」

今度こそ、まどかはほむらの顔を見れなくなつた。痛々しい沈黙が続くが、不意にキュウベエが空気を読まずにまどかに言った。

「まどか、願いが決まったらいつでも言ってくれ。待つてるからね（暁美ほむらの説明は中々の射っていた。まるで全てを知っているかのよう）。僕はほむらと契約した覚

えはないし、やっぱり彼女はイレギュラーだ)」

「キュウベえはなんでそんな酷いことをするの? (キュウベえが女の子をそんなことにしちゃうんだよね?)」

「それはあらぬ誤解だよ。僕は契約を強要することはないし、対価として願いを叶えているんだ (まあ、普段はここまでデメリットの説明はしないけど)」

「そう、自業自得。私も、さつき会った巴マミもね (マミのフォローはしておくべきかしら。あの人メンタル弱いから)」

ほむらはソウルジエムを指輪の形に変化させ、席を立つ。

「(次は……古明地さとり。貴方の番よ)」

逃げることも出来るかも知れないが、時間を止めれる相手から逃げられるわけがない。私は拘束されることを承知の上で椅子に座り続けた。ほむらは私の後ろに回り込むと、第三の目を掴む。そしてそれをキュウベえの前に突き出した。

「貴方には見えているのでしょうか? (私たちに見えているのなら、こいつにも見えているはず)」

「ああ、そのことだね。勿論見えている。僕からも説明が欲しいものだよ。古明地さとり、君は一体何者なんだい? (人間にあのような器官はない。それに、少なからず魔力を持っているようだ)」

ほむらとキュウベエの言葉を聞いて、まどかとさやかは不審な顔をする。いや、さやかに至っては椅子から立ち上がり怒鳴っていた。

「あんたたち、またそんなわけわかんないことを！ さっきの人もそうだけど、さとりが一体何をしたっていうの!?(さっきなんて、殺されかけたっていうのに……)」

さやかが怒ったことよって、ほむらの疑念が確信に変わった。

「そう、あなた達には見えないのね。古明地さとり、彼女は三つの目を持っている。頭に二つ、そして、ここに一つ(触ってみてわかったけど、この目は飾りでもなんでもない。確実に生きている)」

さやかは恐る恐るほむらが握っている第三の目に手を伸ばす。そして指先が第三の目に触れた瞬間、小さい悲鳴と共に手を引つ込めた。

「確かに、何かある。目には見えない何かがある、そこに……(さっきのバママミって人には、それが見えていた？ それで使い魔か魔女と間違えたとか?)」

さやかは得体の知れないものを見るように私から少し遠ざかる。まあ、当たり前だ。今まで人間だと思っていたものが、実は全く別のものなのかもしれないのだ。

さやかは反応はもつともなのだが、まどかはその様子が気に入らなかつたらしい。まどかは勢い良く立ち上がると私の手を掴んで部屋の隅に連れて行く。そして私を部屋の角に座らせると、私を守るように前に立った。

「さとりちゃんをいじめないで! 確かに、みんながそう言うなら、さとりちゃんは人と違うのかも知れない。でも、だからなんなの? 人と違うから、いじめられないといけないの? 傷つけられないといけないの? そんなの、私は違うと思う(もし、それでもみんながさとりちゃんをいじめるとしたら、私が、さとりちゃんを……守る!!)」

この少女は、本当に……。あまりにも優しすぎて、暖か過ぎる。ほむらはそんなまどかの様子に大きく狼狽した。

「ま、まどか、違うのよ。別に私はさとりに危害を加えるつもりなんて……。いけない。このままじゃまどかに嫌われてしまう)」

「そうさ。それにバママミが彼女に銃を向けたのだって、半分以上勘違いによるものだ。今後こんなことが起こらない為に、彼女の口から事情を聞きたい(イレギュラーの情報は少しでも多いほうがいいからね)」

ほむらとキュウベえが必死にまどかに言い訳をする。そんな中、さやかだけは黙ってじっと私の目を見ていた。

「(なんだろう。まどかはあんなに必死なのに、さとりからはまったく『危機感』というものを感じない。まるで嫌われることが当たり前かのような、そんな諦めた目をしてる)」

うん、正解。嫌われるのは慣れている。だからこそ、人と仲良くしようとも思わない。

だから私は後ろからまどかに抱きつき、そつと声を掛けた。

「ありがとう、まどか。でも、もういいわ。貴方にまで迷惑が掛かってしまう」

まどかの横をそつとすり抜け、ほむらの前に入る。私は体中に魔力を満たし、その場に浮いた。

「確かに、私は人間ではない。どちらかと言えば、魔女に近い存在です。まどか、今まで黙っていてすみませんでした」

キュウベえとほむらはその様子を興味深く観察している。キュウベえは、私と契約できないか思考し、ほむらは魔女退治の戦力として使えないかと思考していた。

「じゃあ、交換学生って話は嘘だったってわけ？（それとも、人間じゃないって向こうでバレて、こつちに引つ越してきたとか？）」

さやかが、怪しむような視線を向けてくる。だが、この質問は私にとって好都合だ。私は地面に降り立つと、先程と同じように椅子に座った。

「ええ。私は交換学生なんかじゃありません。というか、その辺は私もよくわかっていないのですよ」

この際だから、読心能力のことだけ伏せ、全部話してしまおう。今は協力者を得たい。

「ふうん、じゃあさとりもよくわかってないんだね。今の状況が(にしては、この世界に馴染み過ぎてる気はするけど)」

さやかは机にぐだりと伏せる。机の上に置かれたコーヒーカーップはすっかり空になり、茶色い跡をカップに残していた。

「はい。地霊殿での仕事もあるので、あまり長いことここにいるわけにもいかないんです。早く原因を究明しないと」

「キュウベえ、この世界に本当に『幻想郷』という場所はあるの? (もしキュウベえが幻想郷を知っているのなら、信憑性は出てくる)」

ほむらが幻想郷のことをキュウベえに聞く。それは私も疑問に思ったことだった。もしこの世界が幻想郷と地続きなら、戻れる可能性も出てくる。

「そうだね。昔は確かに幻想郷という土地はあった。日本の年号でいうところの、明治の初期からぶつり情報が途切れるけど、明治政府の書類にも幻想郷の文字は確認出来るよ(まさか彼女が幻想郷の関係者だったとは。八雲紫には幻想郷に手を出すなど釘を刺されている。ここは下手に関わらないほうが良さそうだ)」

キュウベえの思考を読んで、私はとりあえずホツとした。少なくとも、キュウベえは幻想郷のことを認知しているらしい。そして、最悪キュウベえを通じて八雲紫にコンタクトを取ることができそうだ。地上の管理者である八雲紫に借りを作るのは正直避け

たいが、とりあえず何とかなる可能性は出てきた。

「だとしたら、昼に襲ってきたそのバمامィって人は何なの？ あいつも魔法少女なんだよね？（さとりに対してわけも聞かずに問答無用だった。酷いにも程がある……）」

バمامィの名前が出てきて、ほむらが少し苦笑いする。キュウベえもやれやれといった仕草で頭を振った。

「多分あれは、完全な勘違いよ。バمامィは人の為に魔女を狩り、この町の為に尽くしている。自分のソウルジエムを浄化するだけでなく、人に害をなす使い魔も丁寧に狩る優しい人よ（それ故に、古明地さとりに対して銃を向けたとも言えるけど）」

「مامィのような魔法少女は珍しいんだ。基本的に魔法少女は自分のためにしか戦わない。まあ、他人に構っているほど余裕がないだけでも言えるが（本当なら、まどかときやかはمامィと接触させたかった。ここで彼女に対してマイナスなイメージを与えるべきではないだろう。مامィは仲間を欲していたから、きつと上手い具合に勧誘してくれると思ったんだが……）」

「ふうん、なんか思ってたのと違うな。じゃあさとりを生えてる目玉を見て、敵だっと思っただってことでしょう？ マミってやつがいい人だっというのは何となくわかるよ。二人の話し方を聞いてれば。でも、その勘違いって解けるものなの？（また襲われたら、今度こそさとりは殺される）」

さやかなの意見を聞いて、ほむらは押し黙った。ほむらの頭の中には、巴マミが錯乱し、仲間の魔法少女を撃ち殺す光景がフラッシュバックしている。その他にも、他の時間軸では敵対していたことも多いようだ。

「それは僕から説得するよ。マミがさとりを攻撃した一番の理由はさとりの正体が全くの謎だったことだ。事情を説明しさえすればマミだってわかってくれるはずさ（今のままでは二人の契約は絶望的だからね。なんとしても状況を動かさないと）」

キユウベえとしてはなんとしてもまどかとさやかを魔法少女にしたいらしい。だが、私としてもまどかが魔法少女になってもらっては困る。もしまどかが魔法女になったら幻想郷も危うい。地底にも影響が出るだろう。さやかは結構どうでもいいが、死なれては困る。まどかが魔法少女になる大義名分を与えてはいけないのだ。

「じゃあマミってという人とも仲良くできるんだ。よかつたあく（みんな仲良くが一番だよね!）」

「まどか……あんたってやつは……」

「（優しくすぎるといいうのも、この子のためを思うと考えものね）」

「（この優しさは利用できる。これはこの星でのノルマ達成も近いかな?）」

まどかの呑気な意見に皆が脱力する。まあ、私としても自ら進んでマミと敵対する気もないし、まどかに同意見だった。

「つていうわけなんです。ママさん！ さとりちゃんも仲良くできませんか？（話し合いで解決できるなら、それが一番良いかなって）」

誰もいない見滝原中学校の校舎の屋上に、まどか、さやか、ほむら、ママ、そして私が集まっていた。まどかは必死な顔をしてママを説得しようとしている。だが、説得するまでもなく、ママはほむらが思っている通りの優しい先輩だった。

「事情は分かっていたわ。ごめんなさい、確認も取らずに銃を向けたりして（仕方がないじゃない。油断したら死ぬ世界なんだし）」

「いえ、私は大丈夫です」

そもそも、頭に穴が開いた程度では死ねないが。まあそれは言うべきことではないだろう。

「誤解が解けて何よりだ。僕としても、まどかとママには仲良くしてもらいたいと思ってるんだ。ママ、紹介するよ。こっちの子が鹿目まどか、そしてこっちが美樹さやか。二人とも魔法少女の素質を持っている。先輩としていろいろ教えてあげて欲しいんだ（ママと関わることで、二人の考えが変わるかもしれない。そうなれば、契約も視野に入れることができる）」

キュウベえがそう言った瞬間、ほむらの表情が固くなる。

「キュウベえ、魔法少女に關しては私から説明したはずよ。二度手間になるだけよ（インキュベーター、やつぱりここで仕掛けてくるか）」

ほむらがそう言うて釘を刺すが、キュウベえは聞く耳を持たない。

「魔法少女に対する考え方は人それぞれだからね。多くの魔法少女の意見を聞いたほうがいいと思うんだ（やはり暁美ほむらは二人の契約を阻止しようとしている。これはソウルジェムの秘密や魔女化の真実を知っていてもおかしくはない）」

「ママは少し眉を顰めてキュウベえとほむらを見る。そして、小さくため息をついた。魔法少女について説明するのは構わないけど……暁美さん、あなたの顔を見る限り、どうも私に説明して欲しくないみたいね。何か理由があるの?（この暁美ほむらという魔法少女がどういった考えを持っているか分からない。自分のためだけに魔女を狩るような魔法少女だったら……私、仲良くできる自信がないわ。それに、古明地さとりを信用したわけでもない）」

「別にそんなことはないわ（あまりママに説明させたくない……ママは魔法少女というものに希望を持ちすぎている。説明するにしても、魔法少女の綺麗などころしか語らない。いや、綺麗などころしか知らない為、綺麗なことしか語れない）」

「ママは次はじつとほむらだけを見た。まるで私と同じように、ほむらの心を読んでい

るかのようにな。

「……そうね、ここでつてわけにもいかないから、今日の午後、魔女探しをしながらしない？（先に暁美さんに話を聞いたほうがよさそうね。何か訳ありみたいだし。それに、一度暁美さんがした説明をキュウベえが私にもしてほしいというのも不思議な話ね）」

「……まどかたちを魔女退治に連れまわすつもり？ そんな危険なこと私が許さないわ（また魔法少女体験コースなんて言い出したら、今度は私が首を刳り取つてやるわ）」

「勘違いしないで。戦闘に巻き込むつもりはさらさらないわ。魔女の結界の中には私一人で入る。ただ家でのんびり説明している時間はない、ということよ。見回りは欠かせないからね。昨日逃がした魔女も気になるし。あの魔女が人を殺さないとも限らないから……（貴方の為に時間を伸ばしているのだから、こちらの意図も組んでほしいものね）」

ほむらはマミとじつと睨みあう。次の瞬間、マミが不敵にほほ笑んだ。

「私としても、貴方とは仲良くしたいと思っっているのよ？ 貴方がどう思っっているかはわからないけど（魔法でリボンを作り出し、刺繍を施してつと『十五時、屋上』これで大体察してくれるといいんだけど）」

マミはほむらに向かって右手を伸ばす。キュウベえからは死角になるように、リボン

が握りこまれていた。ほむらからははつきりと見える位置にある。

「わざとらしいほどわかりやすく握りこまれたりボン。罨ではなさそうね」

ほむらはマミの手を握り返す。そしてそのままリボンを受け取った。

「それじゃあ、今日の夕方に校門前でいいかしら（といても、そんなに長い話にはならないと思うけど。暁美さんからも説明があつたみたいだし）」

「構わないわ。それじゃあ、行きましようか（十五時に屋上……マミにしては気が利くわね。それとも、マミのほうから何か話があるのかしら）」

ほむらはまどかの手を引いて、階段へと続く扉へと歩き出す。さやかもそのあとを追った。

「さつきはあの子たちがいたから聞けなかつたけど……貴方は、自分のことを妖怪だと言つたわね。しつかり魔力を感じ取つてみると確かに魔女とは違う（でも、魔女と違うからって）」

マミは私の第三の目を見ながら続ける。

「でも、妖怪っていうのは、人に害をなす存在ではないの？ 私は、そういう認識だったのだけど。妖怪っていう単語はね（そうじゃなくても、私はこの子の目、あまり好きじゃないのよね。気味が悪いし……三つ目小僧の一種とか?）」

さて、なんと答えたものか。マミの認識は間違つていない。だが、敵対するべきでは

ないだろう。

「昔は、そういう意味だったかもしれませんが。でも、今は種族の一つ程度の認識で構わないですよ。私たちだって感情があるし、喜んだり、悲しんだりするんです。だからこそ、私は思うんですよ。話し合いたくことが済んでよかったと。これから仲良くしましょうね。マミさん」

私はにこりとほほ笑んで、マミに一礼した。マミは私のことをまだ怪しんでいるようだったが、これで取り敢えず襲われることはないだろう。さて、私も早く追いつかなくては。あまり遅くなってはまどかを心配させてしまう。

「勝手に時間を決めて呼び出しちゃってごめんなさい。でも、何か話があるんじゃないかと思って」

指定された時間に屋上に向かうと、もう既にマミはそこにいた。マミはベンチにも座らず、立ったままじっとこちらを見ている。

「話……そうね。私は、鹿目まどかと美樹さやかを魔法少女にはしたくない。彼女たちが魔法少女に憧れるようなことはできるだけ避けたいの」

「何故、二人を魔法少女にしたくないのかしら。自分の取り分が減るから？」

やはり、マミは仲間を欲している。グリーンフィードの取り分が減る以上に、一緒に戦う魔法少女が増えることを望んでいるようだ。

「ベテランの貴方なら、魔法少女の辛さや苦しみが分かるはずよね。あの子たちを危険な戦いに巻き込みたくはない」

「それには同意するけど……戦いの定めを受け入れてまで、彼女たちに叶えたい願いがあった場合は? 私は本人の意思を尊重するべきだと思うのだけど」

「忘れないほうがいいわ。彼女たちがまだ中学生であるということ。一生を決める判断ができる歳じゃないわ。魔法少女に希望なんてない」

それを聞いて、マミはため息をついたあと、微笑みながらベンチに腰掛けた。その様子はどこまでもホツとしているようで。私はその態度に眉を顰める。

「ごめんなさい。少し安心しちゃって。怒らないでね? 暁美さんって、いつも怖い顔してるじゃない。てっきり悪い子なんじゃないかって。でも、私の杞憂だったみたい」

マミはポンポンとベンチを叩く。どうやら座れと言っているらしい。

「暁美さん、人が良すぎるぐらいいい子だわ。友達思いの、凄く優しい子。でも、私としては故意に契約を阻止する手伝いはできないわ。願いを叶える権利は、あの子たちにもあるわけだし。その思いを無下にはできない。勿論、適当な願い事で魔法少女になるというなら私も反対するわ。それこそ、怪我をさせてでも止めようと思う。……それで

いいかしら」

「私が求めるのは、逆なのだけどね。貴方の気持ちは分かっているつもり。あの子たちを魔法少女になるように誘導しなければ、私としてはそれ以上を望まない。でも、憧れなんかで魔法少女になってもらっては困るの。特に鹿目まどか。彼女は人の為になれるなら、とか、そんな自己犠牲的な理由で魔法少女になりかねない」

「何が言いたいなの？」

「マミが怪訝な顔をする。私は少し考えた後、端的に言った。

「マミ、貴方はカッコよすぎるのよ。見た目も戦い方も素敵。人の為に魔女を狩るところなんて正義の味方そのもの。貴方の魔女退治に付き合うだけで、あの子は魔法少女に憧れを持ってしまう」

「あら、貶されてるのか褒められてるのかわからないわね」

「誉め言葉として受け取って頂戴。……その代わりではないけれど、これからの魔女退治は、私も協力するわ」

「マミは私の言葉を聞いて、興味ありげにこちらを向いた。

「グリーンシードの取り分が減ってしまうけどいいの？」

「貴方がそれで構わなければ。それに……」

「それに？」

「……独りぼっちは、寂しいじゃない」

軽い衝撃が私の体に走る。何かと思えば、マミが私の体に抱き着いていた。

「もう、突然そうキュンとなるようなこと言わないでよ。これがギャップ萌えというやつね」

「なんの話をしてるのよ」

マミはクスクス笑いながら私から離れる。そして、ベンチから立ち上がり改めて私と対面した。

「これからよろしくね。暁美さん。今度は純粹に、友情の印として握手して欲しいわ」

私は出された右手を握り返す。昨日マミと敵対したときはどうなることかと思っただが、無事協力関係を築けて一安心である。

「魔法少女コンビ結成ね」

「……まあ、変なチーム名つけられるよりかはいいかしら」

土曜日ということもあり、人の気配があまりしない見滝原中学校の校門前に、先ほどのメンバーが集まっていた。私が思想を読むに、ほむらは不安げ、さやかとまどかはワクワクし、マミは楽しんでいた。

「さて、昨日の魔法の魔力を追跡しながら話しましようか。昨日曉美さんからある程度の説明を受けたのよね？（彼女たちが魔法少女に憧れを持たないように……か）」

ママはソウルジェムを手に持ち、ゆっくりとした速度で街中を歩いていく。

「そうね。どこから話していいものかしら。まず大前提として、魔法少女の素質のある女の子は、キュウベえと契約して魔法少女になる。これは大丈夫かしら（まあこのぐらゐのことは曉美さんから聞いているはずよね？）」

「はい、ほむらちゃんから聞きました（契約……なんだか重たい言葉だよね）」

「キュウベえと契約すると、なんでも一つ願い事を叶えてもらえる。それこそ、突拍子もない、現実にはあり得ない願いでもね。でも、その代わり魔法少女は魔法と戦う使命を負うことになるの。願いから生まれるのが魔法少女だとすれば、魔法は呪いから生まれる存在。魔法少女が希望を振りまくように、魔法は絶望をまき散らす。理由のはつきりしない自殺や殺人は、魔法のせいであることが多いの（特に見滝原では、魔法の活動が活発なのよね）」

「ママ（やつぱりママの説明は少し綺麗ごとがすぎるわね）」

「……はいはい。誰かがやらなきゃいけないことだけど、魔法少女になんてなるものじゃないわ。放課後遊ぶ時間も無くなるし、魔法との戦いは常に命がけよ。特に、魔法の結解の中で死ぬと悲惨ね。あの中で死んだら、死体は残らない。永遠に失踪扱いさ

れ、死んだことさえ気が付かれない。……貴方たち、家族は? (こういうマイナスな面を説明しろってことよね?)」

「ママは先頭を歩きながら、まどかとさやかに話を振る。」

「パパとママに、弟が一人います (今は、さとりちゃんも家族のようなものだけど)」
「そう、だとしたら、あまり契約は勧められたものではないわ。貴方一人の命じゃないのよ? 貴方がいなくなったら悲しむ人が、きつと沢山いるわ。美樹さんもね。そんな家族や、大切な友人を裏切つてまで叶えたい願いがあるというのなら、私は止めないわ (実際、大人になった魔法少女の話は聞かない。私も怖くてキュウベえに聞いたことはないけど、長生きできるとは思えないわ)」

「ママはそう言つて顔を伏せた。実際、ママは天涯孤独の身だ。小さい頃に交通事故に遭い、その時の怪我を治すのと引き換えに魔法少女になった。勿論、考える時間などなかっただろう。魔法少女になるほか、生きる道はなかった。」

「ママさんは……今の生活、どう思っているんです? 魔法少女になったこと、後悔しますか? (願い事がなんでも叶う。なんでもつてことは、人生をかけるに値する願い事も叶えることができるってことだよな?)」

「私の場合は……契約せざるを得なかったわ。交通事故に遭つて、契約していなかったら、きつと死んでいたから。でもね、時々思うの。あの時、私の命のほかに、両親も助

けてっってお願ひしていたら、今のような生活ではなかったんだろうな。後悔しているわけではないのよ。でも……ね（ちよつと話題が暗くなりすぎたかしら）」

マミは心配そうにちらりと後ろを振り返る。まどかとさやかはマミの予想通り暗い顔をしていた。まあ、中学生には重たい話だろう。ほむらは逆にそれでいいと言わんばかりの納得した表情をしていた。

「わかつたでしょう？　魔法少女なんて、なるものじゃないわ。魔法少女になろうか悩むってことは、ならないほうが良いってことよ（これで、まどかが魔法少女になる可能性は限りなく低いわね。あとは、美樹さやかかしら。彼女の場合、上条恭介の左手を治すためだけに契約しかねない）」

「うん、なんだか私らみたいな幸せ馬鹿が首を突っ込んでいい世界ではなさそうだね（危険と引き換えに叶えたい望みがある人なんて、この世にはいくらでもいるはずなのに。なんで私なのかな）」

「幸せ馬鹿？（馬鹿がまた馬鹿なこと言ってるわね）」

「そ、幸せ馬鹿。その程度の不幸しか知らない……幸せすぎて、馬鹿になっちゃってるんだと思う（そうだ、今の私たちって、幸せすぎるんだ。望むものは何も無いほどに）」

さやかは、そう言っただけ少し悲しそうに微笑んだ。マミはその顔を見て、呆れたように苦笑する。そして次の瞬間、表情を硬くした。

「——ッ……見つけた。昨日の魔女よ（あの建物の中ね）」

ママはソウルジェムを胸に掲げ、目の前の建物を見据える。確かに、建物は瘴気のようになものに満ちていた。

「ママさん！ あれッ!!（屋上に人が!）」

さやかが指さす先にはふらふらと屋上を歩く女性。その足取りはどう見ても飛び降りようとしているようにしか見えなかった。

「任せて——」

「それには及ばないわ。貴方は中の魔女を（ママなら取り落とすことはないだろうけど、念のためね）」

ママが変身しようとした瞬間、屋上から女性の姿が消える。いや、消えたわけではない。女性は私たちの一番後ろを歩いてきたほむらが抱きかかえていた。

「どうやって……と聞くのは無粋ね。わかったわ。魔女は任せて。貴方は一般人がこの結界に迷い込まないように監視しておいて頂戴（変身した気配も感じなかった。……やるわね）」

「ええ、まだかたちは任せなさい（この魔女はそんなに強くなかったはず。油断さえしなければ遅れをとることはないでしょうね）」

ママはほむらの言葉に頷くと、変身して建物の中に駆けていく。その様子をまどかは

心配そうに見つめていた。

「ほむらちゃん……ママさん、大丈夫かな？（ほむらちゃんはベテランの魔法少女って言ってたけど、心配だよ）」

『その点に関しては安心していいわ。危なくなったら、こうやって助けを求めるから』
読心とは違う、頭の中に直接響くような感覚で、ママの声が聞こえた。それはどうも、ここにいる全員が聞き取れるものだったようで、まどかとさやかはかなり驚いている。

『そう。魔法少女はこうやってテレパシーを使うことができる。だから心配することはないわ（まあ、一瞬で殺されたらそれまでだけど。実際、他の時間軸ではママは魔女に一撃で殺されることが多い。ただ統計的に見て、この魔女に殺された時間軸は一度もなかった）』

本当に危ないのは、少し後に現れるお菓子の魔女のようだ。まあそれもほむらと一緒に戦えば、十分回避できる死だろう。

私たちはママの魔女退治が終わるまで、自殺しようとしていた女性の面倒を見る。外傷は特になく、純粋に気絶しているだけのようだ。

「よかった。魔女の口づけを受けたものは自傷行為に出るものも少なくないから、どうか怪我をしてもおかしくないのだけど（取り敢えず、ここで目が覚められても面倒くさいから、魔法でしばらく眠っててもらいましょう）」

ほむらは優しく女性の頭を撫で、魔力を込める。次の瞬間、女性の顔が穏やかなもの
に変わった。それを見て、まどかとさやかはホツとする。

「それに、そろそろ向こうも終わったようね（やはり、マミは天才ね。もともと攻撃向き
ではない魔法を、無理やり攻撃向きの魔法に変換できる程度には、器用だし。その器用
さが羨ましいわ）」

ほむらの言葉通り、制服姿のマミが余裕の表情で出てきた。その手には、グリーンフ
シードが握られている。

「やっぱり、昨日の魔女だったわ。取り敢えず、これで一安心ね（このグリーンフシード、
私でもらっちゃっていいのかしら。コンビを結成したからには、二人で分け合うべきか
しら）」

「グリーンフシードは貴方がもらっていいわよ。私はまだストックがあるし（そもそも、
ループしている関係上、私はあまりグリーンフシードには困らない。転校するまでの一週
間に、結構なストックもできた）」

マミさんは、安心したようにグリーンフシードをポケットの中に仕舞う。その様子を見
て、さやかは心配するようにほむらを見た。

「いいの? ソウルジェムを浄化することが、魔法少女の役割なんでしょ?（そっか、
さつきまで単純に、みんなで魔女と戦えばいいなんて呑気なこと考えてたけど、こうい

う問題が出てくるんだ。一回の戦闘で、複数グリーンシールドが手に入るわけじゃない。取り合いになってしまふことだって、あるはずなんだ」

「ソウルジェムを浄化することが、魔法少女の役割？ どういうことかしら、暁美さん。私たちの役割は、魔女と戦うことですよ？（言い方の違いかしら。でも、根本的な考え方の違いがあるかもしれない。もし、そうなら……私、暁美さんとうまくやっていけるかしら）」

少し、マミとほむらの間に不穏な空気が流れる。マミは考え方の違いと認識したみたのだが、それは違う。ほむらとマミの違いは魔法少女に関する知識の量の違いだ。

「……ごめんなさい。ただ、聞きたいの。貴方は自分の為に魔女と戦うの？ それとも、人の為に魔女と戦うの？（ここではつきりさせておかないと、のちのち大きな問題になりかねない）」

ほむらはマミの質問に対し、色々と言い方を考えたが、結局は思っていることを口にした。

「そうね。正直に答えるなら、私は私の為に戦ったことなど一度もない。これまでも……そして、多分これからもね（私が戦う理由、それはまどかだけ。私はまどかを救う為に、戦い続ける）」

「……そう。それを聞いて少し安心したわ。美樹さん、大丈夫よ。ソウルジェムって言

うものは、綺麗に維持しておくに越したことはないけど、すぐに浄化しないとうにかなるってものでもないから。それに、曉美さんは未使用のグリーンフシードを少しストックしているみたいだし（勿論、これからは二人で平等に分け合うつもりよ。だって私たち、もう仲間じゃない）」

それを聞いて、さやかは安心したようだった。マミは眠っている女性を抱きかかえるのと、につこりと笑う。

「さて、それじゃあ帰りましょうか。この女性は近くの公園のベンチに寝かせておきましょう。夜になる前には目が覚めるはずよ（本当は私の家でお茶会を開きたいところだけど……今からだと遅くなっちゃうわね）」

マミはそのまま来た道に戻り始める。それを見て、まどかたちも後を追って歩き始めた。

ほむらちゃんやマミさんは魔法少女になんかなるものじゃないなんて言うけれど、だからと言って魔法少女が全く必要ないわけじゃないって、私はそう思うんです。確かに、仕方なく魔法少女になった女の子のほうが多いのかもしれない。でも、その女の子

たちが町の平和を守っていることには、違いないから。それでも、魔法少女は酷いもので、魔法少女として魔女を狩ることが苦痛なのだとしたら、私はその手伝いがしたい。一人よりも二人、二人よりも三人で戦ったほうが、より安全だよ。そうやって戦って、誰かの役に立てるのなら、町の人を助けられるのなら、もうそれだけで幸せだなあって。ママさんやほむらちゃんには反対されるかもしれないけど、誰かがやらなきゃいけないことを、仕方なく契約した人にやらせるわけにもいかない。私は、魔法少女になりたいという願いの元、魔法少女になる。願い事の代償が、願い事になつてしまうけど、それなら、誰も不幸にならない。そんな風に人の役に立てる人生を歩めるなら、私はそれ以上を望まない。そう言った人生は、きつとつても素敵なものだから。そんな風に、思ってしまうのです。

……致命的ね。まるで物語の主人公だわ。自己犠牲精神の塊。きつとこの子なら、絶望などすることなく、魔法少女を続けられるのだと思う。でも、前提が違つたら？ 魔法少女が思っているものとは根本的に違つたら？ まどかはほむらやママが語った、『表面的なマイナス面』しか知らない。逆にマイナス面を先に紹介されたことによつて、今回人助けしたことが際立つてしまった。ほむらやママはそれに気が付いていない。絶望の中にも、希望があることを教えてしまった。鹿目まどかは危険な存在だ。この世

を終わらせるスイッチを、持たせているようなものである。やはり、ほむらの言う通り、全力でまどかの契約を阻止しなければ。最悪、まどかを殺してでも。そんな風に、思っ
てしまうのです。

第三話「私としては、そう思えた瞬間が一番怖いんですけどね」

「まどかはさ、どう思ってる？」

「何が？」

「魔法少女のことだよ。まどかは、魔法少女になろうと思う？」

まどかは少し迷ったような顔をして、さやか顔を見る。さやかは、何か決意を固めたような顔をしていた。

「私は……その……」

「私はね。契約するのもありかな……なんて、考えもあるんだ。そりやまあね、ほむらとママさんにあそこまで言われると、魔法少女なんて碌なものじゃないっていうのは分かる。でも、魔法少女にならないと、叶えられない願いもあるし、願い事によっては、人の役に立つこともできるんじゃないかなってね」

さやかはくるりとまどかのほうを向いた。

「でも、人生を諦めるようなものだって……さやかちゃんはそれでいいの？」

「そこまでマイナスに受け取る必要もないと思う。まあ、仮定の話だよ。仮定。私とし

ても、今すぐ魔法少女になる気なんてないし、人の役に立てるような大層な願い事も考えつかないしね。ただ、思ったんだ。あの二人からああ言われたからって、絶対魔法少女になってはいけないわけじゃないって」

「そうなの、かな？」

まどかは自分の手のひらを見つめた後、空を見上げた。自分の利益ではなく、人にはできないことができる力があるのなら、それをやらないことは卑怯なことなのではないか。最近まどかはそんな風に考え始めていた。

まどかを魔法少女にしてはいけない。これは決定事項だ。だが、だからといってさやかも魔法少女にしてはいけないというわけではない。近いうちに出現するワルプルギスの夜に向けて戦力は少しでも多いほうが良い。ほむら一人では勝てなくても、マミ、ほむら、さやか、それに隣町にいる佐倉杏子の四人で戦えば決して勝てない相手ではない。

ただ一つ問題があるとすれば、さやかが普通に契約をすると、結構な確率で魔女になるのだ。さやかが魔女になる影響はかなり大きい。ある時間軸では杏子がさやかを道連れにし自爆し、またある時間軸では魔女化の事実を知ったことよってマミが錯乱

し、結果的にマミと杏子の二人が死んでいた。

さやかが魔女化する理由は単純だ。さやかは幼馴染の左手を治す為に魔法少女になる。さやかはその幼馴染と恋仲になりたいようなのだが、先に仁美に告白されてしまい、さよかの恋は実らない。自分の願いを見失ったさやかは、次第にやつれていき魔女になる。つまりは……だ。

「なに!? どういうことなの!? なんで……なんで恭介の病室にグリーンフィードが!! (まずい! このままじゃ、恭介が巻き込まれちゃう!!)」

「さやか? どうかしたのかい? (どうしたんだろう。急に慌てて……)」

孵化寸前のグリーンフィードはとてもじゃないが移動できたものではない。では、穢れをギリギリまで溜め込んだグリーンフィードだったら? そう、ある程度場所を選んで設置することが可能だ。特に上条恭介の病室は彼が出した負の空気で満ちている。何かきっかけがあれば簡単にグリーンフィードは孵化するだろう。

「恭介! 急いでここから逃げ……いや、もう遅いか(くそ、なんてタイミングだよ。こんなことって)」

さやかが恭介を庇うように椅子から立った瞬間、魔女の結界が作られる。結界に巻き込まれさえすれば、恭介にもある程度魔女が見えるはずだ。

「——ッ!? なんだこれ! どうなってるんだ!? ……さやか、僕は満足に動けない。

さやかだけでも早く逃げて!! (悪い夢でも見てるのか? この空間は……一体……)「そんなことできるわけないでしょ! キュウベえ! 近くにいろ!!」

さやかが祈るように叫ぶと、さやかの足元にひらりとキュウベえは着地した。まるでこうなることを予想していたように。いや、実際のところ、キュウベえはさやかと恭介が結界に巻き込まれることを知っていた。

「僕ならここにいろよ。……まさか、こんなことになっていろだなんて。これは拙いよさやか。助けを呼びに行こうにも、僕がここを離れると方が一の場合に対応ができない(話には聞いていたけど、僕にはできないやり方だ。流石としか言いようがないね)」

「……方が一つて? (悪い予感しかない。というか、選択肢なんてないんじゃない)」「僕が助けを呼びに行っている間に、君が魔女に殺されなくても限らない。僕と一緒にいれば、危なくなったらすぐに契約することができるだろう? (これでさやかの契約は確定だ)」

「テレパシーは? (マミさんと連絡が取れば……そんな時間もないか)」

「遠すぎて流石に無理だね (まあ別個体を使えば出来なくもないけどね)」

よし、その調子だキュウベえ。私は貴方を応援しよう。

「さやか? 誰と話しているんだい? (この空間といい、さやかは何か知っているのか?)」

さやかはキュウベえと恭介を見て、悩むように頭を掻きむしる。そして決意を固めた目でキュウベえに言い切った。

「わかった。キュウベえ、貴方と契約する（ある意味、いい機会かもね。こういう風にどうしようもないって状況のほうが、覚悟も決めやすい）」

「そうか、わかったよさやか。君はどんな祈りでソウルジエムを輝かせるんだい？（早くしないと魔女が活動を始めてしまう）」

さやかは一度大きく深呼吸すると、恭介の左手をそつと握る。そして、キュウベえに向かつて言った。

「どんな怪我でも、病気でも、なんでも治す力が欲しい。多くの人が救われる、そんな力が（これが、私が出した結論。恭介の怪我以外にも、苦しんでいる人や困っている人の力になりたい!）」

「わかった。受け取るといい。それが君の運命だ（てつきり上条恭介の腕の治療のみを願うかと思つたが、ママの話聞いて少しは考えていたようだね）」

キュウベえがさやかの体からソウルジエムを取り出す。その光景は恭介にも見えていたのか、驚愕に目を見開いていた。

「恭介、私も不慣れなところがあるし、完璧に守ってあげられる保証はない。だから、出来るだけ逃げ回って（これが、私の魔法少女としての姿……）」

さやかは素早く変身すると、恭介の左腕からそつと手を放す。恭介は何かを振り払うように右手で頭を掻いた。

「一体何が……変な夢でも見てるのか？　なんにしても、さやか一人を置いて逃げるわけには。それに、僕の足じゃどうせ逃げられない（あの恰好……本当にどうということなんだ？）」

「大丈夫。怖がらずに立ち上がってみて。もう、治っているはずだよ（治癒の魔法、初めてだったけど上手く治ってるかな？）」

恭介はさやかに言われた通りにベッドから立ち上がる。先ほどまでたどたどしくしか動かなかった足が、まるで事故などなかったかのように普通に動いていた。それに、治る見込みがないとまで言われた左手まで感覚があり、今まで通り動いている。

「あはは、なんかそれを見て安心しちゃった。悩んでいた私が馬鹿らしいわ。こんな素晴らしいこと、なんですぐ実行しなかったのかな？　つと、お出ましか（白黒の空間に、金平糖みたいな見た目の魔女……なんにしても、倒すしかない）」

さやかは意識を集中させ、剣を生成し両手で握りこむ。さやかとしては、魔女の結界に入るのも、魔女を見るのも初めてだったが、自然と戦い方は分かっていた。

「魔法少女にとつて初戦というのは非常に危ない。注意して！（ここで死んでもらったら感情エネルギーが勿体ない。是非とも勝ってもらいたいね）」

さやかはキュウベエの言葉を半分以上聞かずに魔女に対して突撃していった。そもそもこの魔女、Sulieikaはそこまで強い魔女じゃない。なんせ『私でも勝てた』ほどだ。さやかの突き出した剣の先が魔女に突き刺さる。その勢いのまま、さやかは魔女を結界の壁へと縫い付け固定した。

「これでとどめだああああ!!（この一撃で……終わらせる!!）」

さやかはもう一本剣を生成し、両手で構える。そしてそのまま上から下へと一気に振り抜いた。体重と速度の乗った渾身の一撃は、魔女を文字通り一刀両断する。さやかはそのまま地上に着地すると、結界が解けるのを見届けた。

「グリーンシールドは……残念、落とさなかったか（残念ではあるけど、今日は取り合えず恭介を助けることができたからよしってことにしよう）」

キョロキョロと周囲を見回し、さやかはグリーンシールドが落ちてないことに若干落胆する。そして、そのまま変身を解いた。

「さやか……一体何がどうなつて……（さつきのさやかは一体……今は少しでも情報が欲しいけど……なんにしてもさやかが無事でよかった）」

「あー……えつとね。なんて言つたらいいのかなあ。……分かった。全部話すよ。突拍子もない話だけど、聞いてくれる?（さて、どこまで話したものかな?）」

さやかは元に戻った病室のベッドに腰掛ける。そして自分の隣に座れと言わんばか

りにベッドを叩いた。

「あれで良かったのですか？ さとりお姉ちゃん（グリーンフィードって、あんな風に孵化するんですね）」

展望台に設置された三分間で百円の望遠鏡を覗きながら、百江なぎさは私に聞いた。私は望遠鏡から目を離すと、なぎさのほうを見る。

「あれで良いんですよ。魔女化の真実を教える以外に、さやかとの契約を止める方法はありませんか」

なぎさは望遠鏡の上に積まれた百円玉を、投入口に入れる。

「でもさとりお姉ちゃんの言う通り、これでなぎさのお母さんの病気も治るのです！ さとりお姉ちゃんにはグリーンフィードを貰ったりお世話になりっぱなしなのです（さとりお姉ちゃん、初めて会ったときは怖かったけど、凄く優しいのです！）」

「ええ、後で治してもらいましょう。それと、今日の夜に私のほうからみんなに紹介しますね。なぎさなら問題なくみんなに馴染むことができるでしょう」

数時間前。

日曜日の病院というのは、面会などの関係上、やはり少し人が多くなる。そんな中、私とはとある病室を目指して歩いていった。これは暁美ほむらですら知らない情報。キュウベえしか多分知り得ない情報。

「(そんな……なぎさの願いは、無駄だったのですか？ 一体、どうしたら……)」

ここか。病室から流れ出る負の気配。扉越しでも痛いほど伝わる絶望。ここが、キュウベえがつい三日前に契約した少女の母親がいる病室か。私は百江と書かれている病室の扉をなんの遠慮もなく開けた。病室の中には、既に虫の息の女性と、ベッドに蹲り涙を流し続けている少女。その少女の手には黒く濁ったソウルジェムが握られていた。きっと魔女退治にもいかずに、ずっとここで母親の様子を見ていたのだろう。

少女はいきなり入ってきた私に目もくれず、泣き続ける。そんな少女の頭を私は優しく撫でた。

「百江なぎさ、大丈夫です。私に全部任せればいいわ」

私は手に持っていたグリーンフシードをなぎさのソウルジェムに近づける。真っ黒に濁っていたなぎさのソウルジェムはあつという間に輝きを取り戻した。それを見て、なぎさは顔を上げる。

「グリーンフシード……貴方も魔法少女なのですか？ お願いなのです!! ママを、ママ

を助けてほしいのです……（誰でもいい。ママを助けて……）」

なぎさは目いっぱい涙を溜めて訴えかける。私はなぎさの頭を優しく撫でた。

「ええ、貴方も、貴方のお母さんも私が助けます。安心していいですよ。少し、ついてきてください。大丈夫、貴方のお母さんは、あと二日は大丈夫」

私はなぎさの手を取ると、病室から連れ出す。そのままなぎさと一緒に歩き慣れない病院内を歩いた。

「どこに行くのですか？（不思議な雰囲気の人なのです）」

なぎさは目をぐしぐしと擦りながら引つ張られるままについてくる。

「とある病室ですよ。……そうですね、言うなれば、なぎさのお母さんを助ける人を『作りに』行くんです」

「助けられる人を作る？（それって、一体……）」

さやかかの記憶から、ある程度の恭介のリハビリスケジュールは掌握済みだ。この時間帯には病室にいないはずである。私は中に人がいないことを確認すると、恭介の病室の扉を開けた。

「それは……さつきなぎさのソウルジェムを浄化したグリーンフシードですか？（見た感じ、もう使えなさそうなのです）」

私は先ほどのグリーンフシードを取り出すと、それを恭介のベッドの下に放り込む。こ

れで準備は万端だ。私はまたなぎさの手を引いて病室を出た。ちなみに、このグリーンフィードは昨日の夜、適当に魔女を倒して手に入れたものである。キュウベエの記憶を読む限り、私が倒した暗闇の魔女の弱点は光。私のペットである霊鳥路空のスペルカードを真似て『想起「ペタフレア」』で焼き殺した。

「さて、少し高い場所に行きましようか。長い話になるので、話しながらにしましょう」
私は病院から出て向かい側にある電波塔の展望スペースに向かう。そこまでの道中になぎさには、ソウルジエムが魂であるということや、ソウルジエムが濁りきると魔女になるということ、それにほかの魔法少女のそれぞれの事情を隠すことなく伝えた。それこそ、ほむらがまどかの為にループを繰り返していることからワルプルギスの夜が来るということまでだ。普通、こんな話をしたら混乱と絶望ですぐに魔女になってしまふ。だが、私の予測通りなぎさはとても落ち着いた様子でそれを聞いていた。

「急すぎて全く実感がわかないのです。それにタイムリープ？ 最強の魔女？ 話のスケールが大きすぎますよ。でも、なぎさは信じるのです。信じられない話なんて、もう飽きるぐらい聞きましたから（今はとにかく、さとりお姉さんの話を信じるしかない）」

そう、一度絶望に叩き落され、そこから引き揚げられた人間というのは強い。落ちるところまで落ちてしまえば、そこから先は上るしかない。それに、なぎさは今私に対し

希望を抱いている。なぎさにとって希望となる存在の言うことは、無条件に信じることができる。

「とにかく、しばらくあの病室を監視しましょう。私の予想では、先ほど話した美樹さやかが幼馴染と共に結界に飲み込まれるはずです」

「でも、いいのですか？ さやかが魔法少女になったら、魔女になってしまっただけですかね？（というか、契約したらほぼ確実に魔女になるって、どんな人なんですかね？）」

それを言うなら確実に魔女化してるなぎさも相当なものなだけけれど、それは言わないほうが良いだろう。

「大丈夫です。ここで恭介を結界に巻き込めれば、魔女化するリスクは相当に低いでしょう。さやかの場合、恭介と恋仲になればそれで幸せなんです」

「案外さやかは単純なのですね（さとりお姉ちゃんが大丈夫って言ってるなら、きっと大丈夫なのです）」

さて、と。私はなぎさに一通りの説明を終えると、改めてキュウベえを呼び出すようになぎさに頼んだ。

「なぎさ、キュウベえを呼び出してください」

「いいですが、なにか用なのですか？（キュウベえ？ あんな話の後では、あまり会いたい相手ではないのですが）」

「大事なことです」

私になぎさの目を真つすぐ見ると、なぎさは目を瞑ってキュウベえにテレパシーを飛ばした。しばらくすると、私の前にキュウベえが現れる。

「これは驚いた。まさかさとりとなぎさが一緒にいるだなんて。それで、僕に何の用だ？（百江なぎさは魔女化するはずだった。ソウルジェムの浄化をしなかったなぎさはもう魔女と戦う魔力すら残っていないかったはずだ）」

「用というかなんというか、伝えたいことがあります」

私は真つすぐ向かいにある病院の病室を指さす。

「あそこの病室、上条恭介の病室で上条恭介と美樹さやかが魔女の結界に巻き込まれます。近くで待っていたらさやかと契約が取れるでしょう」

「どうしてそんなことが分かるんだい？（古明地さとり、一体何を考えているんだ）」

私はワザと怪しげにほほ笑んで、キュウベえを見る。

「あの病室にギリギリまで穢れを溜め込んだグリーンフシードを仕掛けました。上条恭介の負の気持ちがりりガーとなって孵化するでしょう」

「……一体何が目的なんだい？ 古明地さとり（動機が全く分からない。どうしてそんなことを……）」

「キュウベえ、貴方は私を善良な人間と勘違いしてるんじゃないやありませんか？ 私は本来

は魔なるもの。人が落ちていくところを糧にするという点では、貴方と同類かもしれない
せん」

「僕は別に、自分たちの為に働いているわけではないんだけどね。これは慈善事業の一つさ（もしさとの言葉が真実なら、僕にとつても都合がいい。何もしなくても勝手にさとりが皆を絶望させてくれるということだからね）」

キユウベえはくるりとその場で回ると、私の肩の上に乗って窓の外を見る。そこには、リハビリから帰ってきた恭介とさやかの姿があつた。

「それじゃあ、行つてくるよ。君とはいい関係を築けたらと思うよ（なんにしても、今はさやかの契約が先決だ）」

キユウベえは私の肩から飛び降りると、壁をすり抜けて何処かに消える。私はなぎさに大量の百円玉を渡し、自分も百円玉を望遠鏡に入れ様子を見始めた。

「お、確かにさとりお姉ちゃんの言った通り、凄くいい雰囲気なのです。恭介自体も少しはさやかのことを意識していたのですね（あうう！ キスしたのです！）」

なぎさは望遠鏡を覗き込みながら、ぴよんぴよんと興奮する。私も百円を入れ望遠鏡

を覗くが、そこには恭介と熱く接吻を交わすさやかかの姿があった。

「最近の若い人間は進展が早いですね。流石にその続きはしないみたいですけど。さて、そろそろ戻りましょうか。さやかになぎさのお母さんを治してもらいましょう」

「わかったのです！（ママ、待っててね。今助けるから！）」

私はなぎさに新しいチーズの袋を与え、病院へと戻る。思考を読む限りでは、さやかはまだ恭介の病室にいるようだ。

「さて、なぎさ。今から私が言った通りの行動をしてください。それでさやかはなぎさのお母さんを助けてくれるはずですよ」

私は小さな声でなぎさに作戦を伝えた。なぎさはふんふんと集中して作戦を聞くと頭の中で反復する。

「わかったのです！（なぎさは演技は上手いほうなのです！）」

なぎさは真つすぐ恭介の病室のほうに走っていく。そして病室の前で思いつきり顔からこけた。あれ絶対痛いと思うのだが……あ、本人も予想以上に派手にこけてしまい涙目になっていた。

「なんだなんだ!?!（凄い音したけど）」

なぎさが盛大に転んだ音を聞いて、さやかが病室から飛び出してくる。それを見て、なぎさが勢いよく顔を上げた。

「う、うううううううう……（普通に痛いのです。でも、ここでは違う理由で泣いているように見せなきゃなのです）」

「大丈夫!? うわ、めっちゃでかいたんこぶ出来てる！（急いで治療してあげなきゃ……）」

さやかはソウルジエムの指輪をつけているほうの手でなぎさの頭を撫でる。次の瞬間、なぎさのたんこぶは消え去っていた。

「ううううううう……（凄い。あつという間に痛みが消えたのです。でも、まだ泣く振りをやめるわけには……）」

「もう痛くないよ？ ほら、大丈夫（おかしいな。怪我は完璧に治ったと思ったんだけど）」

「違うのです……（なぎさの演技力を見るのです!!）」

なぎさは大粒の涙を流しながらさやかの顔を見た。

「ママが、ママが死んじゃうのです！ うわああ……ママあ……（これで逆に助けられない人がいるとしたら、もう人間じゃないのですよ）」

なぎさの泣き顔を見て、さやかは何かを決意したかのように立ち上がった。そして病室内にいる恭介のほうを見る。

「わかってる。困ってる人を助ける為に、さやかは魔法少女になったんだろう？ 僕は

いいからその子の母親のところへ（全く、さやかは相変わらずだな）」

「うん、ちよつと行つてくる。……大丈夫。私が、貴方のママを助けてあげる（私が、見滝原の平和を守るんだ）」

「本当に？ 本当にママを助けてくれるのですか？（ちよるいのです）」

なぎさは目をグシグシと擦りながら立ち上がる。そしてさやかの手を掴んだ。

「こつち！ こつちなのです！（これで、ママが助かるのです。さとりお姉ちゃんの言う通りなのです！ やつぱりさとりお姉ちゃんは凄いのです！）」

なぎさはさやかを真つ直ぐ母親のいる病室へと引つ張つていった。私は二人の後ろ姿をひっそりと眺める。これでワルプルギスの夜と戦える魔法少女は五人。これだけいれば、戦力的には十分だろう。

「百江なぎさです。よろしく願いますのです」

夜の公園に見滝原の魔法少女が集まっていた。なぎさは私の陰に隠れてもじもじしている。まあそれはそうだろう。なぎさは小学生、ママたちは中学生。特にこの歳は年齢に敏感だ。

「まさかママのほかにこの町に魔法少女がいたなんてね（百江なぎさ……一体何者？

今までの時間軸では見たこともない……)」

「うん、よろしくね。なぎさちゃん(かわいい！) こんなかawaii魔法少女が見滝原にいたなんて!」

ほむらとマミが代わる代わるなぎさに声を掛ける。そんな中、完全に蚊帳の外扱いを受けている者もいた。

「つて! 私はスルーかよ?! ほらほら! さやかちゃんも魔法少女になったんだぞ!(まあ、新メンバーの登場とかぶると、そりや目立ちはしないけどさ)」

「ええ、期待しているわよ。美樹さん(あれだけ忠告したというのに……まあ状況が状況なだけに、仕方ないわよね)」

「うう……:マミさんの優しさが身に染みる(それに比べてほむらのやつめ……露骨に無視しやがって!)」

さやかはぐぬぬとほむらを睨むが、ほむらは今それどころではない。ほむらは完全に百江なぎさに集中していた。

「でもこれで、見滝原にいる魔法少女も随分増えたわね。これだけいれば……(四人もいれば、ワルプルギスの夜に対する戦力は十分ね。あとは佐倉さんも協力してくれるといんだけど、昔出ていったきり帰ってくる気はないみたいだし。私から会いに行くのもなあ)」

ママの思考を聞いて、私はほむらの勘違いに気が付いた。ほむらはワルプルギスの夜が来ることを知っているのは自分だけだと思っただけだが、実際にはママも知っている。何故ママがワルプルギスの夜が来ることを知っているかはわからないが、知っているのは事実のようだった。

「これだけいれば、随分魔女退治も楽になりますね！ 回復なら任せてください！ みんなのヒーラーさやかちゃんが、ガンガン治しちゃいますよ！（ママさんもほむらも、してなぎさちゃんも遠距離攻撃が得意らしい。そんな中近距離攻撃しかできない私が突っ込んでいっても邪魔になるだけだね。だったら、私は願ひ通り回復に専念したほうがいいに決まってる）」

「そもそも怪我なんかしないわ（これだけの人数いたらね）」

「なにをう！ 怪我したとき治してやんないぞ!!（くっそー、馬鹿にしやがって）」

「ここら、喧嘩しないの。でも、魔女退治が楽になるのは確かね。四人いれば、二手に分かれて魔女狩りをすることもできるし。二人が慣れるまでは四人で。ある程度慣れたら二手に分かれて見回ししましょうか（暁美さんは面倒見がよさそうだし、案外なぎさちゃんを任せても大丈夫かもしれないわね。それにしても……）」

ママはなぎさをちらりと見た。

「（なぎさちゃん、さつきから古明地さんにべったりね。でもあの二人、接点あるのかし

ら。なぎさちゃんのお母さんを助けたのは美樹さんって話を聞いたし……少し気になるわね。私だったら、理由もなしにあんな目玉のついている人に懐いたりはしない。病院で何かあったのかしら)」

やはり、鋭さで言ったらほむらよりもマミのほうが良い。長年魔法少女をやつており、倒した数は分からないが、種類だけで見たらほむらよりも多くの種類の魔女と戦っているわけだ。繰り返しているほむらと違い、マミの戦いはほぼ毎回未知との戦いになる。

「（それにしても、奇妙だね。今回はイレギュラーが多すぎる。さやかのお話を聞く限り、病室に現れたのは暗闇の魔女。あの魔女は違う場所に結界を作るはずなのだけれど……それに、さやかの契約内容もおかしい。私が繰り返してきた時間軸では、さやかは上条恭介の左手を治すことと引き換えに魔法少女になっていった。けれど、今回の祈りは違う。さやかは上条恭介だけではない。もっと広域的な願い事をした）」

ほむらはちらりとなぎさを見る。

「（まるで予定調和のように、都合よくなぎさのお母さんも助かった。年齢的に、母親が死んだらそのまま魔女化していったでしょうね。……病院で魔女化？ まさか、彼女がお菓子の魔女の元の魔法少女!?!）」

多くの時間軸でマミの頭部を齧り取った魔女。確かに順当に考えれば百江なぎさが

お菓子の魔女だろう。ほむらからしたら何度もトラウマを植え付けられた相手が、こんな小さい子供だったとはといった感じだろう。

「取り敢えず、親睦もかねて今日の魔女退治に向かいましょうか（といっても、魔女がいるとは限らないけど）」

マミの提案でようやく魔法少女たちは動き出す。私はほむらの言いつけで、まどかと二人、家に帰ることになった。私はまどかと二人すっかり暗くなった見滝原を歩く。まどかは暗闇に少し恐怖を感じているようだったが、それは悪いことではない。暗闇を恐れなくなった人間というものは、総じて早死にするものだ。

「あんな小さい子も、魔法少女なんだよね……。やっぱり、やむを得ず魔法少女になったのかな？（どういう願い事で魔法少女になったんだろう……）」

まどかの心の中にあるのは、責任感と罪悪感。力を持つている者がそれを使うことなく、ただ傍観することしかないというのは、許されることなのだろうか。

「百江なぎさは、強い人間ですよ。絶望の中に希望を見出し、今を精一杯生きています」「……そうなの？（それでも、あんな小さい子が戦ってるなんて）」

これは少し拙いかもしれない。ほむらが必死になって魔法少女の悲惨さを訴えれば訴える程、まどかが抱く罪悪感が増えていく。言い方が悪いのだ。まどかのためではない。私の勝手なお願いで魔法少女にならないでとお願いすれば、まどかはある程度聞き

入れてくれるだろう。

「まどか、罪悪感を感じることはありません。力になれないのは、私も一緒です」

「でも、私は魔法少女になれるんだよ？　なれるのに……戦うのが怖くて、逃げてばかり

（やっぱり私、弱い子なのかな？）」

完全にママの影響を受けつつある。魔女退治が自分の為だけでなく、人の為になると知ってしまったのが問題だろう。そして、仕方なく魔女と戦う魔法少女を見て、その仕事を変わることが出来たらとも思っている。

「願い事で、みんなを普通の女の子に戻すことって、出来るのかな？（そうすれば、みんな幸せになれるのかな？）」

……。結論から言えば、出来る。だがそれは最も悪い結末しか生まないだろう。キュウベえはどんな願い事でも叶えることができると言っているが、本当はその少女が持つ素質に見合う願いしか叶えることができない。でなければ、数人いれば無限に願い事を叶えることができるようになってしまう。キュウベえとしてもそこまで頭は悪くないはずだ。まどかの素質なら、他の皆を人間に戻すことはできる。だが逆に、五人が力を合わせても、まどかを人間に戻すことは叶わないだろう。

「多分できませんよ。それが出来てしまつたらいくらでも願い事を叶えることが出来ますから」

「えつと……そつか。三人いたら願いたい事叶え放題だね（だったら無理だよね）」

これは、まどかの素質に気が付かせないほうがいいだろう。自分がなんでもできる、どんな願いでも叶えることが出来ると知れば、まどかは契約してしまう。まどかには真実を伝えたほうがいいだろうか。貴方が契約すれば、この世界が滅びる可能性がある。と。

そもそも、なぎさに全てを教えたのには理由がある。一つは事情を把握しており、ほむらがあまり情報を持っていない自由な手駒が欲しかった。そしてもう一つの理由。それは魔女化の真実を知ったとき、マミが絶望しないようにだ。私が思うに、マミとなぎさは相性がいい。いくら他の時間軸でマミがお菓子の魔女に殺されているからといって生前の彼女とマミの相性が悪いとは限らないというわけだ。

「なぎさちゃんに、さやかちゃん。大丈夫だよ？ マミさんとほむらちゃんがついてるから……（でも、二人とも魔法少女になったばかりみたいだし……心配だよ）」

「二人が心配ですか？」

「……うん。みんなを信用してないってわけじゃないの。でも……魔法少女になれるのに、ならない自分がなんかずるい気がしちゃって。こんな話、ほむらちゃんが聞いたら絶対怒るよね（それでも、私はみんなの為に）」

「そうですね。例えば、まどかは食べるものがなくなったら困りますか？」

私がいきなり話を変えたせいかな、まどかは少し混乱する。だが、まどかは正直に答えた。

「困る。お腹は空くもん（どうしてそんな話をするんだろう）」

「魔法少女には縄張りがあり、基本的に魔法少女はその縄張り内でしか魔女を殺しません。マミさんで言うると見滝原が縄張りです。どうしてか分かりますか？」

「グリーンフシードの取り合いになるから？（ほむらちゃんは、そう言ってたよね）」

「そうです」

まどかは少し考えた後、一つの結論に至った。

「もしかして、もうグリーンフシードが足りてないの？（今までマミさん一人の縄張りだった場所に、今は魔法少女が四人もいる。人数が多くなった分効率よくグリーンフシードを集められるかもしれないけど……それでも一人当たりの取り分は全体の四分の一）」

「皆、口には出しませんが、これ以上魔法少女が増えると困るといのは確かでしょう。特に今は新人二人を抱えてあまり余裕がないでしょうね。今新しい魔法少女が増えたら、きっと皆が困ります」

「そっか……（みんなに迷惑かけちゃうことになるんだ。ほむらちゃんは私の為について言ってたけど、これ以上魔法少女が増えるとみんなが困っちゃうから、魔法少女になっちゃいけないって言ってたのかな？）」

「皆のためにも、今は契約してはいけませんよ」

さて、これである程度の時間は稼げるだろう。戦力増強の副産物でしかないが、いい説得材料になった。

「私はチーズケーキにするのです！ さとりお姉ちゃんは どうしますか？（喫茶店でお茶なんて初めてなのです！）」

なぎさと知り合った次の日の放課後、私はなぎさを喫茶店に呼び出していた。どうやらここまできなりおっかなびっくり来たらしく、私と合流出来て安心したのか、今はいつも以上にテンションが高い。

「私はショートケーキでお願いします。飲み物は……紅茶で宜しいですか？」

「よろしいのです！（紅茶！ 大人の飲み物なのです）」

店員に注文をし、私は改めてなぎさと向き合う。

「お母さんの容態はどう？」

「すぐに退院してわけにもいかないらしいのです。末期癌が一瞬にして消え去ったわけですので。検査と体力を戻すのにあと一ヶ月は入院です（それまでは今まで通り施設のお世話になるしかないのです）」

「そう……もし良かったらマミを頼るといいですよ。あの人は一人暮らしなので簡単に居候することができるとしよう」

そうなきさに提案すると、なきさは少し考えてから答えた。

「そうですね。暫くマミの家にお世話になるのです（施設からだど、夜に魔女退治出来ないのです。それにマミなら面倒見が良さそうなのですよ）」

まあそれもあるが、一番の理由はマミの精神安定の為だ。心を読んでよく分かることだが、バマミのメンタルというのはあまり強くはない。

「それで、これからどうするのです？ 魔法少女の真実にワルプルギスの夜、問題は山積みなのです。それに、まどかは契約させてはいけないうって言っちゃったよね？（本当に状況的には絶望的なのです。戦力が揃っていることが今の唯一の救いでしょうか）」

「そのことなのだけれど。機会を見計らって魔女化に関しては話してもいいかもしれません」

「でも魔女化を知ると、マミは絶望して自殺するのです（ほんとゴミメンタルなのです）」結構言うわね。まあでも、彼女たちの中ではマミが一番精神的に脆い。だが、自殺するのはある条件が重なった場合だ。

「必ずしも自殺するわけではないですよ。あの時はその前から疑心暗鬼が積り、最終的にさやかが魔女になったことでマミの精神が暴動しただけ」

「それじゃあ、ある程度安定している時に教えればいいって事です？（ママの誕生日とか？）」

「いえ、ようはシチュエーションですよ。ママは雰囲気を大切にします人ですので」

ママ自身が自分でそこにたどり着くのが一番いい。だが、それは望み薄だろう。かといつて誰かに汚れ役をやらせるわけにはいかない。

「お待たせしました。チーズケーキとシヨートケーキになります（姉妹かしら、可愛いわね）」

「わーい！ チーズケーキなのです！（美味しそうですね）」

紅茶とケーキが届くと、なぎさは早速ケーキを頬張り始める。私はというと、紅茶に少しミルクを入れて、軽くかき混ぜた。

「ではまだ伏せる方向でということでもいいのですか？（チーズケーキ美味しいのです！）」

なぎさは頬を膨らませながら私に聞く。

「ええ、今は出来るだけママと仲良くしてください」

「それは勿論なのです（私としても同居人とは仲良くやりたいと思っていますのですよ）」

私は店員に追加のチーズケーキを注文し、話を続ける。

「次の課題は佐倉杏子の勧誘です。と言っても、ほむらもママも、彼女を仲間に取り入れ

たいと考えているみたいなのであまり心配はしていませんが」

「杏子……という話に出てきた一家無理心中の？（シスターなのです）」

「そう、一家無理心中の。彼女はママに並ぶベテランです。大きな戦力となり得るでしょうね」

なぎさは手持ち無沙汰にフォークを弄る。一皿目のケーキは既に無くなっていった。

「そこなのです。そんなに魔法少女を見滝原に呼んで大丈夫なのですか？ グリーフシードの供給が追いつくとは思えないのです。戦力増強は確かに必要なことではありませんが、だからと言ってワルプルギスの夜戦に持ち込めるグリーンフシードが減ってしまつては元も子もないですよ（一つの畑で取れる野菜は限度があるので）」

「その点に関してはあまり心配してないです。見滝原は他の街に比べて魔女の出現率が高いですし……それに複数で戦えば魔力の消耗を一人で戦うときより少なくできる。そして、これが今日の本題なのですけど——」

私は店員から二つ目のチーズケーキを受け取り、なぎさに渡しながら言った。

「魔女を養殖しようと思っています」

「——っ！（魔女を……養殖?）」

ちやりんと、なぎさが握っていたフォークを落とす。音を聞きつけてか、店員がいそいそとフォークを取り替えた。

「魚介類じゃないので人工繁殖と言ったほうが正しいですかね？　なんにしても、魔女の数を人工的に増やすという点では代わりありません」

「……そんなこと、どうやってやるんです？　（というか、許される行為なのでしようか……）」

「簡単ですよ。魔女の結界から使い魔を解き放ちます。使い魔はそこら中で結界を張るでしょうね。あとは自殺志願者を使い魔の結界に放り込むだけです。数人殺したら、使い魔は魔女になりますから」

なぎさは二つ目のチーズケーキに手を付け始める。その心は思った以上に落ち着いていた。

「そんなの、魔女どころじゃない……悪魔の所業なのです（あまりにも残酷なのです）」
「なぎさ。私はもつとスケールの大きい話をしているつもりですよ。たった数十人の人間の命で、何千人……いや最悪を考えると何十億人の命が救われるのですから。なぎさは頭の良い子です。助けるべきは一か百か。わかりますよね？」

「あ、確かにその通りなのです。グリーンフシードが集まればみんな喜ぶのですよ。なぎさは世界を救うという話をすっかり忘れていたのです（うっかりなのです）」

ちよつと難しい話をするだけで煙に巻けるあたり、なぎさはまだまだ子供だ。まあそうでなくとも、私がすると言ったことを彼女は疑えない。グリーンフシードを病室に仕掛

けるという、一見悪で、危ない作戦が成功したところを見てしまったのだから。それで人の命が救われることを知ってしまったのだから。

私はカップに残っていた紅茶を飲み干すとカウンターに行ってお金を払う。このお金は何処から出てきたものかと言うと、私に無償でお金をくれた優しそうな男性だ。金髪でピアスを開けケラケラ笑いながら大きな車に連れ込もうとしたので、適当にトラウマを植え付け身ぐるみを剥いだけだが。

「まず何処に行くのです？ 早速魔女の結界を探すのですか？」

「いえ、なぎさはマミの家に遊びに行ってください。そして話の中で母が入院中で帰る場所が施設しかないという話をするんです。そうしたらマミの方からここに住まないかと提案して来るでしょう。母親の説得や施設への挨拶もマミが行ってください」

「わかったのです。さとりお姉ちゃんは？（そんな事まで分かるなんてさすがさとりお姉ちゃんなのです！）」

「私は魔女養殖の下準備を進めます。幸いなことに、ある程度の魔女の位置は把握しているのさ」

養殖するとしたらハコの魔女がいいだろう。彼女と私は性質が似ている。きつと快く使い魔を『貸して』くれるはずだ。

喫茶店の前でなぎさと別れ、私は町外れにある工場へと向かう。ほむらの知識によれ

ば、この工場は数週間前に営業破綻し、今では休業中らしい。私は誰もいない工場へ足を踏み入れ、奥へ奥へと入っていく。そして魔女の結界を見つけた。

「さて、私と同じ引き籠もりさん。力を貸していただきますよ?」

私は魔女の結界へと入っていく。そこはメリーゴーランドのような、思った以上にメルヘンチックな何かだった。

「だれ? そこにいるのはだれ?」

結界に入った途端に、箱からツインテールだけ出した魔女が現れる。私を魔なるものと認識しているお陰か、攻撃されることはなかった。

「私は古明地さとり。魔女のようなものです。今日は貴方をお願いがあつてきました」

「(そう、貴方も心を読むのね。嫌よ、そんなお願い。私は魔法少女の餌になる気はないわ)」

「そう? 貴方にとつてもいい話だと思つたのですけど。貴方の代わりに働いてくれる魔女が沢山できるんですよ?」

「(……あ、悪くないかも。使い魔はいくらでも生み出せるし。それにエリー株式会社支部が沢山出来るってことよね?)」

「株式会社なの?」

「(かっこいいじゃない株式会社)」

「あ、そう。それで、使い魔は貸していただけるのですか？」

「(いいわ。生きている時も家畜の安寧だったし。虚偽の繁栄も悪くないかもね)」

「……オタク？」

「(腐つてただけよ。今もだけど)」

ハコの魔女はゆったりした動きで箱から出てくる。箱から出た彼女は普通の人間と大差ない見た目をしていった。

「(それに、貴方の考えに乗るのも悪くないわ。私はエリーよろしくね)」

エリーはいかにも卑屈そうな笑みで私に対し右手を伸ばす。私も精一杯の笑顔を浮かべてその手を握り返したつもりだが、酷く醜い笑顔だったことだろう。

なんにしても、ハコの魔女大繁殖計画が始まった。

第四話 「奇跡じゃなくて必然です」

「へえ、それじゃあ今はなぎさちゃん二人暮らしなんだ」

「うん。なぎさちゃんのお母さん、まだ退院出来ないんだって」

学校終わりの帰り道。私はまどかとさやかの話聞きながらも、少し後ろを歩いていった。まどかの話では、百江なぎさがママの家に居候するらしい。まあ、それ自体はあまり驚くような話でもないだろう。きつとママのことだ。ママの方から誘ったに決まっている。

私はまどかの横に視線を向ける。そこには二人の話を微笑みながら聞いているさとの姿があつた。彼女は最近放課後によく居なくなるらしい。理由を聞くと、幻想郷に帰る手がかりを探しているのだとか。

「でも一人暮らしして憧れるなあ。まどかはどう？ 一人暮らししてみたいって思う？」

「私は一人は寂しいかな。やっぱり家族と一緒にいいよ。さやかちゃん？ 上条くんとは上手くいってるの？」

「なんで今の流れで恭介の話になるのよー！ あれか!? 同棲しろってか!？」

そう。驚くことにさやかと上条恭介が付き合うことになったらしい。なんでもさやかが魔法少女になった時に、上条恭介がその場に居合わせたとか。所謂吊橋効果というやつだろう。なんにしても、上条恭介との恋仲が上手くいつている限り、さやかが魔法化することは無いだろう。

「さやかちゃんが魔法少女になってから数日経ったよね。魔女退治は順調？」

「順調順調！ つてもまだ慣れないことのほうが多くてね。マミさんやほむらに頼りつきりですわ」

「そうね。なぎさのほうが必要がいいかも」

「なんですと!？」

いや、さやかをからかった冗談などではない。百江なぎさ、彼女は天才だ。魔法少女としての素質も高く、攻撃力も高い。流星、他の時間軸でベテランのマミを食い殺しているだけはある。

「これからマミさんの家だっけ。そのまま魔女退治？」

「うん、そんな感じ。まどかはどうする？ 魔女退治には連れていけないけどお茶だけでも……」

「ううん、さとりちゃんと一緒に真つ直ぐ帰るよ。みんなに迷惑かけちゃ悪いもん」

まどかはそう言って少し寂しそうに微笑む。それを見て何かを察したのか今まで

黙っていたさとりが不意に口を開いた。

「寄つていきましよう、まどか。私もなぎさに会いたいですし」

「…… うん！」

まどかは今度こそ満面の笑みで頷く。私はその顔を見てほっとため息をついた。

「いらつしやいなのです！ お茶の準備は出来ているのですよ！」

マミの部屋を訪ねると、なぎさが元氣よく飛び出してきた。それから少し遅れて、まみが顔を出す。

「こら、あまりお客さんを急かしちゃダメよ？ ふふ、みんないらつしやい」

「お邪魔しまーす！」

さやかはなぎさと一緒になってマミの家に駆け込んでいく。私は少々呆れながら、まどかたちと一緒に中に入った。

部屋の中にはいつもの三角のテーブルが置いてあり、その上に大きなホールのチーズケーキが置かれていた。

「これはまた……随分立派なケーキね」

テーブルには他に、マミ自慢のティーセットが置かれている。三角の一辺ずつに二人

ずつ座ったが、やはり少し狭い。

「うーん、この人数で集まると少し手狭ねえ。かといつてもう一つテーブルを持つてくる程でもないし……難しいわね」

マミは紅茶の用意をしながら苦笑する。マミが淹れる紅茶は非常に美味しい。またこの紅茶が飲める日が来るとは思えなかった。近い時間軸では、マミとは険悪な雰囲気だったから。

「さて、じゃあ始めましょうか。と言ってもあまりゆつくりはしてられないけど」

「まあ、まだあまり魔女が活発な時間でもないわ」

「うんうん♪ ほむらの言う通りですよマミさん。それに、最近あまり強い魔女も出てないですし」

そう、それが今の問題でもある。四人で魔女退治に出るのはいいが、魔女が落とすグリーフシードが間に合っていないのだ。まだマイナスにこそなっていないが、この状態が続けばマイナスになる可能性がある。そろそろ二手に分かれて効率を上げるべきかも知れない。

「まあ、あの人数で魔女退治したら、大抵の魔女には遅れを取らないわ。でもそろそろ二手に分かれるべきかもね。二人もある程度慣れては来たでしょう？」

マミが私の思っていたことを口にする。さやかは少し自信なさげに頭を掻いた。

「うーん、大丈夫ですかね……分けるとしたらマミさんとほむらは別になって、それぞれに私となぎさちゃんがつくってことですよね？」

「戦力を半分に分けるのだとしたらそうなるかしら。とりあえず、私となぎさちゃん、暁美さんと美樹さんで分けましょう」

一瞬その分け方はどうかと思ったが、私はさやかかの戦闘スタイルをよく知っている。なぎさよりかは合わせやすいだろう。

マミはケーキを配りながらチーム分けをしていく。今日のケーキはよほど力が入っているのか、いつも以上に豪勢だった。

「わーい！ 今日となぎさスペシャルなのです！」

話を聞く限りだと、どうやらなぎさがマミに頼んで作ってもらったらしい。チーズに對する執念は若干怖いものがあるが、喜んでチーズケーキを頬張る姿は可愛らしかった。私も一口食べてみるが、確かに美味しい。チーズの風味がしっかりしているが、くどくなく、とても食べやすい。

「それじゃあ、私は今日もさとりちゃんと一緒に帰ればいいかな？」

まどかがケーキを食べながら少し諦めたような声を出す。まどかの気持ちもわからなくはない。仲間外れが少し悲しいのだ。だが、こればかりはどうしようもない。まどかを魔女退治に連れて行くわけには行かない。でも、だからといってさとりにまどか

を預けてしまつて本当にいいのだろうか。

「……ええ、それでいいわ」

「……うん。さとりちゃん、今日は何して遊ぼつか」

まどかは軽く微笑みながらさとりと話し始める。少し拗ねた様子に私は若干の焦りを感じるが、あと数週間の辛抱だ。我慢してもらうしかないだろう。

「それじゃあ、今日も張り切つていきましようか」

マミのマンションの前でまどかとさとりと別れ、私たち魔法少女は桃太郎が鬼退治に向かうように、魔女退治に向かうことになった。マミの部屋で話した通り、今日は二手に分かれることになっている。マミはなぎさと、私はさやかとペアを組む。

「それじゃあ、私らはこっちに向かいますか」

さやかは張り切つた様子で大きく伸びをし、ソウルジェムを持って歩き出す。私もソウルジェムを握りこみ、さやかの後ろを歩いた。

「……そういえばさ。……いや何でもない」

さやかは何かを言いかけ、途中で止める。

「何よ。気になるじゃない。それとも、そんなに聞きにくいことなのかしら」

さやかは迷ったように頭を掻く。そして意を決したようにこちらに向き直った。

「ほむらはさ、どんな願いで魔法少女になったの？」

なるほど、さやかが聞こうか悩む気持ちもわかる。確かに聞いていいことなのか判断が難しい。いや、基本的に人の願いというのは聞いてはいけないものだ。

「答えられるような願いではない、ということだけ教えておくわ」

「そっか……ごめん、変なこと聞いたわ。つと、魔法の結界が近いみたいだよ」

歩き始めて十分もしないうちに私たちは魔法の結界を見つけた。普段ではあまり考えられない早さだが、まあこういう日もあるだろう。賽を振り続ければ必ず一の目が出るように。私たちは魔力の反応を頼りに結界に近づいていく。すると少し奥まった路地裏に魔法の結界があつた。

「そんなに強くは無さそうね。私は援護に努めるからさやか一人で倒してみなさい」

「おおっと!? いきなりスパルタですなあほむらさんは。よーしさやかちゃんがんばっちゃいますよー!」

さやかは変身して肩の調子確かめるように腕を回しながら結界の中に入っていく。私もそれを追って中に入った。今までの時間軸ではこんな場所に結界があることはなかった。初見の魔法女ということはないだろうが、少し気を引き締めて魔法退治に当たったほうがいいだろう。

「えっと、あのテレビみたいなのが魔女だよね？　なんか本当に弱そうじゃん」

結界の中には見慣れた魔女がいた。確かこれはいつも廃工場で見えるハコの魔女だ。こんなところに結界を作るような魔女ではなかったと思ったが、魔力からして使い魔が成長したものだだろうか。

「ええ、この魔女は一気に決めてしまったほうがいい。何も考えず一刀両断すればいいわ」

「んな適当な……でも、シンプルでいいか」

さやかは剣を両手で構えると、一気に飛び上がり力任せに下に切り下ろす。ハコの魔女はその衝撃で地面に叩き落とされ、動かなくなった。

「うそ、はやっ！」

さやかはあまりの弱さに驚いているようだが、それは私も同じだった。ここまで弱い魔女ではなかったはずだ。次第に結界が解かれ、グリーンシードがぼつんと残される。さやかはそれを拾うと得意げにピースを作った。

「いえーい！　さやかちゃん大勝利！」

「魔女が弱かっただけよ。調子に乗らない」

私はさやかにデコピンを食らわせ、路地裏から出る。さやかは少し頬を膨らませながらも一緒に歩いてきた。

「でも、だいぶ戦闘にも慣れたようね。安心したわ」

「といつてもまだ不安はあるけどね。頼りにしてるよ、ほむら！」

まったく、調子がいいつたらない。私は軽くため息をつきながら魔女搜索を再開した。

「さやかたちが向こうに行つたということは、私たちはこつちですよね？」

なぎさはママの手を握りながら歩き出す。ママはそんななぎさの様子に微笑みつつ優しく手を握り返す。その様子は姉妹そのものだった。

「そういえば、ママはいつから一人暮らしをしているのですか？」

なぎさは素朴な疑問をママに投げかける。だが、ママにとってそれは少し話しくい話題だった。

「そうねえ、結構長いわ。もう慣れちゃつたけど」

「一人暮らししてなんだか格好いいのです！ でも、なぎさはママと一緒に凄く凄く楽しいのですよっ！」

「ふふ、私もよ。なぎさちゃんと一緒に毎日が楽しいわ」

ママは微笑みながらソウルジェムを取り出した。すると途端に魔女の魔力を感じ取

る。その魔力は非常に弱かったが、確かに魔女のものだった。

「嘘、私の家のこんな近くに魔女だなんて……物騒ね。なぎさちゃん、弱い魔女みたいだからさっさと倒してしましましょう」

「はいなのですー！」

なぎさは変身すると、武器であるラツパを抱えて結界の中に入っていく。ママも結界の中へ入ろうと変身した瞬間、結界が解けた。そこには魔法少女姿のなぎさと、グリーンフシードがひとつ。誰がどう見ても戦闘が終わった後である。

「終わりました。なんだか、凄く弱い魔女だったのです。迷路の奥にいるわけでもなかったですし」

なぎさはグリーンフシードを拾うと、ママに駆け寄る。ママはなぎさからグリーンフシードを受け取り、それを詳しく観察した。

「普通のグリーンフシードね。……使い魔が魔女に成長したばかりだったとか？」

なんにしてもグリーンフシードはグリーンフシードだ。ママはなぎさにグリーンフシードを返すと、変身を解いて再び歩き出した。

私はまだかと二人で見滝原の街中を歩いていた。家にも宿題ぐらいしかやるこ

とがないのである意味暇つぶしのようなものだ。まどかは見慣れた町並みの中に何か自分の興味が引かれるものがないかとしきりに周囲を見回していた。

「今日もいい天気だね（服を見に行くのも……デパートに行ったら何かあるかな？ それとも天気がいいから今日は公園でピクニック？）」

「そうですね。今日はこうやって街を散歩するだけでもいいかも知れませんね」

「散歩かく、いいかも！ それじゃあ今日は見滝原を探検だね！（さすがさとりちゃん、ナイスアイディアだよ）」

それはまあ、相手は何をしたのかこつちは手にとるようにわかるのだ。ニーズに合わせることは簡単である。まどかは少し軽くなった足取りで歩道を歩いていく。私はそれに遅れないように少し歩調を速めながらついていった。

「よっし、これで五体目と。……ほむら、これって」

確かに何かがおかしい。一日にこんなに沢山の魔女と出会うだけでも奇妙だが、その出会う魔女一つ一つが異様に弱い。しかも、出会った全ての魔女がハコの魔女だ。同じ魔女に何度も何度も出会う。それほど奇妙なこともない。

「ええ。何かがおかしいわ。それに、酷く嫌な予感がする」

さやかもこの状況の異常さに気がついたらしい。だが、考える間もなくまた魔法の結界を発見する。私はため息をつきながらも結界の中に入り、変身した。この弱さなら、時間を止める必要すらない。私は盾の中から弾薬装填済みの無反動砲を取り出すと、セーフティーを解除し、後ろにさやかがいらないことを確認した後には引き金を引いた。

「うわああああ!! 撃つなら撃つって言ってよ!!」

無反動砲の発射音と爆発音にさやかが尻餅をつく。まあ確かにお腹の底に響く爆音が突然したら腰を抜かすのも致し方ないかもしれない。

「あら、ごめんなさい」

なんにしても、これが一番魔力の消費が少ない。時間を止める魔力すら惜しむのはどうかと自分でも思うが、それほどまでに出てくる魔法が弱いのだ。私は落ちているグリーフシールドを拾う。これで本日六個目。魔力の消耗は殆どないので実質只でグリーフシールドが六個手に入ったことになる。それ自体は喜ばしいことなのだが、素直に喜べない私があった。

「……ママたちと合流しましょう。大元から絶たないと倒せないタイプの魔法かも知れないわ」

いや、ハコの魔法はそういうタイプの魔法ではない。活動的な魔法ではあるが、このように増殖するタイプではないはずだ。

「うん、そうだね……」

崩れていく結界の中、さやかは変身を解く。私も無反動砲の穴の開いた葉莖を結界内に捨て、砲自体を盾の中に入れてしまうと、変身を解いた。

「取り敢えず、私はマミに連絡を入れるわ。さやかはソウルジエムを取り出して周囲を警戒しておいて頂戴」

私は携帯電話を取り出し、マミにメールを打ち始める。さやかはソウルジエムを取り出すと手の平の上に置いて魔力を感知し始めた。

もうそろそろ日も落ちるだろうか。見滝原の街はすっかり薄暗くなり、街灯がつき始めている。私とまどかは人気のあまりない町外れを歩いていた。まどかはすっかり歩き疲れたのか、少し歩調が狭い。だが声にはまだ張りがあり、まだ少し興奮気味なようだった。

「今日は楽しかったね。こうやって街を散歩するのもいいね（今日はいっぱい歩いたなあ。少し疲れちゃった。今日のご飯何かなあ?）」

「そうですね。私も楽しかったです。またこうして出かけましょう」

そういうえば、ここは例の廃工場の近くだ。ハコの魔女は上手くやっているだろうか？

私が放課後を使って集めた自殺志願者はおよそ300人強。勿論、全員が全員本気で自殺を考えているわけではない。だが、生きる気力のないものや、生きていてもつらいだけのものは社会のためにもさっさと殺してしまったほうがいいだろう。まあ、その全てを一度に使い魔に与えたわけではないが。

「ん？ さとりちゃん、あれ……（あれって、仁美ちゃん？）」

まどかの指差す先にはクラスメイトの仁美がふらふらとした足取りで廃工場の中に入っただけだった。仁美の他にも、ほとんど意識を失っているような状態の人間が何人か廃工場の中に入っただけだ。

「なんだが様子が変だよ……もしかして、魔女の口付け？（だとしたら、仁美ちゃんが危ない！）」

「まどかはママさんに連絡を。私が様子を見てきます」

「そんな！ 危ないよ！（外で待ってたほうが……でも、仁美ちゃんが……）」

まどかは携帯を握り締めながら私に叫ぶ。だが、まどかはひとつ失念しているようだ。

「まどか、大丈夫ですよ。私は人間ではないので魔女の影響は受けません。それに、逃げ回るぐらいはできますので」

私は仁美の後を追って廃工場の中に入る。廃工場の中には洗剤が入ったバケツが置

かれており、今まさにもうひとつの洗剤を混ぜようとしているところだった。何かの本で読んだことがある。確か次亜塩素酸ナトリウムと強酸性物質を混ぜると塩素ガスが発生するのかなんとか。なんにしてもこのまま塩素ガスが発生すると遅れて入ってきたまどかが死んでしまうので阻止しよう。

私はバケツを掴むとそのまま窓の外に放り投げる。その様子を見て魔女の口付けを受けた人間が私に襲い掛かってくるが、私は宙に飛び上がることによってそれを回避した。空中にいる限り、人間じゃ手出しできない。

「さとりちゃん大丈夫?! (酷い、まるでゾンビみたい)」

案の定、マミに連絡し終えたのであろうまどかが廃工場の中に入ってきた。それと同じに魔女が結界を展開し私とまどかが中に引き込まれる。このままだとまどかと私は魔女に殺されてしまうだろう。いや、正確にはまどかだけか。

「マミさん、もうこっちに向かっているって! (私が連絡する前からこっちに向かっているみたいだった。ということは先に魔女を見つけたいってことなのかな?)」

まどかの予想は正しい。おそらくだが、ほむらあたりがこの魔女養殖に気がついて元の魔女を絶つためにここに向かうことを提案しているはずだ。私の予想ではあと三十秒。二十秒。十秒……

「まどか! 助けにきたわ! (本体はやっぱりここにいた。ということは今までの)

やっぱり使い魔が成長したもののね」

ほら、予想通り。

「それじゃあ、暁美さんのところもなのね」

私が事情を説明すると、マミはポケットから大量のグリーンフシードを取り出した。私たちが集めたグリーンフシードと合わせておよそ四十。これだけのグリーンフシードがあれば、しばらくは魔女退治をしなくてもいいぐらいだ。

「グリーンフシードが集まるのはいいことだけど、このままじゃキリがないね。マミさん、どうする?」

さやかが頭を掻きながらマミに聞く。マミは困った顔をしながら答えた。

「そうね、どうしようかしら。私としてもこんなことは初めてだし……今までの魔女、全部使い魔が成長したもののなかしら」

「たぶんそうよ。この魔女には心当たりがある。もしかしたら私なら魔力を追えるかも知れないわ。大元を倒さないことにはどうしようもない」

私の記憶では、ハコの魔女は町外れにある廃工場に結界を張っていたはずだ。今もそこに結界を張っている可能性が高い。

「頼もしいわね。じゃあ、探索は曉美さんに任せるわ。大体の方向はわかる?」
「そうね、向こうの方だわ」

私はソウルジェムを取り出し、廃工場に向けて歩き出す。廃工場に向かう途中何度か魔女の結界に出くわすあたり、やはり廃工場を中心に魔女が広がっているようだ。

あと少しで廃工場に到着するといった時、マミの携帯に着信が入る。マミは少し慌てた様子で携帯を取り出すと、耳に当てた。

「もしもし? あ、鹿目さん? ……。——ツ!? それは本当? ……うん、わかったわ。実はもう近くまで来ているの。すぐに向かうわね。それじゃあ、切るわよ?」

マミは通話を切って携帯をポケットにしまうと、ソウルジェムを取り出して魔法少女に変身する。

「鹿目さんが魔女の結界を見つけたみたい。廃工場のあたりだそうよ。古明地さんが結界の中に入っていったって」

それを聞いて私たちも急いで魔法少女に変身する。魔法少女の身体能力なら、廃工場まで数分も掛からないだろう。私たちは力任せに工場地帯を走り抜ける。そして記憶通りに結界を張っていたハコの魔女の結界に突入した。

「まどか! 助けにきたわ!」

結界の中には話に聞いていたようにまどかとさとりがいた。どちらともまだ魔女に

は襲われていないようで、まどかは私たちを見て安堵の表情を浮かべていた。

「ほむらちゃん！」

「まどか、動かないで。さやか！」

「OK！」

さやかは私の合図でハコの魔女に切りかかる。ハコの魔女はさよかの攻撃をひらりと避けると使い魔にさよかを襲わせた。

「——ツ!? つち、ほむら! やっぱりこいつらが本体だ! 今までのとは比べ物にならないぐらい強い」

さやかが使い魔を対処しているうちに、マミが何十丁ものマスケット銃を作り出し、一斉に魔女に発射する。マミの発射した弾丸はハコの魔女を粉々に砕いた。

「ふう、これで終わりかしら」

「マミー……」

砕けた魔女の残骸からズルリと何かが這い出し、マミのほうに飛来する。マミは咄嗟の出来事に少々身を硬くしつつも冷静にその攻撃を避けた。飛来した何かはそのまま地面にぶつかると、いかにもダルそうな動きでノロノロと起き上がる。卑屈そうな笑みを浮かべたそれはニタニタ笑いながら私たちを見た。そうか、あれがハコの魔女の本体なのだ。いつもテレビのようなハコに入っていた為、本体を見たことがなかった。

「まったく、イレギュラーが多すぎるわ」

私は時間を止めると、手榴弾を取り出し、割りピンを伸ばすことなく無理やり安全ピンを引き抜く。そしてその手榴弾をハコの魔女に向けて投げた。

「みんな、耳を塞いで！」

私は時間停止を解除すると声を張って注意喚起する。次の瞬間、魔女の足元で手榴弾が起爆した。MK3手榴弾は破片を飛ばして殺傷するタイプの手榴弾ではないため、危害半径は小さい。こういう閉所で使っても意外と平気だ。だが、その分火薬の力で殺傷するため、音は大きい。

「うわー！ 耳塞いでてもうるさい！ ほむら！ 急に投げるなってあれ程……ってあれ！？」

「さやかが驚くのも無理はない。先ほどの一撃で魔女は倒れ、結界は既に崩れ始めていた。」

「流石眺美さんね。頼もしい限りだわ」

変身を解いたママミが結界の外で倒れている人の様態を見ながら感心したように呟く。私は魔女のいたところに落ちているグリーンフィードを拾い上げた。

「これで後は残党狩りを行えばこの魔女の事件も收拾するわね。まどか、さとり、怪我はない？」

まどかはふるふると首を振る。見たところ、二人とも無傷のようだった。

「美樹さん、なぎささちゃん。鹿目さんと古明地さんを連れて先に帰っていてくれないかしら。私と暁美さんはもう少しこの場を調査してから帰るわ」

マミは何か考えがあるのか私を残して他のみなを先に帰らせる。さやかは私たちを置いていくことに少し戸惑っていたようだったが、すっかり暗くなった廃工場を見て、まずはまどかたちの安全が第一だと思ひ直したらしい。納得した顔で皆を引率して工場地帯を去っていった。

「さて、警察には連絡したし私たちもこの場を離れましょうか。少し話したいこともあるしね」

マミは携帯をポケットの中に仕舞うと夜の見滝原を歩き始める。私もその後についていった。ゆつくりと歩きながら、マミはグリーンフシードの一つを私の方に投げる。

「そのグリーンフシード、どう思う?」

「どうって、普通のグリーンフシードじゃない。使っても?」

「ええ、どうぞ」

私はマミから渡されたグリーンフシードでソウルジェムを浄化する。使い勝手もまったく変わらない。

「浄化もできるし、変わったところはないわね。どうかしたの?」

「ママは神妙な顔をしてこちらに振り向く。

「相談したいことっていうのはそのこと。今回の事件、本当に魔女の仕業かしら」

「……」

「ママの言いたいことはわかった。それは私も思っていたことだ。

「何者かが魔女を養殖している可能性がある。そうよね？」

「……ええ、そう。まるで何者かがグリーンフシードを集めるために使い魔を育てているように思えて。もしそんなことをする者がいるなら、魔女よりもタチが悪いわ」

「私とママはお互いに向き合いながらも押し黙る。」

「……ママ、私は今回の事件。人為的なものだと考えているわ。こんなこと、自然には起こらない。そして、その犯人は確実に見滝原にいる。そうじゃないと、この街で魔女の養殖など考えない」

「暁美さん、私たちの他に見滝原に魔法少女なんていたかしら」

「私の知る限りではないわね。隣町から流れてきたならまだしもね」

「隣の風見野には佐倉杏子という魔法少女がいる。だが杏子は使い魔を見逃しこそするが、魔女の養殖をするような魔法少女じゃなかったはずだ。」

「少し様子を見たほうがいいわね。取り敢えず、今後は残党狩りに集中しましょう」

「この事はさやかに？」

「……伝えないほうがいいかもね。美樹さんなら独りでに気がついてしまうかも知れないけど。取り敢えず、今日取れたグリーンフシードは皆で均等に分けましょう。これだけあれば暫くは余裕を持って魔女退治ができるわね」

マミが私の持っているグリーンフシードの数を確認し、数個を私に渡してくる。私のポケットの中には既にグリーンフシードでいっぱいだ。本来ならば嬉しい状況のはずなのに、素直に喜べない。もしかしたらこのグリーンフシードは人間を餌にして育てられたものの可能性があるからだ。そう思うと、ポケットの中に血が溜まっているようで、妙に気持ち悪かった。

「珍しいね。君が見滝原に来るなんて」

「見滝原が妙なことになってるって言ったのはアンタじゃん。ちよつと興味があつてね」

見滝原全域が見渡せる鉄塔の上に、一人の魔法少女が腰掛けていた。その横には、キュウベエの姿もある。

「確かに、今見滝原は少しおかしなことになっている。一人の魔女が生み出した使い魔が次々と魔女化した。今の見滝原には成長した魔女がいたるところにいるよ」

それを聞いて魔法少女、佐倉杏子は目を細めて手に持っていたクレープを齧った。

「なにそれ、グリーンフシード獲り放題じゃん。……いや、逆かあ？」

「そう、もう大元の魔女が倒されてしまったから僕もなんともわからないけど、何者かが魔法の繁殖を図った可能性はあるね」

「魔法の繁殖ねえ……マミの奴がそんなことするとは思えないし、余所者か？　なんにしてもマミとアンタの目を盗んでそんなことができるあたり只者じゃないね」

「余所者ね。確かに今の見滝原にはイレギュラーが多い。契約した覚えのない魔法少女や何処から来たのかも分からないような妖怪までね」

「おいちよつと待て。魔法少女はまだ分かるけど、妖怪ってなにさ。魔法の一種？」

キュウベえの言葉に杏子は怪訝な顔をする。キュウベえはその場でぐるりと回ると杏子の問いに答えた。

「性質としては魔法に近いけど、魔法とはまったく違うものだよ。ようは人間の言うところの化け物やお化けのようなものさ」

「まあ魔法少女なんてものがあるんだ。そういう存在があるっていうのは分からない話じゃないけどね」

杏子は鉄塔から飛び降り、地面に問題なく着地する。

「なんにしても、グリーンフシード祭りみたいなもんじゃん。参加しない手はないっしょ」

杏子は最後の一口を口の中に放り込み、不敵に微笑んだ。

第五話 「それはきつと錯覚です」

手の平に溢れんばかりのグリーンフシードが乗っている。魔法少女として戦うのに必要なそれ。私たちが生きていくために必要なそれ。でも、その一つ一つが犠牲になった人間の血で汚れているようで。ママからグリーンフシードを受け取ったなぎさは無意識に涙を流していた。

「なぎさちゃん？ どうしたの？」

「う、うう……ううう」

いきなり泣き出したなぎさを、ママは少々混乱しながらも優しくあやす。

「どうもしないのです。何でもないのでですよ……」

なぎさはグリーンフシードを袋に入れると、目をごしごしと擦る。そして、ママに対して作ったような笑みを浮かべた。

「なぎさはいつも通りなのです。全然……全然大丈夫なのですよ」

その現場を最初に見つけたのはさやかだった。争った形跡の室内に、割れた窓ガラス。そして、床には多量の血痕が残されていた。さやかは腰を抜かしつつも咄嗟にほむらに連絡を取る。ほむらはマミの部屋に入るなり顔を顰め、首を横に振る。そして悲しそうに目を細めた。

「ほむら、これって一体……マミさんは？ なぎさちゃんは？」

さやかは震えた声でほむらに尋ねる。ほむらは割れたガラス片を調べながら答えた。

「この場所で魔法の結界が展開した痕跡があるわ。おそらく、寝ている間にそれに巻き込まれて……でも、どうやって？」

「そんな……そんなことって」

さやかはマミの部屋で涙を流しながら崩れ落ちた。ほむらは顔を伏せながら静かにさやかに告げる。

「珍しいことじゃないわ。昨日楽しく語り合っていた魔法少女が、次の日には死んでいるなんて。私たち魔法少女はそういう存在よ。結界の中で死んだら、死体すら残らない。本当に死んだかどうかも分からず、一生行方不明のまま処理される」

「ほむらの言うとおりだ。この状況からして、マミとなぎさは魔法に殺された可能性が高いね。それにしても奇妙なことがある。この辺に孵化しそうな魔法があつたら、マミが真っ先に狩っているはずなんだけど。マミが寝ている間に根付いて、そのまま数時間

で孵化したのだとしたら相当に成長が早い。まるで誰かが孵化寸前のグリーンフィードをママの部屋に放り込んだみたいじゃないか」

ほむらに付いて部屋に入ってきていたキュウベえが冷静に状況を解説した。それを聞いて、さやかが咄嗟に顔を上げる。

「それってなに？　ママさんたちを魔女に意図的に襲わせた奴がいるって言いたいのか？」

「あくまで可能性の話さ。昨日の魔女養殖の件といい。あまりいい兆候じゃない。二人とも、しっかりと用心するんだ」

「魔女の……養殖？」

「キュウベえッ！」

ほむらは咄嗟にキュウベえを睨むが、キュウベえはお構いなしだった。

「なんだ。ママやほむらから聞いていなかったのかい？　昨日のハコの魔女の大繁殖、あれは人為的に起こされた可能性が高い。」

「そんな、そんなこと……許さない。絶対に……」

「さやか？」

ほむらはそっとさやかに手を伸ばす。だが、さやはそれにまったく気が付いていない。

「私が絶対に敵をとってやる」

ほむらはそれを見て、軽く頭を抱えた。今回の時間軸は割りと上手くことを運べているとほむらは思っていたが、それは見当違いのようだった。今回の時間軸は問題だらけだ。イレギュラーが登場したと思えば大量の魔女、そして巴マミの突然の死。

「全く、本当にどうしようもない世の中ね」

ほむらは小さくため息をつく、マミの部屋を詳しく調べ始めた。

何食わぬ顔でさやかとほむらの二人は登校してきたが、読心能力がある私からしたら口を塞ぐ程度じゃ無意味だ。さやかとほむらはマミとなぎさの死をまどかに悟られないうように気を配っているみたいだが、私には情報が筒抜けだった。

なんにしても、マミとなぎさの二名が死んだのは想定外だ。ほむらの記憶を頼りに考察するならば、マミかなぎさが魔女化し、どちらかを殺害。その後魔女は別の場所に移動した。そう考えるのが自然だろう。私の予想では、魔女化したのはマミのほうだ。原因として考えられるのは、なぎさからの情報漏洩。魔女化の真実を知ってしまったマミはそのまま魔女化し、なぎさを殺害し逃亡。それが一番考えられるだろうか。

そして何よりも危惧しなければならないのは、今回の事件がきっかけでほむらが早々

にこの時間軸を諦めかけていることである。ここまでイレギュラーが重なるのなら、今回は諦めて時間を戻そうとまで考えているのだ。それに、さやかの精神状態も相当に酷い。魔女化するにはまだ少し猶予があるが、ソウルジエムが濁り始めていることには変わりない。その辺はほむらが上手くフォローしてくれるといいのだが。

「それでねさやかちゃん、昨日はさとりちゃんと見滝原を散歩したんだ。歩いてみると私も行ったことのない場所がいくつかあって。今度みんなでピクニックしよ！（昨日は本当にびっくりしたよ。でも、仁美ちゃんに怪我がなくてよかった）」

「それは楽しそうですね（昨日のあれ、一体なんだったのかしら。本当に不思議ですわ）」

「そうだね（それで、昨日魔女の結界を見つけたのか）」

「私はお弁当用意しようかな？ マミさんが紅茶を用意して……なぎさちゃんはチーズかな？（お外で飲むお茶もいいよね）」

「うん（マミさん……でも、まどかに教えるわけにもいかないし。それに、ほむらからも口止めされてる）」

さやかは咄嗟に表情を作ってまどかに笑いかける。まどかはその笑顔に安心し、興奮した様子で話し続けた。死んだ人間が淹れた紅茶が楽しみだと、話し続けた。

「ごめんね！ お待たせ！ 恭介！」

皆でよく行くフアーストフード店で、さやかと恭介は待ち合わせをしていた。二人とも既にホットドッグを買っており、空いている席に對面して座る。いつもなら、ここで会話が始まるが、さやかは手持ち無沙汰にジュースに手を伸ばしただけだった。

それもその筈で、今回は恭介がさやかを呼び出したのだ。いつもはさやかから誘うことが殆どだった為、さやかとしては非常に緊張している。そんなさやかの気持ちを知らずか、恭介は軽く苦笑すると、話し始めた。

「ごめん、急に呼び出したりして。今日忙しくなかつたかい？」

「そんな、全然全然！ 恭介の方こそ良かったの？ 私が誘つてもいつもバイオリンの稽古だつて言つて断るじゃん？」

「ははは、それに關しては申し訳ないとは思つてるけど、譲る気はないよ。さやかが治してくれた腕だ。今は思う存分演奏がしたい」

さやかはニカつと微笑むと、ジュースを机の上に置く。

「ほら、僕は稽古で忙しいけど、さやかは魔女退治で忙しいだろう？」

魔女退治という単語を聞いて、さやかは自分でもわからない程度に表情を暗くする。その微妙な変化を、恭介は見逃さなかつた。

「やつぱり、何かあつたんだね」

「なんで、そんなふうに思うの？ 私は全然——」

「大丈夫なようには見えない。今日呼び出したのはその為なんだ」

恭介はホットドッグを一口齧り、話を続ける。

「魔女退治のことで、何かあつたんじやないかい？ どんなことでも相談にのるから、話してごらんよ」

「さやかは一瞬きよとんとした表情を浮かべると、参つたなど言わんばかりに苦笑した。」

「卑怯だよ、恭介。そういう聞き方はさ」

「そうかな？ ……はは、そうかも知れないね。でも、僕は卑怯で構わない。さやかのほうが大切だよ」

「さやかは目にうつすら浮かんだ涙を手で拭くと、改めて笑顔を作る。だがその笑顔はとても弱々しいものだった。」

「恭介、ありがとね。でもここじゃ話せない。もう少し閑散とした場所に行こう」

「僕の家に来るかい？ お茶ぐらいしか出せないけど」

「ううん、歩きながらでいいや。行く」

「さやかはまだ手を付けてないホットドッグを持つと、トレイを戻して店を出る。恭介

と二人、人通りの少ない道を歩きながら、さやかはぼつりぼつりと話し始めた。

「前に話したことあったっけ？ 魔女退治って言っても一人でやってるわけじゃなくて……仲間がいるんだ」

「そうなのかい？ 僕はてつきり魔法少女なんて早々いないなものだと思ってたけど」

「うん、見滝原には何人か。恭介も知ってる人だったらほむらとかがそうだね」

「それは……知らなかったな。暁美さんと喧嘩したのかい？」

さやかは恭介のそんな予想を聞いて、苦笑を浮かべる。そして軽く首を振った。

「ほむらの他にも魔法少女がいたんだ。三年の先輩のママさんと病院で会ったなぎさちゃん」

「じゃあ、その二人と喧嘩を？」

「もう、そういうところだけ鈍いんだから……言っただしよ。『いた』って」

それを聞いて、恭介は察したように黙る。

「二人共、死んじゃった。それも、私の全く知らないところで。誰にも気が付かれることなく」

「……そうか」

恭介はそれを聞いて、ホットドッグを一口齧る。そして何か納得したかのように頷いた。

「その先輩のママさんって人は強い魔法少女だったのかい？」

「……そりゃ、まあ。ベテランだし、私なんかより全然強いよ。なんで死んじやったのかわからないぐらい」

「食べなよ、ホットドッグ。冷めちゃうじゃないか」

「え？……う、うん」

さやかは戸惑いながらも言われた通りホットドッグを食べる。それを見ながら、恭介は続けた。

「だったら、精一杯今を楽しもうじゃないか。その人たちの分も。その人たちも覚悟の上だったはずだ。魔法少女っていうのは、そういうものなんだろう？ だったら、さやかは今を精一杯楽しまなきゃ。美味しい物を食べて、疲れるまで遊んで」

「なんで、恭介がそんなことわかるのさ」

さやかに問われて、恭介は恥ずかしそうに頭を掻く。

「前に話したつけ。病院の屋上でさ。僕はここから眺める見滝原が好きなんだって」
恭介は立ち止まってさやかの顔を見た。

「あれ、嘘なんだ」

「え？」

恭介の突然の告白に、さやかはきよとんとしてしまう。

「ずっと自殺することばかり考えてた。ここから飛び降りたらどんなに楽だろう。逃げたい。現実から逃げたいって」

「そんな！ それって——」

「そうさ。死ぬことだけが救いだった。だからこそ、死について人一倍考えたんだ。そんな僕が辿り着いた一つの結論。聞いてくれるかい？」

「……うん」

恭介はホットドッグの最後の一口を口に入れると、改めてさやかに向き直った。

「人間は死んだ人の為に生きてるんだ。死んだ人が出来なかったことを生きている人間がやる。死んだ人が成し遂げられなかったことを生きている人間がやるんだ」

「死んだ人の為に生きる？」

「そうさ」

恭介は自分の左手を見る。今では全く問題なく動くその腕を。

「と言っても、これは自殺しようとしていた時に思いついた自分に対する言い訳なんだけどね。自分が死んでも自分がしようとしていたことを成し遂げてくれる第三者がいる。だから死んでもいいやって。勿論、今ではそんなネガティブなことは考えてないけどね」

「成し遂げる……か。そうだよ。マミさんがやり残したこと、私が引き継がなきゃ」

さやかは手に持っていたホットドッグを無理やり口の中に詰め込むと、口をもごもご言わせながら飲み込む。そしてケチャップのついた口を拭うことなく両拳を突き上げた。

「よっしやー！ 魔女退治頑張るぞー!!」

顔に浮かぶ笑顔に陰はない。妙にすつきりした顔をしていた。

「はは、さやか。ケチャップが口についてるよ。ほら、じつとしてて」

「え？ きゃー！」

恭介はそつとさやかを抱き寄せる。そしてそのままさやかにキスをした。

取り敢えずさやかはこれで大丈夫だろう。恭介に助言をしておいて正解だった。さやかが落ち込んでいるから慰めてやってくれと。それにしても、慰めるの意味が若干違う気がするのはいせいでらうか。

「よっしやー！ 今日も張り切って魔女退治行ってみよう！（私が、見滝原を守るんだ!）」

「えらくテンションが高いわね（おかしいわ。昨日はあんなに精神的に病んでるように見えたのに……気のせい?）」

ほむらはさやかの前向きな発言に少々戸惑っていたが、絶望しているよりかはいいか

と、そこで思考をやめる。

「なんにしても、状況が読めなさすぎるわ。今までは安全上まどかとさとりに家は家で待っていてもらっていたけど、これからは二人の『安全』の為にきてもらおうわよ（魔女からではなく、魔女を養殖した何者かから守るために）」

ほむらとしては、まどかの家に住み込みで監視につきたいと思っているようだ。

「はい、わかってます。まどかもあまりはしゃじやダメですよ」

「わ、わかっているよ！ わくわくなんかしてないもん！（でも、これで仲間ハズレじゃないよね）」

「本当にわかってますか？ 既に人が死んでいるんです。家で待っているよりも魔女の結界の中に入ったほうが安全だという異常事態だということを理解してください」

「そう、だよね（もちろん、わかっている。マミさんとなぎさちゃん、襲われた可能性もあるんだよね）」

ほむらはほつと安堵のため息をつく、ソウルジェムを取り出して歩き始めた。

「取り敢えず、昨日の残党がまだ結構見滝原に残っているわ。それを狩りつつ新たな魔女がいらないか見回しましょう（本来ならば分かれて探索したいと思っているんだけど、情勢的に厳しいわね。今は極力まとまって行動したほうがいい）」

「そういえば、マミさんの部屋にグリーンフィードはあった？ 昨日あれだけ狩ったんだ

から全てを全て持ち歩いてはいないと思うし、部屋にいくつか残っていると思うんだけど（もしそのままだったとしたら、回収したほうがいいわよね）」

「……それもそうね（いや、グリーンシードを回収するのではなく、マミの部屋にグリーンシードがあるかどうかを確認したほうがいい）」

なるほど。ほむらの言いたいことがわかった。もしマミの部屋にグリーンシードがないのなら、マミたちは第三者に殺された可能性があるということか。

「（もしマミの部屋にグリーンシードがないのなら、マミを殺したのは魔女を養殖した魔法少女だ。自分でグリーンシードを得るために魔女を養殖したのに、その多くをマミや私に取られてしまった。その魔法少女はどうにかしてグリーンシードの回収を図るはず。それこそ、マミや私を殺してでも）」

ほむらはちらりとさやかを見る。

「（さやかの言うとおりに、マミが全てのグリーンシードを持ち歩いているとは思えない。グリーンシードがマミの部屋に無かったら、第三者の犯行ね。その場合、一番危険なのはさやかだわ）」

これはまた面倒なことになってきた。思惑というものはうまくいかないものだ。良かれと思ってやったことが裏目に出るとは。なんにしても、マミとなぎさを失ったのは戦力的に痛い。なんとしても杏子を仲間に取り入れなくては。

ほむらはソウルジエムをしまうと、マミのマンションの方向へと歩き出す。それに私たちもついていった。

「やはり、この部屋のどこにもグリーンフシードが無い（だとしたら、マミは殺されたと判断するのが妥当ね）」

ほむらはマミの部屋に入ると、ソウルジエムを取り出し魔力の痕跡を探る。だが、グリーンフシードは見つからないようだ。

「あれほど大量のグリーンフシードよ。魔力を感じないほうがおかしいわ（さやかも襲われる可能性もあるわね）」

「ほむら……これって、誰かにグリーンフシードが盗まれたってこと？（マミさんたちを殺した魔法少女がいるってこと？）」

「どういうこと？（それってもしかして、マミさんたちは悪い魔法少女に襲われたってこと？）」

「——つ（この際、理解を得るためにも私の予想を話しておくべきかもしれないわね。だとしても、まどかがショックを受けるかも知れない。それが原因で嫌われるようなことになったら……）」

ほむらは迷ったように目を泳がせる。だが、話す決意を固めたようだった。

「ママたちは魔女を養殖した魔法少女に殺されたと見て間違いないわ。魔法少女……仮にAと呼びましょうか。Aは大量のグリーンフィードを得るために使い魔を育て、魔女を養殖した。だけど、その多くは私たちが狩ってしまった。Aは理不尽な怒りを覚えたことでしょうね。何せ獲物を横取りされたんですもの。それで、グリーンフィードを回収しようとなぎさの寝込みを襲った。ここにある血痕はそのときのもの（きつと穢れきつたグリーンフィードを投げ込んだのでしょねママも咄嗟のことで対処仕切れなかった）」

暁美ほむらとしての視点では、それが一番正解に近いのだろう。もっとも自然で、もっとも考えられる解だ。だが、魔女養殖の主犯である私からしたら、魔法少女Aなんて存在しない。だとしたら、グリーンフィードはどこに消えたのか。一番考えられるのは、大量の魔女の反応に誘われて佐倉杏子が見滝原に來た可能性。杏子がママを殺したとは考えにくいけど、私たちが発見するまでの間にママの部屋に上がりグリーンフィードを回収した可能性はある。なんにしても、杏子に接触すればわかることか。

「Aの目的がグリーンフィードだとしたら、一番危ないのはさやか、貴方よ。というわけで……さやか、しばらく私の家に住みなさい（さやかを一人にするのはまずい）」

「それはいいけど……いきなりだなあ（でもそうか。私の家で襲われると私の家族が危

ないのか)」

そう言いながらもさやかは携帯を取り出し親にメールを入れ始める。さやか自体は数日の間だけだと考えているようだ。まあ、確かにこの事態の収拾に何日もかかるとは思えない。緊急的な避難は短い期間で済むだろう。

「さて、それじゃあ今まで以上に警戒しながら残党狩りを再開するわよ。できれば今日中に狩りつくしておきたい。Aは既に大量のグリーンフシードを手に行っているでしょうけど、これ以上Aにグリーンフシードを与えたくない(今日中には無理でしょうね。でも、少しでも数を減らしておいたほうがいい)」

私たちはマミの部屋を後にする。ほむらたちは残党狩りを始めるようだ。私はいとうと読心の範囲を広げ、杏子の探索にかかる。町中を練り歩くのだ。少しは何か手がかりが掴めるかもしれない。杏子本人の意識を感じ取れなくても、杏子を見た一般人がいるかも知れないからだ。

しばらく皆で魔女を探しながら歩いていると、私はようやく佐倉杏子の手がかりを得ることができた。どうやら杏子もハコの魔女の残党を狩っているようだ。杏子本人はまだ見つかっていないが、きつと今回のこれもグリーンフシード祭り程度にしか認識して

いないだろう。

「ほむら、使い魔だ！ 昨日のやつじゃないみたいだけど、狩ったほうがいいよね？（これ以上魔女を増やすわけにはいかない。それに、使い魔だつて人を襲うんだ）」

「……そうね。狩ったほうがいいわ。先に行きなさい。私はまどかさとさとりと一緒にゆつくり行くわ。だけど一度見失ったら戻つてきなさい。逸れると厄介よ（まどかさとりの足ではあの使い魔には追いつけない。ここはさやかに任せましょう）」

さやかはほむらの言葉に頷くと、魔法少女に変身して使い魔を追いかける。私たちもそれを追つて軽く走り始めた。さやかのところまで後数十メートルという距離に近づいた瞬間、私は同時に杏子の思想も感じ取る。その思考を読む限り、いい雰囲気ではなさそうだった。

「ほむら、先行します」

「え？ ええ、わかつたわ（動きたがらないさとりが……珍しい）」

余計なお世話だ。私は曲がりくねった路地を一気に飛行すると、さやかと杏子の間に飛び込んだ。

「やめてください」

私はさやかかの剣と杏子の槍の間に割り込む。杏子の槍は私の腹を貫き、さやかかの剣は私の後頭部から右目にかけて貫いた。

「——ッ!? (やばー! 一般人巻き込んだか!?)」

「さとり!? (さとり、なんでここに!?)」

凄く痛い。だが、それだけだ。私は右手でさやかかの剣を、左手で杏子の槍を掴む。そして保持したままズリりと体から引き抜いた。私はどうしてこんなことになっているのか、二人の記憶を読む。

(見つけた! くそ、足が速い!)

(なにあれ。使い魔を襲ってやがる。もったいないっつーの)

(——ッ!? 誰!?)

(「ちよつとちよつと! なにやってんのさアンタ。見てわかんないの? アレ使い魔だよ? グリーフシード持つてるわけないじゃん(折角のチャンスなのに魔力を無駄使いしちゃってさ)」)

(「そつちこそ何言ってるんだ。アレほつといたら誰かが殺されるのよ!?(こいつ、もしかして……)」)

(「だからさあ……数人食って魔女になるのを待っての。そうすらちゃんとグリーフシードを孕むんだから。卵産む前の鶏絞めてどうすんのさ(まあ、今の状況を考えればそこまで気にする程ではないけどね)」)

(「なつ……アンタ、黄色い魔法少女に心当たりは?(こいつが、マミさんを殺した張本

人?)」

(「心当たり? そりや、あるけど。なんにしても、学校で習っただろ? この世界は弱肉強食。食物連鎖って知ってるよね? 弱い人間を魔女が食う。その魔女を私たちが食う。これが当たり前のルールじゃん。まさかとは思うけど、やれ人助けだの正義だの、その手のおちやらけた冗談かますために契約したんじゃないよね? (黄色い魔法少女って言うのと、マミのことだよな? まさか、こいつはマミの子分か何か? 完全に考え方がド素人じゃん)」

(「やっぱり、アンタがマミさんを……許さない。絶対に許さないツ!! (こいつがほむらの言っていたAだ!)」

(「ちよ! いきなりなにを——ツ!? (なんだこいつ。いきなりプツンして襲い掛かって……って、やばいな。こいつ素人にしては相当強いぞ)」

(「ちつ、さつきからなんなんだよ! こういうのはただの価値観の違いだろ!! (取り合えず手足の腱でも切るか? そうでもしないとまらないぞ)」

(「人の命を何だと思ってるんだ!! 人の価値はグリーンフィールド以下だなんて、そんなの絶対間違ってる!! (今回の事件で何人の人間が犠牲になつてると思ってるんだ!!)」

とまあ、こんな流れだったらしい。典型的な勘違いというやつだ。

「さやか、多分勘違いです。この人は魔女養殖の犯人ではありませんよ」

抜いたところからどぼりと血が溢れ出て、地面に血溜まりを作る。

「さとり！ そんなこと言ってる場合じゃ！（待ってて！ 今治すから！）」

「動かないで下さい。もうここで戦闘しないというなら、治療させてあげます」

私は近づいてきたさやかから少し距離を取る。さやかはガシガシと頭を掻きむしると混乱したように言った。

「ああもうわかった！ コイツと戦わないから治療させるー！」

さやかはこちらに走ってきて私に抱きつく。すると次第に私の傷は癒えていった。

「回復魔法、にしちや効きすぎじゃない？ あんた、どんな願いで魔法少女になったのさ？（それにコイツが抱きついてるアイツ、絶対人間じゃねえな。コイツも魔法少女……いや、それも見えない。一体何もんだ？）」

「アンタには関係ないでしょ？（流石妖怪？ 傷の治りが凄く早い。私の魔力を殆ど使わずに治療出来た）」

さやかと杏子が睨み合う。どうやら誤解自体は解けていないようだった。

そうこうしているうちに、ほむらとまどかが追いついてくる。ほむらは睨み合っているさやかと杏子を見て深くため息をつく、杏子のほうに近づいた。

「ごめんなさい、うちの馬鹿が迷惑を掛けたわ。ここは私に免じて見逃してくれないかしら（大方、魔女退治に対する考え方の違いで喧嘩したんでしょうね。佐倉杏子は味方

にしたいし、いい関係を築かないと)」

「アンタに免じてつて、そもそも私はアンタを知らない。まあ馬鹿に迷惑を掛けられたつてところは、大正解だけだね。ちゃんと教育ぐらいしといてよ（コイツの目……タダモンじゃねえな。人数的にもこつちが不利か）」

「ほむら！ こいつだ！ こいつがAだ！（こいつ以外に考えられない……）」

「違うと思うわ（杏子は根は真面目で優しい人だし、マミと会った時もある程度親しげに話してた。昔の師匠であるマミを襲うとは考えられないわ）」

「Aつてなにさ。私にはちゃんと佐倉杏子つて名前があるつつの（こいつ、さつきから私を擁護しようとしてる？ ……行動が読めない）」

近づいてくるほむらに対し一定の警戒をしつつ、杏子は構えを解き槍を水平に肩に担ぐ。

「なんにしても、アンタとは話を通じそうだ。それに、マミのやつもいるんだろ？ なんにしても、勘違いで襲われちゃ溜まったもんじやない（Aつてなんだ？）」

「……バマミは死んだわ。何者かに殺された可能性が高い。何か知らない？（少し卑怯な言い方だけど、これが一番手っ取り早いわね）」

杏子はマミの死を聞くと、その言葉を理解した瞬間に思考がフリーズし、槍を地面に落とす。そして無言のままほむらに近づき、ほむらの胸ぐらを掴んで叫んだ。

「適当なこと言ってんじやねえ！ マミが簡単にくたばるわけないだろ！（マミが死んだ？ そんなこと、絶対に……）」

杏子はほむらを睨みつけるが、それを見返すほむらの目は非常に悲しみを帯びていた。杏子は助けを求めるように視線をさやかやまどかに向ける。だが、さやかもまどかもほむらとあまり変わらない顔をしていた。

「……マジなんだな。マミが死んだつてのは。犯人は分かっているのか？（仇討ちつてガラでもないけど、あのマミがやられたんだ。私だつて殺される可能性もある）」

「犯人はまだ見つかっていない。私は魔女を養殖した魔法少女が犯人だと踏んでいるけど（反应的に杏子は白ね）」

杏子は地面に落ちている槍を踏みつけ消し去ると、軽く鼻を鳴らして私たちに背を向けて、歩きだした。

「ま、私の方でも調べてみるよ。その代わりに、私も暫く見滝原で魔女を狩るからそのつもりで（グリーンフィールドも集めたいし、一石二鳥かね）」

「ええ、よろしく願いますわ（ほんと、根は真面目よね）」

杏子は手をヒラヒラと振りながらこの場を去っていく。杏子の姿が見えなくなつた頃、さやかかほむらに聞いた。

「ほむら、アイツと知り合いですか？（親しげとまではいかないけど、仲が悪いわけではなさそ

うだった)」

「いえ、私が一方的に知ってるだけよ。なんにしても、これで佐倉杏子が犯人ではないと分かったでしょう？（さやかは人の表情を読むのが上手いし、理解出来るはずだけど）」
「なんとなくね。でも、アイツのことは気に入らない。使い魔に人間を食わせて魔女にしろ？ それじゃあAと変わらないじゃん（というか、考え方は同じだよね）」

ほむらは少し考えた後、さやかをじつと見る。

「魔法少女としては、あれが普通よ。一番初めに言ったでしょう？ 魔法少女の仕事はソウルジェムを浄化することだつて。みんながみんなママのように他人も守れるほど強いとは思わないことね。みな今を生きるのに精一杯なのよ（これは事実。どこもかしこも見滝原ほど魔女がいるわけではない。本当に魔女を狩りつくしてしまつたら、グリーフシールドが枯渇してしまう）」

「だからつて……（納得できるはずがない）」

「納得しろとも使い魔を見逃せとも言わないわ。でも、ああいう魔法少女もいるということとは覚えておいて。全部に全部噛み付いたら口がいくつあつても足りないわ（さやかと杏子は仲がいいはずだから、ちゃんと話し合えば分かり合えるはずなんだけど。なんにしても、杏子がこの町に来ていることはわかつたし、近いうちに会いに行つたほうがいいわね）」

ほむらは納得していない様子さやかから視線を外すと、私のほうに向ける。いや、正確には私の血まみれの制服に目を向けた。

「で、さどりのそれは大丈夫なの？ 服の破れ方からして、返り血というわけではないのでしょうか？（まあ人間じゃないみたいだし、大丈夫だとは思うけど）」

「——ツ!!? さどりちゃん!!（酷い、あんなに血が!!）」

ほむらが指摘したことによつてまどかも私が血まみれであることに気がつく。私のほうに駆け寄つてきたので私は一步引いてまどかに血がつかないように配慮した。

「まどかまで血まみれになつてしまいますので触つては駄目ですよ。私の傷はすでにさやかさんが治しましたから」

「その傷は佐倉杏子に？（出血量からしてそうとしか考えられないけど、そんなことする子だったかしら）」

「あー……ほむら、それやったの私とアイツ。殺し合っている間に飛び込んでくるものだから二人ともブレーキかけられなくてそのまま……（さどりが人間じゃなくて本当によかつたよ）」

私はまどかの不安そうな視線に対し、シャツを捲つて応える。シャツの下の私のお腹には、傷ひとつなかった。

「ほら、大丈夫よ」

「もう！ さやかちゃん気をつけないと駄目だよ!!（本当に傷は残ってないみたい。でも、だからいいってわけじゃないよね）」

「うう……さとり、本当にごめん！（謝って済む問題でもないような……）」

私は頭を下げるさやかを見て、内心ため息をつく。二人の戦いを止めるためだといえ、これも少々面倒くさい。

「やめてください。第三者の間で問題を大きくしないで。さやかは謝ったし私は許した。それでいいじゃないですか。さやかさんもそこまで気に病む必要はないですよ」

だが、なんにしてもこのままでは路地裏から出ることができない。誰かに服を用意してもらおうしかないだろう。

「なんにしても、これじゃあ家に帰れませんね。制服も新しいのを用意しないと」

「なんか用意してくる！（制服……はどうしようもないよね。てか制服に穴あけたのはアイツじゃん!）」

さやかは服を用意するために路地裏を飛び出していく。どうやら家から服を取ってくるようだ。今からでは三十分以上はかかるだろう。

「鋭利な切り口だから制服も縫えると思うわ。私の家で血液を落として縫いましょう（私も何度かやらかしたことがあるし、案外何とかなるものよ）」

私はほむらの提案にコクンと頷く。そのまま私たちはさやかが帰ってくるのを待つ

た。

第六話 「ええ、私もそう思います」

昼間のゲームセンターというのはやはり人が少ない。そんな中杏子は一人、ダンスゲームに熱中していた。そのリズムカルな足捌きはダンスゲームを知らない私から見ても大したもののように思える。

「よう、今度はなにさ？」

杏子はゲームに集中しながらも、後ろにいる私に気が付き声を掛けてくる。私は率直に用件を伝えた。

「あなたと協力関係を築きたい」

杏子はそれを聞いて、軽く眉を擡める。

「マミの件なら私は一人で調べるつもりだよ。群がって調べても意味がない」

杏子は早々に話を切り上げようとした。だが、私の話の要点はそこではない。

「違うわ。戦力的に貴方の力を借りたい」

「一体何が言いたいのか。目的は？」

杏子が如何にも興味なさげに私に聞いた。その声色は困っているようにも聞こえる。

「二週間後、この町にワルプルギスの夜が来る」

ワルプルギスの夜。観測史上最大の魔女であり、結界を張らなくてもいいほど強い魔女である。

「——ッ……なぜわかる」

「それは秘密。あなたにとつても悪い話じゃないはずよ」

ワルプルギスの夜を倒したとなれば魔法少女としてかなりの箔が付く。そうなれば他の魔法少女に襲われることが少なくなるし、縄張りにも人が入ってこなくなる。それに杏子にとつても狩場を荒らされるのは困るはずだ。

「ま、確かに一人じゃキツくても二人いれば何とかなるかもね」

どうやら杏子はワルプルギスの夜を倒すために協力することには乗り気なようだったが、さやかを勘定に入れていないようだった。

「あれでも衛生兵として優秀なのよ？」

「素人引き連れて倒せるような相手かよ」

「私も戦力としてはあまり期待していいいわ。」

杏子は何か考えるように黙った後、私に質問をする。

「おい、あのひよっこ……名前なんてつたっけ？」

「美樹さやかよ」

「その美樹さやかかってのはどんな願いで魔法少女になったんだ？」

杏子は華麗にステップを踏みながら私に聞く。これは、答えてもよいのだろうか。だが、杏子には何か考えがあるようだ。

「たしか、どんな怪我でも病気でも治す力だったかしら。美樹さやか own 自己治療能力はそこからきているものよ」

「ふーん、道理で。この話、少し待ってもらおうよ。私としてはあんたらと組むのもやぶさかじゃないんだけど、あのルーキーと話をつけてからにしたい」

「どういう風の吹き回し?」

話をつける。杏子が言うのだから文字通りではないだろう。

「ああいう勘違いをしている馬鹿見るとイライラすんだよ。あの様子だと今も間違いつづけてるんだろ? 魔法なんて徹頭徹尾自分の為に使うものなのに」

杏子は自分の願いで家族を壊してしまった暗い過去がある。多分杏子としてはさやかを放っておけないのだろう。だが、ほかの時間軸と違って今回は事情が微妙に違う。願ひも広域的なものだし、上条恭介との恋仲も成立している。そういう面では自分のために魔法を使っているとも言えるだろう。

「ええ、構わないわ」

「じゃあ決まりだね」

杏子は最後のステップを踏み終わり、くるりとこちらに振り向く。その手にはポツ

キーの箱が握られている。そしてゲーム画面にはパーフェクトの文字が現れていた。
「食うかい？」

日もすっかり沈み、見滝原は闇に包まれてきた。養殖された魔女を狩りつつマミに関する情報を集めていた杏子は偶然にも上条恭介の家の前でさやかと鉢合わせる。

「よう、昨日ぶりだな」

「——ッ!? アンタ、まだ見滝原にいたんだね」

さやかはじつと杏子を睨む。杏子はそれを真正面から見つめ返した。

「そりゃこんな魔女がいるんだよ？ 狩らない手はないね。それとも、マミの縄張りだからつてことで追い出すかい？」

「……勝手にすればいいじゃん」

「ああ、私はいつも自分勝手に生きてる。魔法少女つてのはそういうもんだよ」

杏子の言葉にさやかは拳を固める。それを見て、杏子はニヤリと笑みを浮かべた。

「お前のような奴がいるからマミさんはッ!! 自分の生きる為に他人を犠牲にするなんて、そんなの絶対間違ってる」

さやかは言葉に、杏子は顔から笑みを消して真剣な表情を作った。

「そんなのが本当に続くと思ってるのか？　いつか絶対に無理がくる。奇跡を叶えた代償ってのはそんなに安いもんじゃねえんだよ。ママのやつはそんなことも教えてくれなかったのかい？」

「お前みたいなのがママさんのことをわかった風に語るな！　お前にママさんの何がわかるんだ」

さやかは言葉聞いて、杏子は深くため息をつく。

「わかってねえのはそっちだ馬鹿。お前こそママの何を知ってるんだよ。何も知らないだろ？　出会ってそんなに時間も経たずにくたばっちゃったんだから。なんにしても、もつと自分に正直に生きな。そうじゃないと、今に絶対後悔する。とてもじゃないが哀れで見てられねえよ」

杏子は話は終わったとばかりに背を向けて歩き出す。怒りが頂点に達していたさやかは魔法少女に変身すると、杏子に背後から斬りかかった。普段の自分だったら絶対にやらないであろうその卑怯な行為に、自分のことながらさやかは驚愕する。逆に杏子は予想していたのか、それを半身になって避けつつ、一層顔をにやけさせた。

「(っ)じゃ人目につきそうだ。場所変えようか」

学校の宿題というものは非常に面倒くさい。伊達に頭のいい学校ではないので、量そのものは少ないものの、質が高いのだ。私はまどかと向かい合いながらペンを走らせる。そんな時、いきなりキュウベえが部屋の中に入ってきた。

「大変だ！ さやかか危ない！ ついてきて！（まさかさやかと杏子がまたぶつかるとは。ここでどちらかが無駄に死ぬのはエネルギーの無駄使いだ）」

キュウベえの言葉に、まどかは椅子から立ち上がって聞き返す。

「なに!? さやかちゃんはどうかしたの？（危ないって、どういうこと?）」

「杏子と今にも殺し合いを始めようとしている。このままではどちらかが死ぬまで戦い続けるだろうね（さやかはともかく、杏子の目的が読めない。一体何の目的でさやかと戦おうとしているんだ?）」

キュウベえの思う通り、これ以上戦力を減らすのはまずい。私は宿題を片付けるとまどかと一緒に家を飛び出した。

「国道の上の歩道橋だ！ 急いで！（これをきっかけにまどかが魔法少女になってくれるといいんだけど。難しいかな）」

キュウベえの案内に従って私たちは見滝原の町を駆ける。目的地の歩道橋についた頃には完全に息が切れていたが、どうやら間に合ったようだ。二人はまだ睨みあつてい

る段階である。

「待って！ さやかちゃん！（杏子ちゃんと戦う理由なんてないのに……）」

まどかは歩道橋の上でにらみ合っている二人に対して叫ぶ。だが、二人とも意にも介していなかった。

「まどか、これは私の問題。まどかには関係ないわ（これは私とママさんの戦いだ。まどかを巻き込んだんじゃない）」

いや、ママは関係ないだろう。ママは少なくともさやかよりかは魔法少女のことをわかっていた。さやかは魔法少女に夢を見すぎている。

「駄目だよ！ 戦いで決着をつけようだなんて、そんなの絶対おかしいよ！（話し合いでなんとかならないのかなあ）」

「ギャラリーついちゃったじゃねえか。見せもんじゃねえぞ」

杏子はソウルジェムを取り出すと、魔法少女に変身する。それと同時に、ほむらが姿を現した。

「話が違うわ。話し合いで解決するって言ったじゃない（やつぱりこうなった。なんでいつもこうなるのかしらね）」

「言ってない。話をつけるといったんだ。手段に関しては定めた記憶はないね（こういうのは一回痛い目を見せておかないとわかんねえんだよ）」

「貴方とさやかじゃ結果は目に見えてるわ。不毛よ（さやかが瞬殺されて終わりでしょうね）」

ほむらの言葉にさやかは明らかに機嫌を悪くする。

「ナメンじゃないわよ！（ほむらのやつ、いつの間にアイツと関わりを？ なんにしてもここで痛い目みせないと）」

考えることは同じか。似た者同士め。さやかは変身しようとソウルジエムを掲げる。

「（確か、ソウルジエムがなければ変身できないよね。だったら、さやかちゃんからソウルジエムを取り上げれば——）」

「あっ……」

私はまどかを止めようと咄嗟に手を伸ばすが、まどかはスルリと私の手の届く距離から離れ、さよかの元へ駆け寄った。

「さやかちゃんごめん！（これでさやかちゃんが戦わなくても）」

そしてさよかのソウルジエムを横から掠め取るとさよかのソウルジエムを歩道橋から道路へ投げ捨てた。ソウルジエムは重力に任せて落下すると、そのままトラックの荷台に載り、遠くへ運ばれていってしまう。ほむらはそれを確認すると同時にその場から消えた。判断が早すぎて明確に読めなかったが、どうやらさよかのソウルジエムを追ったようである。取り敢えず、ソウルジエムはほむらに任せればいいだろう。

「まどか！ あんたなんてことを!!」

「だって、ああしなきゃ……（さやかちゃん、ダメだよ）」

まどかが必死に言い訳しようとした瞬間、さやかの思考がぶつかりと切れる。どうやらソウルジェムが接続限界距離の外に出たようだ。魂を失ったさやかの体は糸の切れた人形のようにバランスを崩し、地面に倒れそうになる。まどかは突然のことに驚きながら咄嗟にさやかの体を受け止めた。

「さやかちゃん？（いきなり気絶しちゃった？ でも、さつきまで普通に話してたのに）」

「まどか、今のはまずいよ。よりにもよって友達を放り投げるなんて、どうかしてるよ（まあ、戦いを止めるってだけなら合理的ではあったけどね。なんにしても、これでソウルジェムのことをまどかたちに話さざるを得なくなっちゃった）」

杏子は槍を消し去り、まどかに歩み寄るとさやかの首根っこを掴んで持ち上げた。

「どういうことだおいつ、こいつ死んでるじゃねえか！（今の一瞬で何があった!）」

杏子は優しくさやかの体を地面に寝かせる。そしてキュウベえをじつと睨んだ。

「どういうことか説明してくれるんだろうね？（ソウルジェムを捨てた瞬間だった。と
いうことは……）」

「魔法少女が身体を操作できるのは百メートルぐらいが限界だからね。普段は肌身離さず持ち歩いているからこんな事故は滅多に起こらないんだけど（基本的に魔法少女がソ

ウルジエムを無くしたら、そのまま死ぬことが多い。いくらソウルジエムだけで生きられるといっても、ソウルジエムだけじゃ考えることすらできないからね」

「いいから結論を言え。ソウルジエムつてのは一体なんなんだ？（昔から胡散臭い奴だとは思っていたが、こいつまさか……）」

杏子は真つ直ぐ槍をキュウベえに向ける。キュウベえはまったく表情を変えずに言い切った。

「何つて、名前の通りだよ。魂の宝石。ソウルジエムこそ、君たちの魂さ。僕たちとしても、普通の人間と同じような壊れやすい身体で魔女と戦ってくれなんて、そんなことはお願いできない。君たち魔法少女にとって、身体は外付けのハードウェアでしかない。君たちの本体としての魂には、もつと安全で魔力を効率よく使える姿が与えられている。魔法少女との契約を結ぶ僕の役割はね、君たちの魂を抜き取って、ソウルジエムに変えることなのさ（ここまでしてもまだ十分とは言い切れないんだけどね）」

「てめえなんてことを！ ふざけんじゃねえ！ そんなの、ゾンビにされたようなもんじゃねえか！（ソウルジエムが自分の魂だと？ ……でも、ありえない話じゃねえな。なんにしても、こいつの目的が読めない）」

「むしろ便利だと思っただけだな。どんな傷を負っても、全身から血を抜かれても魔力さえあれば回復できる。ソウルジエムさえ無事なら君たちは無敵だ。弱点が多い人体

よりも戦いやすいだろう？（本当はスペアが用意できればいいんだけど、全員が全員同じ見た目になるのも反感を買うからね）」

「酷いよ……そんなの、あんまりだよ……（ほむらちゃんには知ってたのかな。知ってたから、魔法少女にはなるなって言ってたの？）」

まどかはさやかかの身体に抱きつき声を上げて泣き始める。杏子はその様子を只々見ていることしか出来なかった。

「馬鹿馬鹿しいですね。そもそも魂の在り処なんて認識出来ていないのに」

ついぼろりとそんな言葉が私の口から溢れてしまい、私は咄嗟に口に手をあてた。まどかには聞こえていなかったようだが、杏子にはバツチり聞かれてしまったらしい。

「だったら良いってか!? そんなわけあるか！（こいつ、やっぱ人間じゃねえ！ 何処か価値観が人間と違う）」

私がこのようなミスをするのは珍しい。まあこの際だ。慰めておこう。

「私ならむしろ喜びますけどね。あるかどうかともわからない魂があるとわかっただけで。思考というのは所詮電気信号による物理的なやり取りでしかありません。言ってしまうえば感情すら電気信号の物理的な働きでしかないわけです。そんな中、自分が自分であり、ただの物理的な思考機械じゃないとわかったんですから」

「そういう意見は珍しいね。でも確かにそうだ。君たち人間はそもそも魂の存在すらま

ともに証明できていないじゃないか。それがソウルジエムという形になって証明されたんだ。自己の証明を手に行けるといっただけでも君たちにとって利益のあることだと思おうよ？（古明地さと、彼女は全く読めない。彼女の目的がわかればもう少し対処のしようもあるんだが）」

「お前ら、それマジで言ってるの？（そんなこと言われてはいそうですかとは行かぬえだろ）」

まあ、人間の価値観はわからなくても、理解はしているつもりだ。杏子の気持ちもわかる。

「ですが、だからといって実際に自分の魂を自分の体から取り出して欲しいなんて誰も思わないでしょうね。キュウベえ、これは契約違反では？」

「どうしてだい？（契約違反？ 今度は何の話だ？）」

「あなたは魔法少女になって欲しいといっただけで契約していませんよ。あなたにとって魔法少女にすることと魂を引き抜くことは同じことなのですか？」

「違うよ？ 魔法少女にするために魂をソウルジエムに変えるのさ（当たり前のことだよね）」

「その説明はしましたか？」

「してないよ？ 聞かれなかったからね（もつとも、直接的に聞かれた場合以外ははぐら

かすけどね)」

まあ、そういうことだ。聞かれなかったというのは言い訳に過ぎない。私は深くため息をつくときさやかソウルジエムを取ってきたほむらに向き合った。ほむらは肩で息をしながらも、さやかのソウルジエムをさやかの手のひらに乗せる。次の瞬間、さやかが息を吹き返した。

「ほむら、貴方はこのことを知っていた。さやかのソウルジエムを取ってきたということはそのうことなんですね」

「——っ、……ええ、知っていたわ（言えるわけじゃないじゃない、こんなこと）」

ほむらが無理やり無表情を作って言う。その瞬間、さやかがガバリと起き上がった。

「さとり、ほむらを責めるのはやめて。こんなこと、知っても言えるわけがないじゃない（それに、こうやって自分で体験するまでは絶対にこんなこと信じないだろうし）」

さやかはソウルジエムを握り締めると、指輪の形に戻す。そしてそのまま急ぐように走り出した。

「さやかちゃん！ どこ行くの!?!（このタイミングで一体どこに?）」

「恭介のとこ！ ちょっとメンタル的に厳しいから恭介成分補充してくる！（ソウルジエムのことについて、相談しないと……）」

「ええ……（さやかかって、上条恭介と恋人同士になるとここまでメンタル強くなるのね。」

これは良いことを知ったわ)」

「恭介って誰だよ（あいつの男か?）」

さやかはこの場から逃げるように歩道橋を去っていく。なんともまあ一途なことだが、どうやらさやか自身混乱しているようだ。この場から逃げたいがほむらの家に帰るわけにもいかない。だったら向かう場所はひとつしかないだろう。

「恭介はさやかのボーイフレンドよ。さやかは恭介を助けるために魔法少女になった（まあ、あの時は自分の身も危なかったみたいだけど）」

「ちやつかりものにしてるあたり、なんていったらいいんだか。はあ……先に上がらせてもらうよ。今日は疲れた（それに、キュウベえに聞きたいこともあるしな）」

杏子はキュウベえの耳を掴むとため息をつきながらさやかとは反対方向に歩いていく。ほむらはそれを見届けると改めてまどかのほうに向いた。

「まどかたちももう帰ったほうがいいわ。でも、わかったでしょう? 魔法少女なんかになるものじゃないって。魔法少女になるっていうのは、人間をやめるということよ（この世の常識から外れるということ。まどかには平凡な日常を送って欲しい）」

「それは——」

「それは違います。魔法少女も人間ですよ。魂の位置が何処にあらうと、人間は人間です。ほむら、あなたは世界を知らなすぎる。特殊な能力を持った人間なんて、この世に

大勢います。貴方はその全てを人じゃないといって差別するのですか？」

「そういう話をしているわけじゃないわ。私はまどかに平凡な日々を送って欲しいだけ（そんなこと、わかつてる。私もそれは理解しているつもりだ。本当に魔法少女が人間ではないなんて思っているわけじゃない）」

ほむらはもう少し自分に正直になるべきだろう。魔法少女について悪い印象を抱くようにまどかを誘導するのはあまりよくない。まどかのためを思つてやっていることでも、していることはキュウベえと同じだ。

「人間じゃない私からしてみれば、貴方は立派な人間ですよ。さて、じゃあ帰りましょうか」

私はまどかの手を掴む。そしてその反対の手でほむらの手を掴んだ。

「え？（えつと、いきなり何？）」

「どうせ今日はさやかは帰つてきません。一緒にまどかの家に行きましょう。まどかもそれでいいですよね？」

「も、勿論！ いこ、さとりちゃん、ほむらちゃん！」

どうせさやかは今日は恭介の家に泊まりだ。だとしたら、中途半端な状態でほむらだけを放つておくわけにはいかない。ほむらもいきなりの誘いで少々困惑気味だったが、内心まんざらでもないようだった。

プロ顔負けなバイオリンの音色が響く。私はその音色に耳を傾けていた。あの時は強がつて恭介に会いに行くなどと言ってしまったが、いざ家を目の前にして本当に会えるわけがない。だって、私の本体はこんなよくわからない石ころなのだ。言ってしまうばゾンビのようなものである。

「どんな顔して恭介に会えて言うのよ。それに、恭介にも気を使わせちゃう」

それに、恭介とはつい数時間前にあつたばかりだ。今行つてもしつこい女だと思われちゃうだろうな。そんな風に考えると、どうにもインターホンを押す気にはなれなかつた。

「へえ、いい音出すじゃん。相当上手いな、お前の彼氏」

不意にそんな声が聞こえて、私は咄嗟に横を見る。そこにはいつの間にも現れたのか、杏子が立っていた。

「今度は何しに来たのさ。今日はもうそんな元気ないわよ」

「うるせえ、黙って演奏を聞かせろよ」

杏子はそう言つて恭介の家の門にもたれ掛かる。私は何も言えずに、ただただ恭介の

演奏が終わるのを待った。

「音楽つてのはいいね。昔を思い出す」

「さつきから、一体なんなのさ」

私は堪え切れずに杏子を睨み、声を荒げる。私のそんな様子に杏子はけらけらと笑った。

「ほむらの奴から聞いたか？ 二週間後にワルプルギスの夜がくるんだってさ。笑っちゃうよね。一体なんの根拠があつて言つてるのやら。さやかは何か聞いてるか？」

「ワルプルギスの夜？」

一体なんだったか。聞いたことがあるような、ないような。でも、魔法少女にかかわることだっけ？ 私が聞き返すと杏子は私以上に怪訝な顔をした。

「もしかして、ほむらから何も聞いてないのか？ ワルプルギスの夜について」

杏子は私の態度から察したのか、ガシガシと頭を掻く。そして大きなため息をついた。

「秘密主義にも困ったもんだな。……ここでいいか。ちよつと話に付き合えよ」

杏子は何処からともなくスナック菓子の袋を取り出すと無造作に開けてポリポリと食べだす。

「ワルプルギスの夜っていうのは魔女のことさ。それも普通の魔女じゃない。超大型で

「強力な奴」

「強い魔女？」

「そうさ。過去に現れた時は一度に何千人も犠牲になつてゐるって話だよ。ほむらはそれを倒そうとしているらしい。」

杏子はスナック菓子を食べながら話を続ける。

「私も協力を頼まれたよ。そのうちアンタも頼まれるんじゃないか？　一緒に戦つてくれって」

「それで、OKしたの？」

「一応ね。ワルプルギスの夜が通り過ぎると見滝原だけじゃなく私の狩場の風見野も滅茶苦茶になつちやうし」

それは意外な答えだった。私の印象では、断つたものだと思つたのだが。

「つまり、あんたとも共闘するってことになるわけよ。それで心配して様子を見に来たんだが……案の定だね」

杏子はじつと私を見た。

「会つていけないのか？　あんたの祈りで勝ち取つた男だろ？」

「違う、私はそんなこと願つてない。私はもつと人の為に——」

「別に責めてるわけじゃねえよ。むしろ、それで正しいんだ。自分の為に願つて、自分の

為に戦う。それで正しいんだよ。私たち魔法少女ってやつは」

「そんなことない！ 自分の為だけに魔法を使うだなんて、私は絶対そんなことはしない。この力は使い方次第で、きつと人の役に立てるから」

「その考えが甘いつて言ってるんだよ。魔法を人の為に使っても、ろくなことにはならない。さやかがしようとしていることは、金もねえのに買い物しようとするようなものだ。続くもんじゃねえよ」

私は反論しようと杏子の顔を睨むが、言葉が出てこない。杏子の言いたいこともわからなくはないのだ。一方的に奇跡を振りまいては、その皺寄せが何処かにくる。杏子はそう言いたいのだろうか。

「心配してくれてるの？」

「ちが……いや、そうだな。はつきり言うぞ。私はあんたのことが心配だ。あんたは間違いつけてる。見てられないんだよね。そういうのさ」

恭介はまた演奏を始めたらしく、ゆったりした音楽が流れ始める。そんな演奏を少し聞いてから杏子は話し始めた。

「昔話をしてやるよ。私の親は、神父だった。正直すぎる人でさ、それこそ、新聞に載ってる些細な事件に真剣に悩み、涙を流すような人でね。新しい時代には、新しい信仰が必要だって、いつもそう言った。」

杏子は私のほうにスナック菓子の袋の口を向けてくる。私は恐る恐るスナック菓子を受け取り、口に入れた。

「そんな人だ。ある日、教義にないことまで信者に説教し始めた。だけど、どれだけ正しいことを親父が言つてたとしても、傍からみたらただの怪しげな新興宗教だ。信者の足はぷつぷり途絶え、私ら家族は毎日食うのにも困るありさまさ。皮肉なもんだよな。五分でもいいから真剣に親父の話を聞いてくれるやつがいれば、親父が間違つていないことは分かつて貰えるはずなんだ。」

杏子は少し悲しそうな顔をする。

「だから、私はキュウベえにお願ひした。みんなが親父の話を真剣に聞いてくれますよ。うに。翌日には、教会は人で溢れてた。そりやもう毎日怖いぐらいの勢いで信者が増えていつてね。私は私で晴れて魔法少女の仲間入りつてわけよ。そりやもう毎日馬鹿みたいに張り切つてさ。マミの奴に弟子入りして毎日毎日戦つたね」

「……あんたみたいなのがマミさんの弟子？ そんなふうには見えないけど」

「言つただろ？ 私も昔は目指してたんだよ。マミのような正義の魔法少女つてやつをさ」

「あんたが？」

杏子が少し恥ずかしそうに頭を掻く。だが、すぐに真面目な顔に戻つた。

「でもな。そんな日々は長くは続かなかつた。からくりが親父にバレたんだ。大勢の信者が魔法の力で集まったものだど知って、親父はブチ切れた。私のことを人を惑わす魔女だなんて罵つてき。笑つちやうよね。私は毎日、本物の魔女と戦つてたつてのに」

「……杏子。今、その親父さんは？」

「死んだよ。家族を全員巻き添えにして自殺した」

予想以上の答えが返つてきて、私は黙つてしまう。そんな私に構わず、杏子は話を進めた。

「私の願いが、家族を壊しちまつたんだ。そのとき誓つたんだよ。もう他人の為に魔法を使つたりしない。この力は全て自分の為に使い切るつて」

「そんなのつて……」

「おかしいつて笑うかい？　だが、あんたに何がわかるんだ？　実際に経験している分、少なくとも私の話のほうの説得力がある。違うか？」

杏子は軽く微笑むと、私の額をツンと突く。

「まあ強制するつもりはねえよ。だが、これだけは覚えておいてくれ。奇跡の代償つていうのは、あんたの考えている以上に重たい。お前は、まだ何も失つちやいない。だからこそ、ここで間違うな。私からの話はそれだけだよ」

なんだよ、こいつ。いいやつじゃん。

「心配してくれてるんだ」

「——馬鹿、そんなんじやねえよ！ 私はただそういうのが気に入らないってだけでだな……」

「ありがとね。使い魔を見逃すことはしないと思うけど、奇跡の価値を、よく考えることにする」

「ああ、そうしな。んじやな」

杏子はそういうと何処かへ歩いていってしまふ。私はその後姿を見送った。

「奇跡の価値……か」

私は意を決して恭介の家のインターホンを鳴らす。取り敢えず、恭介と一緒に話し合ってみよう。これはある意味教訓だ。できるだけ秘密を作らず、価値観を共有したほうがいい。

次の日、さやかは行方不明になった。

第七話 「その言葉、そっくりそのまま返します」

ソウルジエムの秘密が明かされた次の日、美樹さやかは失踪した。学校に行った時姿が見えなかったので嫌な予感はしたが、上条恭介に話を聞いて予感が確信に変わった。

「さやかかい？ 昨日の夜に一度家に来たけど……その後は会ってないよ？ ああ、そっか。ほむらも関係者だっけ。あんな話があった後だ。今日は家で休んでいるものだと思つてたけど」

「私の家には帰つてきてないわ。今朝一度家に帰つたときにはさやかが帰つてきた痕跡はなかった」

「ママに続いてさやかもなの？ でも、恭介に話を聞く限りでは昨日は落ち着いた様子だったらしい。」

「やつぱり、さやかに何かあつたんだね。……分かつた、僕も協力するよ」

「一般人の貴方が協力したところで何ができるつて言うのよ。邪魔なだけよ」

本来ならば協力して欲しいところなのだが、魔法少女でもない普通の人間を巻き込むわけには行かない。それに恭介を巻き込んだら、さやか本人が怒るだろう。

「さやかか言う通りだ。 暁美さんはやっぱり優しいね。でも、心配要らないよ。さやかには散々支えてもらったんだ。今度はこっちが、彼女を支える番だ」

「……そこまでの覚悟が、貴方にあるの？ 下手をすると、左腕どころか、命を落とすこともあるかも知れないのよ？」

「覚悟があるかどうかっていうのは、よく分からない質問だね。覚悟はあるなしじゃなく、決めるものだよ。さやかに何かあったら、きつと僕は死ぬまで後悔する。さやかに治してもらった左手を見るたびにね」

「どうやら、覚悟は決まっているようである。だったら、遠慮なく協力してもらおう。そう。だったら協力してもらおうよ。早速今日の放課後からさやかか搜索を始めるわ」

「ああ。わかった」

恭介の協力が得られたことよって、さやかか搜索にも望みが見えてきた。魔女養殖の犯人に殺されていなければ、きつとどこかにいるはずである。

美樹さやかか失踪。これは私にとって完全に予想外な展開だった。恭介の記憶を読む限り昨日のさやかかソウルジェムはそこまで濁っていないはずである。魔女化して

いなければ、どこかにいるはずだ。

考えられるのは、杏子のところに行つた可能性である。ほむらの記憶ではさやかと杏子は相性がいいらしい。だが、それも放課後に杏子と合流したことで可能性が消えた。「さやかか？ 昨日の夜に会つたのが最後だけ……それがどうかしたのかよ（もしかして、あいつ今日学校行ってないのか？）」

「私の家にも帰ってきてないし、勿論学校にも来ていない（杏子のところにいるっていう線も消えた。本当に何処に行つてしまったの？）」

「……つたく、手間のかかるルーキーだな。で、見当はついてるのか？（てかこいつ誰だ？ 男子つてことは魔法少女ではないよな？）」

杏子はちらりと恭介を見る。視線に気が付いたのか、軽く頭を下げた。

「いえ、彼女の行きそうなところを手当たり次第に当たるしかないわね（でも、本当に理由が分からない。今回の時間軸はあまりにも読めない）」

私は四人の記憶を読みさやかの痕跡を探る。だが、この四人は本当にさやかに関しては何の見当もついていないようである。

『杏子、この三人には言っていないことだけど、さやかは例の魔女養殖の犯人に殺された可能性もある。杏子はさやかではなく犯人のほうを追つてくれないかしら』

『魔女養殖の犯人……分かった。確かにそっちのほうが私に合ってる』

ほむらはテレパシーで杏子に指示を出す。確かに、その可能性もあるだろう。魔女を養殖した魔法少女がいればだが。

「んじや、手分けして探しますか。私は一人で行かせてもらうよ（これでいいってことだろうか？ ほむら）」

杏子はそういうと私たちに背を向けて歩き出す。だが、すぐさままどかが杏子を呼び止めた。

「そんな！ まだAが何処かにいるかも知れないんだよ!? 一人は危ないよ！（さやかちゃん、もしかして一人になったから何処かに行っちゃったのかな?）」

「私はそんなやわじやねえよ。何年魔法少女やってると思ってるんだ。むしろ襲われたほうが都合がいいな。こっちから探す手間が省ける（というか、半分それが目的だけだね）」

杏子はけらけら笑いながら後ろ手に手を振り歩き去っていった。ほむらはそれを見送ると、改めて私たちのほうに向き直った。

「さて、じゃあ私たちは私たちでさやかを探しましょうか。取り敢えず手がかりもないし、聞き込みをしながら地道に行くしかないでしょうね（取り敢えずさやかの家に向かいますよ。もしかしたら帰ってきているかもしれないし）」

取り敢えずほむらについていこう。もし自分の足で何処かに向かったのだとしたら

誰かの目に付いているはずである。そういった曖昧な記憶を追っていけばいつかはたどり着くだろう。

さやかが失踪して一週間が経とうとしている。既に警察は動き始めており、同じく失踪扱いになっているマミとなぎさと共に捜査を進めているようだ。マミの部屋は警察が入る前に私が血痕等を処理していた為大きな事件にはなっていない。まあ大きな事件になっていたとしても、今の警察にはそんな余力はないが。

なにせここ最近見滝原では何百人単位で死傷者が出ている。そのどれもこれもが事故や自殺だ。偶然にしては数が余りにも膨大だと警察も頭を抱えているようだ。

「おい、ほんとにAなんているのかよ」

杏子にはここ一週間魔女養殖の犯人を追ってもらっているが、手がかりは出てこない。

「新しく魔女を養殖している様子もないし、もしかしたら他の街に移動したかも。その場合はもう追うのは不可能ね」

「不可能……まあそうか。厳しいよな。そんな余裕もないし。ワルプルギスの夜も近いんだ。……戦力、私とほむらだけで大丈夫なのか？」

杏子の言った言葉に私は不穏な空気を感じ、咄嗟に聞き返した。

「それはどういう意味かしら」

「どういう意味もなにもそのままの意味だよ。ママもいない、さやかもいない。もうこの街に残ってるのは私とほむらの二人だけだ。自信がないわけじゃないんだけどさ。あんたの率直な意見が聞きたいわけよ」

「それは……」

正直、難しいだろう。いつかの時間軸で私とまどかの二人でワルプルギスの夜に挑んだことがある。結果は惨敗。何とかワルプルギスをやり過ごしたものの、結局まどかは死んでしまった。

「やっぱり、厳しいんだな。……ったく、こんだけ探して、しかも警察も動いている状態で見つからないなんて。こりゃ本格的にくたばったか？ なんにしても、戦力としては期待出来ないよねえ」

二人では勝てない。だが、だからといって三人だったら勝てるのか？ いや、三人、四人、いくら魔法少女がいても確信は持てない。

「だからと言って、まどかを魔法少女にするのには反対よ。いくら戦力が足りないからって、あの子を巻き込むことは出来ない」

私がつっぱりとそういうと、杏子は目を丸くして驚いた。

「そんなの当たり前じゃん。これは私達の問題だ。巻き込もうなんて思ってねえよ。そうじゃなくてさ。戦わねえって選択肢はないのか？」

「戦わない？」

私は予想していなかった答えに少し固まってしまふ。

「そうだよ。逃げりゃいいじゃん。馬鹿正直に戦わなくてもアンタの大切なもん抱えて何処か遠くにさ。別に見滝原を離れられない事情があるわけじゃないんでしょ？」

……確かにその通りかも知れない。だが、そう出来ない事情がないわけでもないのだ。

「まどか……あの子は優しすぎる。見滝原が壊滅すると知ったら、きつと魔法少女になつてしまふわ」

「……わかんねえな。どうしてそこまでまどかを魔法少女にさせたがらねえんだ？」

杏子の問いに私は答えることが出来なかった。いや、答えることが出来ないわけではない。私はその時ふと思った。杏子になら魔法少女の真実を包み隠さず教えてもいいのではないか。佐倉杏子はママやさやかと違って一度地獄を見ている。ならば、この真実も受け入れられるのでは？

「杏子」

私は改めて杏子に向き直る。

「なんだよ、改まって」

「これから少しシヨッキングな話をするわ。それこそ、明日隕石が落ちてきて地球が死滅しますぐらいの規模の話よ」

「小学生か、ってそんな雰囲気でもなさそうだな。聞かせろよ。その隕石の話をさ」

杏子は近くにあつたベンチに座ると、どこからともなく板チョコを取り出した。

「それはまどかを魔法少女にしたくない理由に繋がるんだな？」

「ええ。まどかをというよりかは、私は誰も魔法少女にしたくない。……ソウルジェムが魔法少女の本体という話はもう知ってるわよね？」

「あんなことがあつたばかりだろ？ 忘れるわけないさ」

私はソウルジェムを掌の上に載せる。そのソウルジェムは少し濁っていた。

「このソウルジェム、濁り切ったらどうなると思う？」

「どうなるって……魔法が使えなくなる、てわけじゃなさそうだな。死ぬとか？」

「濁り切ったソウルジェムはグリーンフィールドに形を変える。そう、魔法少女である私たちは魔女に成長する運命にある」

ポロリと板チョコが杏子の太ももの上に落ちる。杏子は目を見開いて私を見ていた。

「どういうことだ？ 魔女を狩る私たちが魔女になる？」

「そう。これはキュウベえ、いや、インキュベーターが作り出したシステム。インキュ

ベーターは魔女を狩るために魔法少女を作っているんじゃない。奴らの目的はエネルギーの収集よ」

「エネルギーの収集？」

私は杏子の言葉に頷いた。

「インキュベーター……孵化器。まあ簡単に言うとう宇宙人ね。人類より高度な技術を持つているインキュベーターは宇宙全体のエネルギーが減っていることに気が付いた。そこでインキュベーターは感情をエネルギーとする技術を見つけたのよ。」

「感情をエネルギーに……何か関係があるとは思えないが」

「ソウルジェムは絶望したときも濁りを生む。希望から絶望への相転移。インキュベーターはそれを利用して」

「発電機か私たちは」

杏子は太ももに落ちた板チョコを手に取ると一口齧る。困惑しているようだったが、あまりシヨックを受けている風ではなかった。

「なるほどね。これである程度納得がいったよ。つまりこういうことだ。まどかがもし魔法少女になれば魔女になったとき手に負えなくなる。最強の魔法少女になるってことは、最強の魔女になるってことだろ？ ……おい、最初の隕石のくだりってまさか――」

「ええ、まどか程の素質を持った魔法少女が魔女になると、世界を滅ぼしかねない。だから絶対にまどかを魔法少女にしてはいけないのよ」

まあこれは表向きの理由だ。まどかとの約束を守る。それが一番の理由である。だが杏子にとつては表向きの理由のほうが納得しやすいだろう。

「……つたく、嫌な世界に生まれちゃったな。魔法少女つてもつと愛と希望に溢れてていいと思うわけよ。私も昔はそういうのに憧れたりしてさ」

杏子は何かを思い出すように目を細める。その姿は何処か物悲しげで、普段の杏子からは想像も出来ない表情だった。

次の日、杏子が失踪した。

予想外、といったところであろう。マミの退場はまだ想定の範疇だった。だが、その後が問題だ。なぎさの失踪からあとを追うようにさやか、杏子も姿を消した。ほむらは原因を魔女を養殖した何者かの仕業だと思っているようだが、それはありえない。そもそもそんなやついないからである。だが、そうでなくとも今の状況が拙いことにはかわりない。明らかな戦力不足だ。

「二人で旅行なんてわくわくするね！（何か手がかりが見つかるといいけど……）」
「そうね、私も楽しみです」

あまり人の乗っていない電車に私とまどかは並んで座っていた。私にとつて電車という乗り物はあまり慣れたものではないが、タクシーを使うよりかはいくらか気が楽だ。私は窓から景色を見ているまどかを視界の端に入れながら思考を巡らせた。

戦力が足りない。だからといって馬鹿正直にワルプルギスの夜に挑むわけにもいかない。ほむら一人でワルプルギスの夜に勝つのは無理だ。ほむらが負ければ、まどかは反対を押し切つてでも契約してしまうだろう。そうなつてしまえば世界が滅亡する。自分で言つておいて突拍子もない話であるとは思うが、実際にそうなのだから仕方がない。

だから、私は妖怪らしくまどかを誘拐することにした。ワルプルギスの夜が来るのは明日。ワルプルギスの夜が通り過ぎるまでまどかにテレビやニュースを見せなければいいだけだ。その後壊滅した見滝原を見たときに契約しようとするかも知れないが、とりあえず焦つて契約をせざるを得ない状況にはならないだろう。

まどかにはこの旅行の目的を『私が幻想郷に戻るための手がかり探し』だと伝えてある。目的地は長野だ。とりあえず守矢の神がいた諏訪を目指しているのだ。それに諏訪大社の周辺なら街頭テレビが置いてあるような店はないだろう。

「でも、なんで長野なの？（長野ってそんな神秘的な場所なのかな？）」

「幻想郷に長野から来た神がいたのですよ。その後を追えば幻想郷に帰れるはずです」

「神!? 凄い！ 神様いるんだね！（神様って実在するんだ）」

まどかにとっては幻想郷の情報一つ一つが珍しいもののようなのだ。

「神に限らず色々いますよ。妖怪、幽霊、鬼、バンパイア」

「ええ……幽霊はちよつと。でも、今回の旅行のお金はどうしたの？ 結構かかると思

うんだけど（中学生はアルバイトできないよね？）」

「宝くじで一発当てまして。といっても十万前後ですが」

「宝くじ当たったの!? 凄い凄い！（こどもでも宝くじって買えるんだね！）」

勿論嘘である。宝くじで一発当てたのではない。裏カジノで一発当てたのだ。読心ができる私からしたら、ポーカーで勝つことも容易だ。もつともボロ勝ちしたわけではない。それでは反感を買ってしまう。買った負けたを繰り返し、最終的に百万ほどの勝ちを作っただけだ。

「はした金なんて今回の旅行で使い切ってしまう予定です。なのでお金に関しては気にしないでいいですよ」

「そんな……いいの？（ちよつと申し訳ない、かな？）」

「いえ、こつちのお金は向こうでは使えないので。使い切ってしまうほうがいいんです」

これは本当のことだ。とりあえず、向こうに着いたら諏訪大社に向かおう。一番の目的はまだかを見滝原から引き剥がすことだが、幻想郷に帰る手がかりを探すというのも目的の一つではある。世界滅亡の危機を何とかした後は幻想郷に帰らないといけない。「あとふた駅です。準備しておいてくださいね」

なんにしてもほむらには悪いがこの時間軸は諦めてもらおう。

諏訪は決して都会ではないが、かといって田舎というわけでもない。住みやすい町といえるだろう。まだかは初めて降り立った地ということもあって非常に興奮している。

「まずはどこに行くの？（そういえば旅行の予定をぜんぜん聞いてないや）」

「まずは諏訪大社に行ってみましょう」

「たいしや？（えっと、何だっけ？）」

「神社ですよ。幻想郷に来た神が住んでいた場所です」

「遠い？（ちよつと荷物が重たいかな）」

「少し歩きますね。先にホテルに荷物を置きましょうか」

連泊する旨は伝えてあるのでまだかの荷物はそこそこ大きい。事前に駅前のホテルを予約してあるので先にチェックインを済ませよう。

「ホテル！ 子供だけで泊まるのは初めてだけど、大丈夫なの？（ママと一緒に泊まったことはあるけど……）」

「大丈夫ですよ。お金さえ払えば」

保護者の同意書が必要になるが、そんなものただの書類上のインクでしかない。ある程度達筆な字で書けば本当に大人が書いたものだと思魔化せるだろう。

「そっか、そうだよね（さとりちゃん、この世界に慣れないはずなのにすっかりしてるなあ）」

こういうとき、まどかの素直さは救いだ。私の言葉を簡単に信じてくれる。世界の滅亡を阻止するためにまどかを殺すことも一時期考えたが、私としてもそれはやりたくない。まどかは私にとって殺したくない人間だった。

手早くチェックインを済ませ、宿泊の用意などを部屋に置いて一息つく。ホテルの前なら容易にタクシーを拾えるはずだ。私の予想通りホテルの前にはタクシーが何台か停まっている。私はその中から一番人柄がいい運転手を選ぶとまどかと一緒に乗り込んだ。

「諏訪大社まで」

「はいよ。どっちに向かいますか？（姉妹かな？ いや、小学校の卒業旅行ってところか）」

ああそうか。諏訪大社には上社と下社があるのだ。確か八坂神奈子が祭られていたのは下社であつたはずだ。

「下社でお願いします」

「はいよ（じゃあ案外近いな。大した金額にはならないか）」

こつちの所持金の心配をしてくれるとはなんとも親切なことだ。なんにしてもそんなに距離はない。運転手の思う通り大した金額にはならないだろう。

数分も走るとタクシーは下社に到着した。私は運転手にお金を払いまどかと一緒に外に出る。

「おお、神社（うん、神社）」

まどかの第一印象はそれだった。まあこの歳の女の子は神社には興味はないだろう。それこそ初詣ぐらいでしかいかないのではないか。

「さて、それじゃあ手がかりを探しましょうか」

私はまどかの手を引いて境内を歩く。取りあえず軽く散策した後、神主にでも話を聞いてみよう。

「さとりちゃん的にはどう？ 何かわかった？（神主さんの話も難しくてよくわからな

かったし、何か手がかりみつかったのかな？」

小一時間探索し、まどかが疲れてきたので近くの茶房で休憩している。この店に入った理由は、純粋に第一印象からだった。

「いえ、神主さんも特に何か情報を持つている風ではありませんでした。ここ数年で信者に変化があつたわけではなさそうですし」

幻想郷にある守矢神社とよく似た建物はあつたが、そこにも神の気配を感じられなかった。本当に完全にもぬけの殻の神社なのだろう。代理でほかの神が入っているかと思つていたので少し拍子抜けだ。

「あの神社に神はいないようです。ですが、信仰自体は集まっているようです。諏訪系の神社の本部だけあります。あの様子では近いうちに新しい神が生まれるかもしれません」

「へえ、神様って生まれるんだ（案外人間っぽいのかな？）」

「ええ。人間の出生とは少し違うかもしれませんが。環境によつてはどんなものにも神が宿るのですよ。なんにしても、今の諏訪大社自体に手がかりがあるとは思えませんね」

だとしたら、東風谷早苗が住んでいた家でも探すか。日記か何かがあれば儲けものがある。何か手がかりも見つかるといいかもしれない。

「もう少し休憩したら、今度は町のほうを調べてみましょう」

「うん、わかったー（羊羹おいしい）」

さて、取りあえず早苗の痕跡を辿りながら町を歩いてみよう。何か見つかるかもしれない。

「えっと、また明日！　また明日がんばろうよ！（結局時間を忘れて遊んじゃった）」

私とまどかは夕方にはホテルに戻ってきていた。今日一日でやったことといえば、社を参拝して土産屋を巡って土地の美味しい物を食べただけである。だが、これでいいのだ。まどかの注意を引くことが今回の目的なのだから。それに、全く何も分からなかったわけではない。早苗のいた痕跡は確かにあった。どうやらこの世界では行方不明扱いになっているらしい。ボロボロの張り紙が掲示板に貼られていた。

「ええ、また明日。でも、こういうのも楽しいですね」

私は部屋に備え付けられた紅茶を飲みながらまどかに微笑みかける。次の瞬間、目の前が真っ暗になった。いや、違う。

「え？！」

「さとりちゃん!?（このリボンって……マミさんの!?）」

そう、私はこの一瞬で手足を拘束され、目隠しさえもされていた。まどかの視界を読み、私は状況を探る。部屋の中には縛られている私と私に武器を突きつけているほむらと杏子、マミの姿があった。

「まどか、無事!? 怪我はない?」

ほむらは私の頭に拳銃を押し付けながらまどかに聞いた。おかしい。というかこの状況は拙い。

「あの、マミさん。この状況は一体どういうことですか? 何故私は死んだはずの貴方に銃を突きつけられているのでしょうか。私が一体何を……」

私はマミの真意を探るために意識を集中させるが、マミの思考を読むことができなかった。いや、それどころかマミの魂すらも感じられない。

「何故心が読めない? と、思ってるわね?」

「——ッ!」

「何故それをつて顔だな。たつく、こんなに危ない妖怪だったとは。ワルプルギスの夜も近いのにこんな遠くへ逃げやがって」

マミだけではない。ほむらや杏子の思考も読むことができない。だが、雰囲気で分かる。この三人は私を殺そうとしている。

「貴方について調べさせてもらったわ。魔女養殖の犯人さん。まさか名前の通りの妖怪

だとはね。『さとり 妖怪』で調べたらすぐに出てきたわ。覚妖怪、人の心を読む妖怪がいるなんて」

魔女養殖もバレている。この様子から察するに……。

「なぎさね。困った子だわ」

「ええ、彼女が全部教えてくれたわ。魔法少女の真実も、貴方が行った犯罪も。まさかグリーフシードのために大量殺人をやらかすなんて。知ってた？ この世界では殺人は犯罪なのよ？」

「私が殺したわけじゃありません」

「同じことだろうが!!」

杏子が力任せに私の背中を蹴飛ばす。まどかは小さく悲鳴を上げ私に駆け寄ろうとしたが、ほむらがそれを阻止した。

「まどか、こいつの言うことを信じちゃだめよ。こいつは見滝原で数百人を殺した殺人鬼よ」

「そ、そんな……（さとりちゃんがA?）」

なんということだ。つまりマミは私が魔女を養殖したことをなぎさに聞き、読心の対策のために姿を晦ましていたのだ。途中でさやかと杏子が失踪したのはマミに声をかけられて一緒に行動していた為だろう。

「はあ……どうもなにやら大きな誤解がある気がしてならないのですが。私はこの世界の為に――」

「あれだけの人を殺しておいてよく言うわね」

ママが私の頭に突きつけたマスケット銃に力を込める。何故か心が読めない今、説得するのはきびしい。取りあえずこの状況を脱しないと。私はまどかの見ている部屋の様子を確認し、電球の位置を確認する。大規模な弾幕を張ることは難しい。妖力を練るのに少し時間がかかるからだ。だが、電球だけを狙い打つだけならチャージはいらない。

私は瞬時に光弾を撃ちだし電球を割る。暗くなつた一瞬を利用して私はスペルカードを発動させた。

「想起『妖童餓鬼の断食』」

冥界にいる庭師が使う神速の居合い斬り。その弾幕を想起し私は瞬時に自身を拘束していたリボンを斬つた。まあ、こんな模倣で切れるものなどあんまりないが、リボンを切り裂く程度なら十分だ。そして、自由に動けるようになれば後はこつちのものである。私は怪我をするのも躊躇わず窓に向かって飛び、そのままガラスを突き破つて外に出た。割れたガラスが皮膚の表面を引き裂くが、なりふり構っていない場合ではないだろう。

「——ッ!? 飛び出してきた!」

私は一瞬さやかへの思考を拾った。どうやらさやかとなぎさは外で様子を伺っていたようだ。だが、さやかに構っている場合ではない。私はそのまま近くの路地裏に逃げ込むと、ゴミ箱の陰に身を潜めた。

「一体何なのよ」

人間の価値観は本当によく分からない。私が一体何をしたっていうんだ。私はみんなの為に努力してきたというのに。それをまるで犯罪者のように扱うとは。あんまりだ。

「あーいたぞー!」

あつという間に杏子に見つかる。取りあえず走って逃げるしかないだろう。私は暗い夜道を一人走る。相手は魔法少女だ。純粋に速度で勝てるとは思えない。

「チツ、ちよこまかと!」

必死に走っていたら、急に前に進まなくなった。いや、違う。私のお腹から突き出した槍が私と地面を繋いでいるためだ。大量の血が喉からこみ上げ、私の口から溢れる。なんにしてもこれじゃあ前に進めない。

「手間かけさせるな。今日この日の為に準備してたんだ。逃がすわけねえだろ」

私は串刺しになったまま、強引に杏子のほうを振り向く。そしてどうして心が読めないのか理解した。

「杏子、あなたソウルジエムはどうしたんです？」

「へ、気がついたか。マミのやつが考えたんだぜ」

杏子の胸にあるはずのソウルジエムが存在しない。どうやらソウルジエム自体は別の場所にあるようだ。魂がないから思考が読めない。つまりはそういうことだろう。つまり相手のソウルジエムさえ抑えてしまえばどうにかなる。

「私を殺すのですか？」

「そもそもお前死ぬのか？ まあ、死ななかつたら死ぬまで切り刻めばいいか。なんにしても時間がない」

杏子が構えた槍が振り上げられる。どうやら私の首を刎ねるようだ。妖怪のこの身が何処まで外傷に耐えられるかは分からない。だが死はそう遠いものではないだろう。

「終わりだよ」

次の瞬間、体重の乗った杏子の槍が私の首に振り下ろされた。

第八話 「え？　今頃気が付いたんですか？」

「——ッ!？」

杏子の槍が振り下ろされた瞬間、何者かが私の体に体当たりをし、私を串刺しにしていた槍ごと私の体を吹き飛ばした。私はその衝撃に身を任せるがままに地面に二回ぶつかり、ビルの壁に吸い込まれる。そう、私の体は文字通りビルの壁に激突することなく吸い込まれた。

「一体なにが……」

私は体に刺さっている槍を無理やり引き抜き、自分の血で少々滑りながらも立ち上がる。そして周囲を見回し、今の状況を理解した。どうやらここは魔女の結界の中だ。

「(大丈夫……そうには見えないわね。全く、運がいいのやら悪いのやら)」

突如第三の目が何者かの思考を捉える。私はその心の声に聞き覚えがあった。

「エリー。そう、まだここにいたのですね」

私を助けたのは、箱の魔女のオリジナル、エリーだった。

時間は私がエリーと接触したところまで遡る。

「（それに、貴方の考えに乗るのも悪くないわ。私はエリーよろしくね）」

エリーはいかにも卑屈そうな笑みで私に対し右手を伸ばす。私も精一杯の笑顔を浮かべてその手を握り返したつもりだが、酷く醜い笑顔だったことだろう。

「改めまして、古明地さとりです。さて、早速ですが具体的な話をしていきましょう」

「（そうね。取りあえず、私は使い魔を出せばいいのよね？ 規模としてはどのぐらい？）」

エリーは先ほどまで入っていた箱に腰掛けると手を振り使い魔に椅子を運ばせる。私は運ばれてきた椅子に腰かけた。

「そうですね。どのぐらいの数の自殺志願者が集まるかが問題ですね。取り敢えず十人以上の使い魔は魔女にしたいところです」

「（結構な数ね。まあ使い魔はいくらでも出せるし別に構わないわ。使い魔さえ貸せばあとは勝手にやってくれるんでしょ？」

「ええ、そのつもりです」

「（私としてはその続きが気になるわ）」

そう、魔女を養殖したあとの続き。この計画はただ単に箱の魔女を増やすことだけが目的ではない。狩られること前提で箱の魔女を増やすだけでは、エリーに全くと言って

いいほどメリツトがないのだ。

「まずは影武者を作りましょう。この町の魔法少女が『この魔女が箱の魔女のオリジナルだ』と勘違いする程度には強い者を」

「(そうね。その程度だったら十人から二十人食べさせればそれぐらいの強さにはなると思う)」

「わかりました」

影武者を作ってやることと言ったら一つしかない。私は箱の魔女を幻想郷に逃がすつもりだ。

「まあ、幻想郷への行き方自体はこつちで探すわ。多分その辺フラフラしていたらいつか辿りつけそうだし」

「それは……いいのですか?」

本来ならば、私が幻想郷へ連れていくのが筋というものだ。だが、エリーにはほかの考えがあるらしい。

「(ゆつたりあちこち旅するのも楽しそうじゃない。まあその途中で魔法少女に狩られるかもだけど。その代わり、無事幻想郷に入ることができたら地底にでも居住する場所を用意して頂戴)」

「ええ、約束しましょう。取りあえず、幻想郷に今一番近いのは長野県でしょう。実際に

長野県から幻想郷に移動した神々がいるぐらいですので」

「それで、ここ一週間ばかり長野をぐるぐるしていたと」

私は血まみれの顔を服で拭いながらエリーに聞く。エリーは箱にぐったりと持たれかかりながら私のほうを見ていた。

「びつくりしたわ。饅頭でも食べようかと使い魔を飛ばしていたら貴方が血まみれで窓から降ってきたんだもの。急いで結界を移動させたのよ？ ちよつと荒々しかつたけど上手く逃げられたでしょ？」

なるほど、先ほどの衝撃はエリーの使い魔によるものだったのだろう。上手く私を結界の中に叩き込んだということか。

「この結界は……ああ、移動中ですか」

「ええ。取り敢えず全速力で逃げているわ。まだ魔法少女には悟られていないはず」

取り敢えず、しばらく生存することはできそうだ。私はお腹に空いた穴を無理やり閉じると、一時的にくつつける。失血死することはないが、お腹に穴が開いては不便だ。

「とにかく。一刻も早くこの場を離れたほうがいいわ。最近ようやく幻想郷への入り

口を見つけたの。一緒に向かいましたよ)」

待って、と言う前に私は考えた。私の目的はこの世界を滅亡させないこと。でも、それは別に私だけの願いではないはずだ。世界が滅亡して困るのは私だけではないはず。いや、逆に困らない人のほうが少ないのではないか。

「ええ、そうですね。私もこの傷では何とも行動しにくいですし。一度地霊殿に戻るのもいいかもしれません」

「(一度? って、とてつもないことに巻き込まれているのね。まあなんにしても、目的地は幻想郷でいいわね。じゃあ向かうわよ)」

エリーはそう言うと、箱の中に隠れる。私はこれ以上体力を消費しないために、結界の中で横たわった。

幻想郷の下に広がる地下世界。昔地獄として使われていた場所に妖怪が住み着いた町が旧都だった。私の住んでいる地霊殿は灼熱地獄の跡地に建っている。私の意志が反映された結果かはわからないが、取り敢えずエリーの結界が生成された場所は地霊殿の中だった。

「あ、あーあーあー。あいうえお、かかきくけこ。お? おお! 喋れるわ!」

どうやら外の世界と幻想郷では勝手が違うらしい。エリーは妙に生き生きとしており、殆ど人間の姿をしていた。肘や膝の関節も、人間のそれになっている。やはり幻想郷には不思議な力があるのだろう。

「なるほど。ここが貴方の管理する地霊殿なのね（凄い広いわね。もしかして、かなりの権力者とか？）」

「はい、その通りです。エリーさんここまでありがとうございます」

「同じ人外のおしじやない。別に構わないわ。私としてもかなり過ごしやすい世界にこれたみたいだし（さて、このあとどうしようかしら）」

「地霊殿の近くに今は使われていない物件がいくつかあります。好きなのを使っていますよ。心が読める貴方ならここでの生活には苦労しないでしょうし」

私がそういうと、エリーは妙に驚いた顔をしていた。

「え？ ここでお別れ？ 最後まで付き合うわよ。何か面倒くさいことしようとしているみたいだし（それにここで権力者に恩を売っておくのも悪くないしね）」

「私はそこまで権力者というほどでもないのですが……まあいいでしょう」

私はエリーを引き連れて自室へと戻る。そして着替えを取り出すと体を洗いに洗面所へと向かった。私は血まみれの体を拭きながら今後について考える。私がここで今後について考えることによって、エリーも計画の全容を把握できるはずだ。

私の最終的な目的は平穩を取り戻すこと。マミ、なぎさ、さやか、杏子が生きていると分かった今、ワルプルギスの夜に対する戦力は申し分ないだろう。問題はまどかという地雷、いや、爆弾だ。戦力が充実していたとしても、まどかが契約してしまう可能性は十分ある。

「でも、可能性は低いんじゃないの？ 考えを読む限りではその辺の魔法少女は全部魔女化の事実を知っているんでしょ？（世界を滅ぼすと分かっているのに契約するような馬鹿はいないと思う）」

「それがそうでもないみたいなのですよね」

戦力的には申し分ないというのは、ワルプルギスを確実に殺せる戦力という意味ではない。現状考えられる最大戦力という意味だ。

「確実にワルプルギスに勝てるわけではありません。ほむらの記憶を見た限り、人数が増えたら余裕をもって倒せるような相手ではありません。それに、ワルプルギスの夜を無事倒したとしてもその後まどかが契約しないと限りませんし」

「じゃあ、どうするのよ（ぶっちゃけどうしようもないと思うけど）」

「とにかく、準備を整えてもう一度外の世界に向かいましょう。幻想郷に帰ってこれたので、もう少し用意をすることができれば」

私は新しい服を着ると血まみれの服をゴミ箱に捨てる。さて、それじゃあ改めて自分

の部屋に帰ろう。私は自分の部屋の自分の椅子に座ると、深くため息をつく。このため息はいわゆる安堵のため息だ。

「と、ゆったりしている時間はないわ。ワルプルギスの夜がくるのは明日。ということは今晩中に話をつけないといけない」

私は椅子から立ち上がるとエリーを引き連れて自室を出る。その途中で私のペットである火焰猫燐とすれ違った。

「あら、お燐。ちよつと出てくるわね」

お燐は目をまん丸に見開いて手に持っていた洗濯物を取り落としている。妙に静かなのはお燐が何も考えていないからだろう。

「……うわああああああん！ さとりさまああ!! (ざどりさまが帰ってきたあああああー!）」

お燐はほぼ考えるより先に私に飛びついてきた。私は傷口が開かないようにお燐を受け止める。そしてお燐の泣き声を聞いて遠くからペットの霊鳥路空が突っ込んでくるのがわかる。流星にお空の速度で突っ込まれたらまたお腹に穴が開く。

私はお燐を抱えたままエリーの陰に隠れる。エリーには悪いが盾になって貰おう。そして気づく。エリーも読心ができることを。

「うん、流星に避けるわ(傷口開くのと新しく傷ができるのどっちがマシかしらね)」

エリーは突つ込んでくるお空をひらりと避ける。そのままお空はお燐ごと私を吹き飛ばした。

「ぎどりぎまあああああああ! (ぎどりぎまあああああああ!)」

お空とお燐は揉みくちやになりながらも私に抱き着いてくる。心が読める事もあり、私にはお燐とお空の悲しみが痛いほどよく分かった。

「相当慕われているわね。羨ましいわ(時間が無いって言つてたけど、流石にこれは邪魔できないわ)」

私はとにかく泣きじやくるお燐とお空の頭を撫で続けるしかなかった。十分ほど経つて、ようやくお燐が落ち着いた。

「さて、お燐、お空。向かうわよ。割と時間がないから飛びながら話すわ」

私はお燐とお空の手を引きながら地霊殿の窓から飛び立つ。エリーはその後ろからついてきた。

「さとり様この一ヶ月どこに行つてたんですか!? 本当に心配したんですよ!(どうか今もどこにむかつてるんですかね?)」

「ちよつと厄介ごとに巻き込まれていてね。でも、それもあと少しで終わるわ」

「厄介ごとつて……でもご無事そうで何よりです。それで、今は何処に向かっていますか? (方向的には地上ですかね)」

私はお燐とお空の手を放す。

「八雲紫のところよ」

見事な庭に歴史を感じる屋敷。その一室で私は八雲紫と対峙していた。庭ではお空と八雲紫の式神の式神の橙が遊んでいた。お燐は橙の主である八雲藍と隣の部屋で待っている。多分エリーもそこにいるだろう。

「この一ヶ月、行方不明になっていると思つたらそんなことに巻き込まれていたのね。なんとというかまあ、ご愁傷さまで」

紫は苦笑を浮かべながらもそう言った。まあ、同情など欠片もしてないだろうが。

「なんにしても事情は分かりました。私としても世界の危機となれば動かざるを得ません。手を貸しましょう」

まあ、期待通りの反応だ。いや、手伝わざるを得ない。紫だつて世界の滅亡は阻止したいはずである。

「つまりはその鹿目まどかという少女を抹殺すればいいんでしょう？ 暁美ほむらと共に」

……そういうことになってしまった。まあ確かに、まどかとほむらを殺してしまえば

解決する話ではある。というか、紫が言うようにそれが最適解だった。

「人の子の一人や二人殺すのなんて簡単だわ。取り敢えず、彼女たちがワルプルギスの夜を殺すのを待って、その場にいる魔法少女を一掃しましょう」

「それまではどうするのですか？」

「私と貴方で見滝原に向かいます。機を見計らって襲い掛かり皆殺し。それでいいわよね？」

「ええ、現状考えられる一番の解決策だと思えます。」

よし、これである程度の方針が固まった。あとは実行に移すだけである。

「ちっ、逃げられたか」

杏子はいきなり壁の中に消えたさとりを見て、上手いこと逃げられたことを悟る。ソウルジェムが手元がない今、すぐにさとの魔力を探ることは不可能だった。一度姿を晦まされては探しようがない。

「ま、なんにしてもまどかを奪還することができたんだ。良しとしますかね」

杏子は軽く頭を搔くと携帯電話を取り出す。そしてさやかに連絡を入れた。

「さやかか？ さとののやつには完全に逃げられた。これからそっちに向かうよ」

『何やってんのさー。まあ当初の目的は達成できたし。もうマミさんとほむらは来てるから杏子もさっさとおいで』

「はいよー。つと、さて、向かいますかね」

杏子はさやかがいる待機場所まで可能な限り迂回しないようにしながら向かう。ソウルジエムが体を操作できる範囲はそう遠くない。気を付けなければすぐに圏外に出てしまうだろう。杏子は誰も見ていないことを確認してビルを側面から駆け上がる。そのビルの屋上に五人はいた。

「全く、何やってんだよ。さとりは別に運動できるほうでもないでしょ？」

さやかが少しふざけた口調で杏子に言う。

「うっせえ。急に消えやがったんだ。それこそ、どこかに吸い込まれるようにさ。ソウルジエムを持ってなかったから魔力を探ろうにも探れないし」

「それがこの作戦の欠点よねえ。本当に心を読むという能力は厄介だわ」

杏子に共感するように、マミが小さくため息をついた。だが、目的はさとりを殺すことではない。まどかを助け出すことだ。

「ワルプルギスの夜が近い。さとりを追っている時間はないわ。急いで見滝原に戻りましょう。まどか、災難だったわね」

未だに混乱しているまどかの手をほむらが優しく握る。杏子がさとりを追っている

間にほむらはまどかに事情を説明し終えていた。だが、様子を見る限りではまどかは全然理解できていないようだ。

「私はさとりちゃんと旅行に来ていただけだよ？　そもそも、さとりちゃんが何をしていたっていうの？」

まどかは先ほどから同じようなことを繰り返している。ほむらは小さくため息をつくと、もう一度まどかに対して説明を始めた。

「そうね、詳しい話は電車の中でしましょうか。私としても今日の朝聞いてびっくりしていたぐらいだから」

ほむらはまどかの手を引きながら駅のほうへと向かう。後ろにはまどかの荷物を持ったさやかと、マミ、なぎさ、杏子の四人がついてきていた。

マミとなぎさが失踪する夜。

なぎさは、マミに古明地さとりが行ったことの詳細を話していた。何故自分がさとりを裏切つてまでマミにそのような話をしたのか、なぎさには理解できていない。だが、きつとそれは罪悪感からくる懺悔のようなものだったのだろう。魔法少女のこと、ループを繰り返すほむらのこと、さやかを意図的に魔法少女にしたこと、そして魔女の養殖

を行った犯人のこと。

マミは溜まっていた感情を吐き出すように話し続けるなぎさを胸に抱きながら、語られる内容の重さにゾツとしていた。話の内容自体もかなり重たいが、何より自分より何歳も年下の女の子が、このような秘密を抱えて生活していたのだと思うと、それ以上に胸が痛くなった。

「大丈夫。もう大丈夫だからね」

マミは最終的に泣き出してしまったなぎさの頭を撫でながら、今後のことを考える。取り敢えず、古明地さとおりという存在は危険だ。目的の為に躊躇なく子供を利用し、街の人間を犠牲にするなど、人間の所業じゃない。やはり、古明地さとおりは妖怪なのだ。マミは妖怪という存在を楽観視していた自分を無性に殴りたくなったが、今はそのようなことをしている場合ではないだろう。

なんにしても、このままではいけない。何か行動を起こさなくては。マミは少しでも情報を手に入れようと携帯を手にする。わからないことがあつたら携帯で調べるというのは些か安直で現代っ子の発想だが、マミのこの判断は決して間違いではなかった。

「覚妖怪……、これね」

覚妖怪。マイナーな妖怪だが、忘れ去られたほどでもない。言い伝えられている姿形こそ似てないが、マミは直感的に二つが同一のものだと確信した。

「心を読む妖怪。ということ、あの不気味な目は人の心を読むためのものということかしら。……まずいわね」

心を読むということは、こういった敵対的な思考も読まれると言うことである。気がついていないフリをして、近くで警戒することすらできないと言うことだ。

「これは、早々に古明地さとの正体がわかつて良かったわ。読心能力を知らずに近づいていたら、かなりまずいことになっていただしようね」

だが、この事實は同時に今すぐ姿を晦ます必要があることを示唆していた。さとりに対抗する為の準備をするには、さとりに心が読まれないほど離れるしかない。だが同時に、さとの監視もしなければならぬのだ。

「なぎさちゃん大丈夫よ。私と一緒に古明地さとりをやつつきましょう?」

「……何か考えがあるのでですか?」

なぎさは目を真っ赤に腫らしながらママの顔を見上げる。

「取り敢えず、この家を離れないと。逃げたことがバレるとそれはそれで厄介だし……」
ママはキッチンに向かい包丁を手に取る。そして少し躊躇したあと、その場で手首を切り落とした。

「——ッ!? マミ、一体何を……」

「ち、違うのよ? ちゃんと意図があるから大丈夫。痛覚は切つてあるし」

ママはグリーンフィードを一つ取り出すと手首から先を再生させる。傷口を閉じるだけならそこまで多くの魔力を使わない。だが再生させるとなると話は別だ。ママはあつという間に濁ったソウルジェムをグリーンフィードで綺麗にした。

「さて、なぎさちゃんの話ではこれで魔女が生まれるのよね？」

ママはリビングの真ん中にグリーンフィードを放り投げる。それはまさしく先ほどなぎさから聞いたさとり話の模倣だった。次の瞬間、リビングを中心としてハコの魔女の結界が展開される。ママはマスケツト銃を生成すると、ハコの魔女に一発撃ちこんだ。

「さて、これでおしまい」

ハコの魔女は結界の中で無残に吹き飛ぶ。魔女がいなくなったことによつて結界が崩壊した。

「あら、グリーンフィードを落とさなかったわね」

ママは部屋の中を見回すと、首を少し傾げたあと部屋を荒らし始める。

「ママが発狂したのです。さとりお姉ちゃんの言う通りなのです……」

「ち、違うのよ？ ちゃんと意図があるから……」

ママはグリーンフィードをカバンの中に詰め込むと、キャッシュカードだけを財布から抜く。

「さて、これで私たちは魔女に殺されたように見えるかしら。さて、行きましようか」
「行くつて何処へです？」

「そうねえ、取り敢えず警察に見つからないようにしながら隣町にでも潜伏しましようか」

「マミは何かを考え込みながら靴箱の中に入ってるしばらく履いていない靴を履く。なぎさにも自分のお古の靴を履かせた。勿論、サイズは合っていない。」

「あの、ぶかぶかなのですが。自分の靴じゃ駄目なのですか？」

「駄目よ。……そうね。歩きながら話すわ」

「マミはなぎさの手を引いて人通りの少ない道を歩く。」

「古明地さとの正体……いや正体つて程大した話でもなかったんだけどね。覚妖怪、それが古明地さとの正体よ」

「まんまじゃないですか。で、さとりお姉ちゃんが覚妖怪なのと部屋を滅茶苦茶にしたことは関係があるのです？」

「ええ。覚妖怪の能力は読心。古明地さとりは人の心を読むことができる」

「それを聞いてなぎさは少し首を捻ったが、直ぐに何が問題なのかを理解した。」

「なるほど。さとりお姉ちゃんに敵意を持った時点で、それが相手に筒抜けになるということですね。だから、身を隠すしかない」と

「そう。それも、ただ身を隠すだけじゃ駄目よ。逃げられたと悟られるのもあまり良くないわ。だから、死んだふりをする」

荒らされた部屋に多量の血痕。誰がどう見ても殺人現場だ。

「でも、姿を隠してどうするのですか？ 何か作戦が？」

なぎさが聞くと、マミは少し考えたあと苦笑した。

「まだ何も考えてないわ。何も考えていないからこそ、今日こうやって逃げているわけだけど。なぎさちゃんやんが魔女養殖の犯人のことを私に話したことはさとりに会った瞬間バレてしまう。無策だからこそ、今は逃げに徹するしかないわけ」

マミは路地裏に入ると魔法少女に変身する。それを見て、なぎさも魔法少女に変身した。ここからは、屋根を伝って行くらしい。

「全く、ワルプルギスの夜も近いっていうのに。本当にとんだイレギュラーね。なんにしても、隣町に私の知り合いの魔法少女がいるわ。あまり仲が良いわけじゃないけど、彼女に協力を仰ぎましょう」

「佐倉杏子ですか？」

なぎさは間髪入れずにそう言った。マミはその答えに少し目を丸くしたが、直ぐに納得する。

「ああ、そういうえば全部聞いているんだったわね。そうよ、佐倉杏子。私の昔の弟子……」

「ただ、今はそう思ってくれていないでしょうね」

「険悪な関係なのですか？」

「いや、そんなことないわ。会ったら話さないわけでもないし……。昔ほど仲が良いわけじゃないってだけで」

だが、この時ママは知らなかった。佐倉杏子が魔女養殖の騒ぎを聞きつけて見滝原に来ていた事を。

風見野の町で買い物を買ませ、簡単な変装を済ませる。時間が時間なのでおしやれな服屋が開いてないのが痛い、贅沢は言えないだろう。

「こんな冗談みたいな変装でいいのですか？」

ママは髪をおろし上下ジャージにニット帽を被り、マスクをしている。なぎさは髪を後ろで括って眼鏡を掛け、やはりマスクをしていた。

「今見滝原周辺ではかなりの数の死者や行方不明者が出てる。警察も一人ひとりを丁寧に探している時間はないわ。だから、ぱっと見で分からなければそれでいいのよ」

ママはリボンを免許証に変化させる。今の適当な格好なら、頑張れば成人に見えるだろう。ママはそのまま駅前ホテルへなぎさを連れて入った。

「ようこそお越しくございました。ご予約のお客様ですか？」

「いえ、予約は取っていません。宿泊できますか？」

フロントにいる女性は端末を操作し空き部屋を確認した。どうやらまだ空きがあるようである。

「何泊のご予定でしょうか」

「今日一晩泊まるだけです」

「ご案内いたします」

マミとなぎさの二人は女性に連れられるままにホテルの中を進む。そして案内された部屋のベッドに腰をおろした。

「皮肉なことに、グリーンシートはあるからさとりの方に集中できるわね」

マミは部屋に備え付けられていたパソコンの電源を入れる。携帯は家に置いてきた。また新しく契約しないといけないだろう。

「マミとしては、さとりお姉ちゃんをどうしたいのですか？」

「どうというのは？」

マミはキーボードを叩きながらなぎさに問い返した。ディスプレイには、風見野の地図が表示されている。

「さとりお姉ちゃんを殺すのですか？」

「……」

「ママはなぎさの問いに暫く答えなかった。数分考え込んだ後、ぽつりと返事を返す。場合によってはね」

「さとりが行ったことは決して許されることではない。だが、だからといって殺すのは違うような気がする。」

「なぎさちゃんから見て、さとりはどう？ 悪い妖怪に見えた？」

「いえ、そうは見えなかったのです。ですが——」

なぎさはそこで一度言葉を切った。

「私は本来は魔なるもの。人が堕ちていくところを糧にするという点では、貴方と同類かもしれない。さとりお姉ちゃんはキュウベえにこう言っていたのです」

「さとりにとっては何気ない一言だったのかも知れないが、ママにとっては自白も同然だった。」

「……そう。やつぱり、人間ではないのね。なんにしても、明日中に準備を整えて、明後日には見滝原に戻りましょうか。さとりは心が読まれない距離から様子を見ましょう」

「ああ、さつきから何を調べてるのかと思ってましたが、風見野にある店を調べてたのですね」

ええ、とママは頷いてパソコンの前から離れる。ママはそのままベッドに腰掛けると

ボスンと横になった。

「なんにしても、今日は疲れたわ。もう寝ましようか」

「だめですよ、マミ。ちゃんとお風呂に入らないと」

なぎさはそのまま寝ようとするマミの頭を数度叩いた。

「うー、でもそうねえ。シャワーだけでも浴びようかしら」

マミはむくりと起き上がると、ふらふらとした足取りで洗面所へと歩いていく。その様子になぎさは小さくため息をつきつつ、その後を追った。

第九話 「別に貴方の許しなんて欲していません」

ほむらが杏子に協力を仰いでいる頃、マミとなぎさは風見野で買い物をしていた。マミは買い物物ついでに杏子の姿も探していたが、すれ違いになっていく為徒労に終わるだろう。

「新しい服に靴、携帯電話……よくこんなにお金がありましたね」

なぎさは髪を大きくツイントールで結び、眼鏡を掛けている。手には新しい携帯電話が握られていた。

「お金に関しては問題ないわ。……まあ、無駄遣いは出来ないけどね」

マミの通帳には大学を出るのに十分な程のお金が入っている。交通事故で両親が死んだ時に入ったものだ。二人ともそこそこの額の生命保険に入っていた為、無駄遣いしなければ一生働かなくても食べていける程度には口座に入っていた。

マミは記憶を頼りに杏子の居そうな場所を探していくが、一向に見つかる気配がない。それどころか魔力の痕跡すら見つけられなかった。

「おかしいわね。……ここにもいないなんて……」

マミはゲームセンターの中をぐるりと見回し、小さくため息をついた。

「もしかして、見滝原に移動したのかしら」

「なるほど。キュウベえあたりから魔女養殖の話聞いてということなのです。確かに杏子の性格上有り得そうなのです」

なぎさは知ったように杏子のことを語る。マミはその言い方に若干の違和感を覚えしたが、そのまま話を続けた。

「だとしたら、すでに暁美さん達と接触してる可能性もあるか……だとしたら安易に近づくのは危険かしら。なんにしても明日一度見滝原に戻りましょう。さとりが学校に通っている時間帯がいいかしら」

場所さえ分かっているならば、読心を避けることはできるだろう。あとはどこまで範囲が広いという問題があるが、マミは今までのさとりの様子から既にある程度の読心範囲を掴んでいた。

「さとりの読心の最大半径は四十メートル。見た限りでは五十メートルには届かないように思うわ」

マミが最初にさとりに会った時、背後を取ったにも関わらずさとりはマミに狙われていることに気が付いていた。あの時は魔力や殺気に気づかれたものだとばかり思っていたが、もし読心によるものだったのだとしたら。

「私が最初にさとりに銃を向けた時、さとりはその場から逃げなかった。私の心が読め

たのだとしたら、私が本気でさとりを殺そうとしていたこともわかっていた筈なのにね。もし逃げなかったのではなく、逃げられなかったのだとしたら」

「どういうことですか？」

「あの時私はマスケット銃を構えながら少しずつ距離を詰めていた。さとりの読心の範囲に入る時には既に射撃の準備は整っていたの。もし私が銃を構える前に読心の範囲に入っていたとしたら、きっと逃げられていたでしょうね」

マミはゲームセンターを出て道路をまっすぐ指差す。

「範囲としては、あの理容店のサインポールぐらいよ」

「サインポールってなんですか？」

「あのぐるぐる回ってるやつ」

なぎさはあのぐるぐるにちやんとした名前があったことに少し感動しつつ、距離を確認する。四十メートルと聞いたときは遠い印象を受けたが、実際に目にするると案外近いように感じた。

「凄いのです。ぱつと見で距離がわかるのですか？」

「距離感が正確じゃないと当たるものも当たらないもの。遠くなればなるほど誤差が出てくるけどね」

マミとなぎさはそのままゲームセンターをあとにする。

「今日はどうも何処かのホテルに入りましようか。明日の準備もしないといけないし」

「ハイなのです。チーズが食べられるホテルがいいのです！」

「うくん、ルームサービスにあるかしら……」

二人は目星をつけていたホテルに向けて歩き始めた。

「いたわ。こつちには気が付いていないようね」

次の日の朝、マミとなぎさは見滝原中学が見えるビルの屋上に来ていた。学校との距離はおおよそ五百メートル。流石の魔法少女でも双眼鏡がないと厳しい距離だった。

「さとりお姉ちゃん。ちゃんと学校に通っていたんですね」

「そこも謎の一つよね。さとり自身朝起きたらいつの間にかこの世界に来ていたと言っていたけど、本当かどうかわからない。……いや、私は嘘だと思っっているわ」

なぎさはキョトンとした目でマミを見た。

「嘘、というのは？」

「どうしてこつちの世界に来てしまったのかわからない。いつの間にか見滝原中学に通うことになっていた。この部分ね。本当にそんなことがあり得るのかしら」

なぎさは双眼鏡でさとりの様子を観察しながら考える。確かに、もつと自然な考え方

もある。

「さとりお姉ちゃんが何かしらの能力を使って、まどかの記憶を書き換えたということですか？」

ママは真剣な顔つきで頷いた。

「さとりが私に話したこちらの世界に来た日付と、鹿目さんが話したさとりが海外から引越してきた日付は数日食い違っている。その鹿目さんが記憶している数日が、さとりによって作り出された記憶だったとしたら」

「さとりお姉ちゃんは何か目的があつてこの世界にやつてきた。ということなのです
ね」

「もしくは、幻想郷から来たという話自体も嘘かも知れないわ。なんにしても、無防備にさとりに近づかないほうがいいわね。もし記憶を改ざんする能力を持つていたとしたら、さとりに近づいた瞬間、理由諸共敵対していた記憶そのものを改ざんされる可能性があるわ」

「そうでなくとも、ほむらやさやかかの記憶を改ざんして身を守る可能性もある。もつとも、あくまで予想の範疇だが。」

「とにかく、今は読心の範囲に入らないようにしながらさとりを観察しましょう。何か能力の弱点や特性がわかるかも知れない」

ママは双眼鏡を置くと、大きく伸びをする。これはかなり長丁場になりそうだった。

その日の夜、さとりがまどかと共に家に帰つたのを見届けて、ママとなぎさはさとりの監視を解いていた。今日の様子を見る限りでは特に変わった様子は無いように感じる。本来ならば夜も見張るべきなのだろうが、流石にこの人数では難しい。

「初めてこんなことしたけど、張り込みって大変……。これ続かしら」
疲れた様子のママに対して、なぎさはケロリとした表情をしている。

「でも、驚くほど普通でしたね。学校に行つて授業を受けて、家に帰る。特殊なことは何もしてないのです」

なぎさは携帯のメモ機能を見ながら今日のさとりの行動を振り返つた。

「強いて言えば暁美さんが遅刻してきたことぐらいかしらねえ。でも彼女の事情を考えると別に不審というわけでもないし……。それに私もたまに魔女退治で学校に遅刻したりするしね」

そう、不審なことは何もないのだ。逆に言えば、気持ち悪いぐらい普通の女子中学生をしていると言える。

「今思えばそれもおかしい話だったのよね。さとりは数週間前までまったく違う生活環

境にいたはずなのに、今現在何不自由することなく生活している」

「ただ生活に慣れただけなのでは？」

「もし、そもそも生活環境があまり変わってないとしたら？」

なぎさは立ち止まってマミの顔を見た。

「昼の話……ですか？」

「あの時は思いつきだったけど、そう考えたほうが自然じゃない？ 私の考えはこうよ。

古明地さとりはもともと現代の日本で暮らしている妖怪だった。さとりの目的は必ずばり鹿目さんの魔法少女としての素質を利用したものよ。さとりは自分の願いを叶えるために鹿目さんに近づいた」

マミは一度周囲を見回して人がいないことを確認する。

「さとりは鹿目さんを魔法少女にしようとしている。実際にさとりは美樹さんを魔法少女にしているわ。あれは多分実験ね。なぎさちゃんに話した理由は本来の目的を隠すための作り話だと思うわ」

本来ならばさとりの近くで真意を探りたいところだが、近づけない今の状態ではそれもできない。マミ自身も過剰に警戒しすぎているとは感じているが、今できる最大限の警戒をするに越したことはない。

「……………ツ?!?!
あ……………え？ マミ、さん？ それになぎさちゃんも」

だが、さとりを警戒しすぎたばつかりに、他が疎かになっていた。いきなり声を掛けられてマミとなぎさは振り返る。そこには目を見開いて驚いているさやかやかの姿があった。なぎさは頭を抱えるようにしながらマミに聞く。

「マミ、見つかつてしまいましたかどうするんです？ 警戒していたのではなかったのですか？」

「警戒していたのはさとりの魔力だけで、ほかはそうでもなかったから」

マミは小さくため息をつくとき、さやかの肩をがちりと掴む。そしてにつこりと微笑んだ。

「美樹さん？」

「は、はい！」

なぜマミとなぎさが生きているのかという疑問が浮かぶ前に、さやかはマミの雰囲気飲まれてしまう。

「ごめんなさいね。美樹さんは今ここで死んだわ」

「は、はい？」

さやかは状況が飲み込めず、首を傾げるしかなかった。

見滝原の外れにあるホテルの一角にマミとさやかとなぎさはいた。夜も随分遅く
なっているため、なぎさは既にベッドで寝ている。

「それにしても生きててよかったです。てつきり死んでしまったものとはかり……」

さやかは備え付けられているソファアームに座る。マミはその対面に腰掛けた。

「ええ、死んだように見せかけることが目的だったから。上手く誤魔化せたようになに
よりよ」

マミは自分の仕掛けた偽装が上手くいっていることがわかり、安堵のため息をつく。
その様子にさらにさやかは困惑した。

「だとしたらなんで……今酷いことになってるんですよ？ 佐倉杏子とかいう魔法少女
が見滝原に入ってきたと思ったら案外いやつだったり、魔法少女の正体が……あ、で
もこれは……」

さやかは今日の夜にあったことを包み隠さずマミに話した。

「ほんと、びっくりですよ。キュウベえがあんなやつだったなんて」

さやかは頭を抱えるようにしてため息をつく。そして自分のソウルジェムを取り出
した。

「まさか私の魂がソウルジェムになっっているなんて。まああの時は恭介の命も危なかつ
たし、迷いはなかったけど……でもそういうことはもつと早く、契約の前に教えて欲し

かったといえますか……」

「ごめんなさいね。私も最近知ったばかりなのよ。……ところで美樹さん。その時、さとの様子はどうだった？」

「さやかはいきなり予想外な人物の名前が出て少し混乱する。今の話とはまったく関係ないと思ったからだ。」

「え？ さとりですか？ ……別に、いつも通りだったと思いますけど」

「さやかは意識が戻ってからのことを思い出す。」

「あ、でも少しほむらを責めているような口調だったかな？ ほむらはこのこと知っていたみたいだし」

「でしようね」

「マミはさやかの話を頭の中で整理する。そして改めてさやかのほうを見た。」

「まあ、仕方がないか。美樹さん。今から少しシヨッキンクな話をするわ。心して聞いてくれる？」

「シヨッキンクってソウルジェムの話よりもですか？」

「さやかはふざけた様子でマミに聞くが、マミの真剣な表情を見て小さく唾を飲み込んだ。」

「ええ。何処から話したのかしら……。長くなると思うわ」

ママはソファから立ち上がると備え付けられているティーバッグで紅茶を淹れる。いつも飲んでいるものに比べれば紛い物に等しい品質のものだったが、今はどういった形でもカフェインが欲しかった。ママはティーカップを3つ用意すると、その一つをさやかに渡す。

「美樹さん。エントロピーという言葉聞いたことがあるかしら」

「えんとろぴー？ 何か科学の用語ですか？ それとも新しい必殺技？」

「まあ、私も調べるまで知らなかったわけだし。エントロピーというのは簡単に言えば、どれだけカオスであるかということよ」

「カオス……」

さやかは神妙な顔で繰り返すが、まったく理解している様子ではなかった。ママは軽く微笑むと、簡単に言い直す。

「たとえば、ここに紅茶があるわ。この紅茶にミルクを垂らすわよ」

ママは小さなカップのミルクを紅茶に少し入れる。ミルクは紅茶の中で複雑な模様を描いた後、次第に混ざり合っていた。

「このように、ミルクは次第に広がっていく。これをエントロピー増大則というのよ。この混ざり具合のことをエントロピーというのね。この紅茶でわかるように、エントロピーというのは増大する一方で減少することがない。こちらから手を加えない限りね。」

でも、手を加えることでエントロピーを減少させる以上の労力を使う」

「えっと、なんの話です？」

まあ、一見この話は魔法少女には関係ない。

「このエントロピーの増大はもつと大きなスケールで見ても言える話らしいのよ。すべての物質は最終的に平衡状態になる。科学者はこの状態を宇宙の熱的死と呼んでいるわ」

「よくわかりませんが、エントロピーのせいで世界が滅ぶってことですか？ 何年後ぐらいですかね？」

「そうねえ大体百京年後ぐらいからって話だけど。正確な年数はわかってないわ。」

「百京年……」

予想以上に大きな数字が出てきて、さやかは思考はフリーズした。そもそも百京年などイメージできる大きさではない。

「ちなみに今の宇宙の年齢が百三十八億だといわれているわ」

「まだまだじゃないですか！ そんな先の話を問題にしても……そもそも人類いるんですか？」

さやかはほっと安堵した。世界が滅亡するという話には少々ドキツとさせられたが、まだまだ先の話だ。

「それを問題にしている存在がいる。それこそ、人類がまだ猿に毛が一本生えたぐらいの時代からね」

「え、それって宇宙人ってことですよね」

宇宙人と言われて、マミは少し混乱する。だが、言われてみればそうだった。

「宇宙人、そうよね。宇宙人なのよね。その宇宙人は宇宙の熱的死を回避しようと研究を進めた。宇宙のエントロピーの増大をなんとか食い止めようとしたのよ」

「へえ、いいやつらですね。宇宙人」

「それが、そうとも言えないのよ」

方法が方法なら、さやかかの言ういいやつらに該当したかも知れないが、人類にとってはどうとは言えない。

「その宇宙人は熱的死を回避するためにエントロピーを凌駕するエネルギーを探した。それで目をつけたのが感情をエネルギーとする技術。だけど、その宇宙人には感情がなかった」

「へえ、感情をエネルギーにするってなんだかロマンチックですね」

マミはさやかかの反応に苦笑した。まあこの話だけ聞いたらそう感じるのも無理はないだろう。

「その宇宙人は人類に目をつけた。宇宙人は人類に知恵と技術を与え、進化を促した。

それと同時に、人類から感情エネルギーを収集するシステムを作り上げた」

「人類からエネルギーを収集する……感情豊かな人類からエネルギーを集めるって言うのはなんだかわかる話ではありませんが……」

「宇宙人が目をつけたのは、第二次性徴期の少女が幸福から絶望へと転じたときの爆発的な感情エネルギー」

「第二次性徴期？」

「小学生から中学生ぐらいの歳のことよ。宇宙人は少女の願いを叶えて幸福にした後、厳しい環境に陥れて絶望させる。絶望した少女は姿を変え、今度は少女を絶望させるシステムの一部となる」

「それって私たちに似て……」

さやかはそこまで口に出して、それが自分のことだと悟った。

「じゃあ、宇宙人っていうのはキュウベえのこと……絶望したらシステムの一部分になるって言うのは……」

「ソウルジェムが濁り切った時、魔法少女は魔女へと変化する」

「……」

さやかは言葉が出なかった。ソウルジェムの話はまだ多少は納得のできる話でもあった。冷静に考えれば生身のまま魔女と戦いたくはない。だが、そもその元凶が

キュウベえとなると話は別だ。

「全てはキュウベえが仕組んだこと。いえ、インキュベーターといふべきかしら」

「インキュベーター……じゃあ、私たちの戦いつて、なんだったんですか？ そんないつくるかわからない宇宙の終焉を回避するために同じ魔法少女相手に戦っていたつてことですよね？」

「そういうことになるわね」

さやかは気がつかないうちに両手を握り締めていた。

「それって、そんなことつて……」

「みんなインキュベーターに騙されていた。戦いの先にあるのは平和でもなんでもない。ただ自分の延命と同族殺しの結果だけ」

さやかはもう何も言うことはできなかった。ただただキュウベえに騙された悔しさと、人類のことなど何も考えてないキュウベえの非道さにただただ拳を振るわせることしかできない。だが、それもママの一言で終わった。

「さて、前置きはこのぐらいにして。本題に入りましょうか」

「へ？」

さやかはほかんと口を開けて間抜けな表情をしてしまう。今の信じられないような話が前置きだとしたら、本題はいつたい何なのかと。

「ま、前置き？　今のが？　てっきり私は『私と一緒にインキュベーターと戦いましょう』みたいな話になるのかと思ってたんですが」

「それは無理な話よ。魔法少女になつてしまった今、私たちとインキュベーターは切つても切れない関係になつてしまった。私たちが生きていくには、インキュベーターの作つたシステムに従つて生きるしかない。それに関しては半分諦めるしかないわ。人類より文明が発達している存在に真つ向から戦いを挑んでも勝てるはずがない。解決には長い対話が必要になると私は考えているのよ。だから、とりあえず目先の問題を解決するところから」

　　ママは紅茶を一口飲むと、話を切り出した。

「古明地さと。私となぎさちゃんは今古明地さとの陰謀を阻止するために動いてい
る」

「え？　さとの陰謀？　なんで？」

　　さやかは予想していなかった名前が出て首を傾げる。

「美樹さん。これは貴方にも関係してくる話よ。貴方が魔法少女になつた原因を作つたのは、さとりなんだから」

「そんなことありません！　私が魔法少女になつたのは病室に現れた魔女を退治するためですし……」

「上条くんの病室にグリーンフィードを仕掛けたのはさとりよ。彼女は美樹さんが魔法少女になるように誘導した」

さやかは背筋に汗が浮かび、ゆっくり背中を伝っていく。さやかは何かを否定するよう首を振った。

「そんな、一体なんの証拠があつて……」

「なぎさちゃんがその時一緒にいたらしいのよ。半分さとりに騙されていたみたいだけど。病気に伏している母親を助けるためになぎさちゃんはさとりに縋った。美樹さんの一件はその時のことね」

マミはさとりとなぎさとの関係を簡単に説明する。マミの話最後まで聞いて、さやかは軽いため息をついた。

「結果的になぎさちゃんのお母さんは助かったけど、腑に落ちない……でも、さとりはなんでそんなことを……」

「私は実験だと考えているわ」

「実験？」

「さとりは鹿目さんを魔法少女にしようとしている。それはおそらく自分の目的のためよ」

マミは自分の推測をさやかに話した。覚妖怪の話から幻想郷にいたことが嘘かも知

れないという話まで。もつとも、これはあくまでママの推測だ。だが、さやかには予想以上にしつくりきってしまった。

「妖怪……そう、ですよね。さとりは妖怪なんだ。それに心を読むって……」

気持ち悪い。怖い。今までの自分の感情が全部駄々漏れになっていたと思うと、今すぐにソウルジェムを叩き割りたい気分になった。

「じゃあママさんたちはそれで姿を隠していたんですね。さとりの読心を回避するために」

「ええ。魔法少女というシステムを何とかするより、そっちのほうが重要だからね。」

まどかが契約すること自体も阻止しないといけないことだが、その莫大なエネルギーを有している願いをさとりとの陰謀のために使われるのはもつと避けなければいけない。

「なにより、他人の都合にまどかを巻き込むわけにはいかない。なんとかしなきゃ」

だが、具体的にどうすればいいのか。考えれば考えるほどさとりの持つ読心の能力が厄介だと感じる。そもそも近づけないというのが問題を大きくしている。一方的に心を読まれては、対話や交渉の余地がない。

「そう、なんとかしなきゃなんだけどね……今のところ成果無しよ」

ママは大きいため息をつき、肩を落とす。なんにしても、今さとりから目を離すべきではないだろう。

さやかが仲間に加わってから既に一週間が経とうとしている。その間ずっとさとりの監視を続けているが、そろそろ限界が近かった。体力的な問題ではない。精神的な問題だった。

「うーん、恭介やほむらにこれ以上迷惑掛ける前に解決しなきゃ……」

「……一週間。ほむらを筆頭にまどかや杏子、恭介までも協力してさやかと魔女養殖の犯人を捜していた。もつとも、魔女を養殖した犯人はさとりなので見つかるはずもない。実質的にはさやかを探しているだけだ。」

「流石に申し訳なくなってきたというか、これ以上恭介のレッスンの邪魔をするのも……」

さやかはビルの屋上から双眼鏡を構えつつ、ブツブツとつぶやく。さとりは今マミとなぎさが追跡中だ。さやかは一人ほむらと杏子の様子を伺っている。二人はなにやら公園のベンチで会話をしているようだが、流石に会話の内容まではわからない。

『そうは言っても、まだ何の対策も立ってないのです。マミが提案した滅茶苦茶な作戦もあります。綱渡りしながらお手玉するようなものですし』

なぎさは電話越しにさやかの泣き言を聞いて深くため息をつく。マミはそれを聞いて

て頬を膨らませた。

『なんでよ。私はいいいアイディアだと思ったんだけど。ソウルジエムが私たちの魂なら、それさえなければ心を読まれることもないはずよ』

『本当に心を読まれないっていう確証がないのです。それに、いくら体を遠隔操作できるといっても、百メートルが限度です。危険な綱渡りになるのは目に見えているのです』

マミの考えはこうだ。さどりの読心の範囲は長くて五十メートルほどだと推測している。そしてソウルジエムが体を操作できるのは百メートル前後まで。ソウルジエムだけさどりの読心範囲から出せば、心を読まれることはないのではないか。

『体の遠隔操作はそこまで難しい話ではないわ。というよりは、意識せずとも普通に行けると言った方がいいわね』

「それは確かに試したのでわかりますけど……さどりが逃げた場合追うのは至難の技ですよ?」

そう、近づき過ぎず、遠ざかり過ぎずを維持しながら追わなければいけない。万が一ソウルジエムの範囲外に体が出てしまったら、完全に無防備を晒してしまう。肉体を失ってしまったら、例え死ななくても死んだも同然だ。

『それに三人じゃ人数が少なすぎるのです。一人でソウルジエムを管理したとしても、

動けるのは二人だけ。それに、ほむらと杏子の説得も同時に行わないといけないのです。今の二人にとつて、さとりは仲間の一人なのです。それを捕らえたとなると、いくらمامイヤさやかでもいざござは避けられないと思うのですよ」

単純に説得するだけなら話は簡単だが、さとりがその場にいるだけで確証が持てなくなる。ほむらや杏子のこころが読めるさとりなら、その場でほむらや杏子を味方につけてしまうかもしれない。もしそうなったら単純な戦力でも敵わないだろう。

『さとりはともかく、曉美さんと佐倉さんは敵に回したくないわ』

「そう。だから流石にمامィさんの作戦はリスクが大きいというか。でも早いうちになんとかしないと……」

うがあああ！ とさやかは頭を抱える。そして、何かを思いついたかのように顔を上げた。

「人が足りなくて敵が多いんだったら増やせばいいし減らせばいいじゃん」

その言葉にمامィは首を傾げた。

「ちよつと杏子を勧誘してきますね」

さやかはなんでもないことのように告げると、無造作に立ち上がる。

『ちよ、美樹さん!? 勝手なk——』

さやかは通話を切り、ほむらと杏子が別れたのを確認する。杏子が完全に一人になっ

たのを確認した後、さやかは杏子の目の前に飛び降りた。

第十話 「あ、はい。ご勝手に」

「うお!? びっくりした……ってさやかか!？」

人が目の前に降ってきた衝撃で一瞬降ってきたのがさやかだと判断するのが遅れる。杏子は一步後退した後、さやかに駆け寄った。

「お前何処行つてたんだよ! 散々探したんだぜ? まどかのやつも心配してるしさ。アンタのボーイフレンドだつて——」

「わかってる。わかってるよ、杏子」

「だったら何で……そこまでの事情つてやつ?」

杏子の問いにさやかは頷いた。杏子は面倒くさそうに頭を掻くと、やがて安心したように微笑んだ。

「つたくしよすがねーな。私が相談に乗つてやるよ」

「さつすが杏子! 話が早い」

さやかは杏子の手に握ると拠点にしているホテルのある方向へと走り出す。杏子はいきなりさやかか走りだした為一瞬こけそうになったが、何とかさやかに付いて走りだした。

「つて、どこ行くんだよ。ほむらと合流しないのか？」

「合流するのはママさんたちだよ」

「はあ!? マミだあ? いやだよ。てかママも生きてるのか?」

「ママさんだけじゃなくてなぎさちゃんも生きてるよ」

杏子は額を押さえながら大きくため息をつく。

「まあそのなぎさつてのは知らないんだけどな。見滝原に魔法少女増えすぎだろ。そんなにでグリーンフシードの供給が追いつくのか?」

「……多分追いつかないと思う。アレ? だとしたらさとりは……だとしてもさとりは……」

さとりは私たちのために魔女を養殖したのではないか。一瞬そんな考えがさやかかの脳裏に浮かんだが、たとえどんな理由があろうと人間を餌に魔女の養殖などしていいはずがない。

「まあとりあえず詳しい話はママさんがしてくれと思う」

「はいはい」

さやかは杏子を連れてホテルの中に入る。借りている部屋にはママの姿はなかった。

「つて、ママのやついねえじゃねえか」

「ママさんとなぎさちゃんは今さとりを見張つてると思う」

「さとり？ さとりなんか監視してどうするんだよ。ていうかワルプルギスの夜も近いんだよ？ さつさと戦力整えた方がいいんじゃない？」

杏子はソファアームにぐったりと座り込む。さやかはその様子に少々の違和感を覚えたが、すぐに納得した。

「あ、杏子ってホテル慣れてるんだっけ？」

「何の話？ まあ確かに慣れてるよ。よく泊まってるし」

さやかのイメージでは杏子は橋の下のホームレスだ。だが、別に杏子はお金を持っていないわけじゃない。いや、逆にそのへんの社会人よりもお金を持っているだろう。

「そんなお金どこから出てくるの？ やっぱ強盗？」

「ん？ ああ、ATMとか貯金箱だと思ってる。泥棒だと批難するかい？」

杏子は試すようにさやかの目を見る。さやかは静かに首を振った。

「ATMはやめたほうがいいんじゃない？ ヤクザの事務所からお金を盗むとかじゃダメなの？」

「嫌だよ。なんでそんな危険な金を狙わないといけないんだよ。下手するとこつちが売られちゃう」

杏子はそういつてケラケラ笑った。そのような無駄話をしているうちに、部屋のドアが開いた。

「美樹さん？　あまり勝手な行動はしないで欲しいのだけど……久しぶりね、佐倉さん」
入ってきたのはマミとなぎさだった。

「うわ、ほんとに生きてるじゃねえか。なにやってたんだよ？」

杏子はソファから立ち上がるとマミの前まで歩み寄る。そして真正面からマミを睨みつけた。マミも真剣な表情で杏子の目を見る。そして二人同時に微笑み、握手を交わした。

「ごめんなさいね。無駄に探させちゃって。ちよつと世界を救うために暗躍してたのよ」

「なんだ？　まだそういうの引きずってんのか？」

「ちよつとかっこつけてもいいじゃない」

マミは頬を膨らませながら紅茶の準備を始める。杏子は先ほど座っていたソファに座りなおした。

「で、なんでさとりなんか監視してるわけ？　確かに怪しい存在だし、考え方も人間とは違うみたいだけど……もつとやることあるだろ？　ほら、ワルプルギスの夜とか近いしさ」

「ワルプルギスの夜は大丈夫よ。戦力は充実しているし、グリーンシードのストックも十分」

「まあ、確かにあんなことがあった後だからグリーンフィードのストックは十分だわな。でも、その犯人の問題もあるんだよ？」

ママは杏子の前にティーカップを置く。そして杏子の対面に腰掛けた。

「だから、その犯人の問題を解決するのよ」

「……はあ？」

杏子はわかりやすく首をかしげる。そして少し考えた後、はつと顔を上げた。

「じゃあ、魔女の養殖はさとりが？」

「ええ。その通りよ」

杏子はガシガシと後頭部を掻く。そしてママの入れた紅茶を一口飲んだ。

「なんというか。今日は驚かされてばかりだよ。ほむらはほむらで信じられない話をするし。死んだと思ってたママは生きてるし。んで？ さとりが黒幕？ ……って、それやばいんじゃないの？ まどかは今さとりと一緒に暮らしてるんだよ？」

「それを何とかするために別行動をしていたのよ。そうね、どこから話したものかしら」
ママは今までのことを少しずつ杏子に話し始めた。

「おかしい。杏子がいないわ」

杏子に魔法少女の真実を話した次の日。私は杏子を探していたが、見滝原中を探しても見つからない。このところ一週間、杏子は私の家で暮らしていたのだが、昨日の夜は帰ってこなかった。杏子のことだ。外で何かやっているものだと思っていたのだが、昼になっても帰ってこないのはおかしい。

「……これはまさか。とりあえずまどかの安否を確認しましょう」

携帯電話を取り出してまどかに電話をする。数コールも数えないうちにまどかは電話に出た。

『おはよお……ほむらちゃん』

その声は物凄く眠そうで、きつときつきまで家で寝ていたんだろう。起こしてしまつて少し申し訳ないが、今はそれどころではない。

「まどか、杏子を見なかった？」

『杏子ちゃん？ 昨日別れてそれっきりだけど』

「何時ごろ？」

『ほむらちゃんも一緒にいたでしょ？』

ということ杏子を最後に見たのは私か。だとしたら少しまずいことになったかもしれない。私は電話を耳に当てながら出かける準備を始めた。

「まどか。今から家にお邪魔してもいいかしら。少し話したいことがあるのよ」

『うえ!! うん。大丈夫だよ。ああ! でもちよつと待つて! 三十分だけ時間頂戴? さとりちゃん! 部屋の片付け——』

そこまで話して、通話が切れる。どうやら、少し時間を置いてから向かったほうがよいようだ。私は携帯を机の上に置くと、本格的に外出する準備を始めた。

部屋の中では、まどかがバタバタと片付けを行っている。私はそれをベッドに腰掛けて眺めていた。どうやらあと数分もしないうちにほむらがここを訪ねてくるらしい。

「さとりちゃんも手伝つて〜（でも散らかしたのほとんど私だし……）」

まどかは机の上の小物を整理しながら半分涙目でこつちをみていた。だが、私が見る限りそこまで散らかっているようには見えない。インキュベーター風に言うなら、部屋の中のエントロピーは大きくない。

「もう十分片付いていると思いますか?」

「そうかなあ……（さとりちゃんが言うなら大丈夫かな?）」

自信がないのは結構だが、それに私を巻き込まないで欲しい。別に部屋が散らかっているぐらいでなんだというのだ。私の書斎なんて……いや、割と整頓していたか。

「まどかー、ほむらちゃんが来てるぞ（お茶の準備……いや、邪魔しちや悪いか）」

下から詢子の声が聞こえてくる。それを聞いてまどかはわかりやすく飛び上がった。

「今行くー! (ほむらちゃんが私の部屋に来るのつて一週間ぶりぐらいかな?)」

まどかはバタバタと部屋を飛び出していく。これが相手がさやかなら、少しは違った反応になるのだろうか。そういえば一週間前に行ったお泊り会のときも非常に緊張していたことを思いだす。

「お邪魔するわね (さとりはいる。それにしてもまどかの部屋は落ち着くわね)」

ほむらはまどかに連れられて部屋の中に入ってきた。ほむらは私のほうをちらりと見た後、部屋に異状がないかぐりと見回す。そして安堵のため息をつく。部屋に置いてある椅子に腰掛けた。ほむらの思考を簡単に読んだが、どうやら今度は杏子がいなくなったようだ。

「単刀直入に言うわ。杏子がいなくなった (といってもまだ確定したわけじゃないけど)」

それを聞いて、まどかはわかりやすく狼狽する。だが、流石にほむらの早とちりではないだろうか。

「昨日の昼までは一緒に行動していましたよね。だったらまだ失踪したと決め付けるのは早いのではないでしょうか」

「ええ、確かに。でも今までのことからして樂觀視するべきではないわ。常に最悪を考

える必要がある（最悪、Aに殺されている可能性もある）」

そしてどうやら、ほむらは昨日杏子に魔女化の真実を教えたらしい。私は一瞬そのせいで失踪したのかと思ったが、その可能性は限りなく低いだろう。杏子はほむらが経験したどの時間軸でも、魔女化の真実を知った程度では絶望しなかった。もともと失うものが少ないからだろうか。杏子のメンタルは相当なものだと言える。まあ、それもそうだ。目の前で自分の父が一家心中を図った現場に居合わせても絶望しなかったメンタルだ。

「今日ここにきたのは、それを伝えにきたということですか？」

「いえ、それもあるけど……今日はあなたに釘を刺しにきたのよ。まどか（特に今の状況では、危険が大きい）」

ほむらはまっすぐまどかを見る。まどかは杏子の失踪に相当なショックを受けているらしく、ほむらの話があまり頭に入っていないかった。

「絶対に、魔法少女になっちゃダメよ？（ワルプルギスの夜に対抗できる魔法少女は私だけになってしまった。だからこそ、だからこそまどかには契約させてはいけない）」

「わかってるよ！ そんなことより杏子ちゃんを探さないと！（魔法少女になっちゃいけないって言うのはもう何回も聞いたよ）」

「本当にわかっているの？ ならないほうがいいじゃないわ。絶対になるなど言ってい

るのよ？（少し、言い方きつかったかしら）」

ほむらの強い口調に、まどかは少し萎縮する。ほむらがここまで強い口調でまどかに言いつけるのは初めてのことだった。

「わ、わかっているよ（でも、なんでそこまで……）」

ほむらはふうと息を吐いて肩の力を抜く。そしてちらりと私のほうを見た。

「（ワルプルギスの夜まであと数日、さとりは……戦力にはならないわね。当日はまどかの監視でも頼もうかしら）」

どうやら、それなりに信頼してくれているようだ。私もほむらのことは信頼している。ほむら一人ではワルプルギスの夜は倒せない。過去何回戦っても倒せなかったのだ。今回に限って奇跡が起きるとは到底思えなかった。というわけでほむらには悪いがまどかはどこか遠くに避難してもらおう。

「なんにしても、杏子のこととはしばらく様子を見たらどうです？ 一晩いない程度よくあることじゃないですか」

「まあ、杏子に関してはそこまで心配しているわけでもないわ。明日当たりひよっこり顔を出すんじゃないかと思ってもある（でも、こうも立て続けに人がいなくなるとね）」

まあ、失踪していなかったとしても戦力が足りないことには変わりない。今日の晩、少しお金を稼ぎに行こう。ワルプルギスの夜まで余裕がない為、まどかを避難させると

したら次の休日だろうか。

「そ、そうだよね。杏子ちゃん、だもんね（でも、さやかちゃんもまだ見つかってないのに……）」

その後もほむらとまどかは今後について話を進めていく。私はそれに相槌を打ちながら、どうやってお金を稼ぐか考えた。

ひとり、またひとりと私の前から人がいなくなる。最初はマミ、なぎさ。あとを追うようにさやか。しばらくして杏子もいなくなった。まあ、いつものことだ。

「……最悪な目覚めだわ」

私は自室のベッドから降りると、眠たい目を擦りながら大きく欠伸をする。いや、もしかしたらまだ起きていないのかも知れない。

「随分な事言ってくれるじゃない。まるでお化けでも見たかのような目ね」
「お化けのようなものじゃない。死んだことにはなってるし」

なぜ、今日の朝が最悪なのか。答えは簡単だ。起きた瞬間、私の目の前に死んだはずのママの顔があった。

「はあ。私も随分疲れているわね。こんな幻覚を見るようになるだなんて」

「おいおい、勘弁してくれよ。マミはともかくさ。私は実質三日程度じゃねえか」

「……あ、うん。……え？」

私はコーヒーを淹れて一口飲む。そして、ようやく状況を理解した。

「マミ、なげさ。杏子まで……今まで一体何処に行っていたの？」

私はコーヒーの入ったカップを机の上に置くと、特にマミを睨み付ける。マミは申し訳なさそうな顔で苦笑した。

「ちよつと事情があつてね。隠れていたのよ」

「事情……ね。マミ、いきなりで悪いけど——」

「いきなりで悪いけど、ワルプルギスの夜は後回しよ」

「……今、マミはなんと言った？ やはり私はまだ寝ぼけているようだ。

「何故、そのことを？」

「その他にも、いろいろね。ソウルジェムのこととか、魔女のこととか」

私は大きいため息をつき、カップを三つ用意する。そしてゆつくりカップを持ち上げた。

「説明してくれるのでしょね？」

「つまり、さとりを警戒するために、みんなして隠れていたってわけね。それにしてもさとりが魔女を養殖した犯人だなんて」

ほむらは空になったカップを机に置くと、深くため息をつく。その表情は怒っているようでもあり、笑っているようだった。

「で、どうしてこのタイミングで私の前に？」

もつともな疑問だろう。マミは真剣な表情で答えた。

「さとりがまどかを誘拐した。今朝、そこそこ大きな荷物を抱えて二人で家を出るのを確認したわ」

「——ッ!! それは非常にまずいわ。あなたの話が本当なら、さとりはワルプルギスのことも含めて魔法少女のことをよく知っている。ワルプルギスの夜が来るのは明日。時間がないこともあってさとりはまどかを魔法少女にしようとすると考えられるわ。

……今、まどかの現在地は？」

マミは携帯電話を取り出すと何処かに電話をかけ始める。そして、携帯電話を机の上に置いた。

『やつほー、さやかちゃんだよー! マミさん、そつちで何かあったんですか?』

「美樹さん。現在地を教えてください」

『えっと、今丁度電車に乗ったところですね。買った切符の値段からして相当遠くまで

行くようですよ』

「わかったわ。ありがとう」

『ほむらとは合流できましたか?』

「ええ、合流したわ」

ママの代わりに、ほむらがさやかな問いに答えた。

『だったら早く合流しろー! 一人ぼっちは寂しいよー』

ぷつ、という軽い音とともに通話が切れる。ママは携帯電話を仕舞うと椅子から立ち上がった。

「というわけで、さとの後を追うわよ。暁美さん、準備はどのぐらいで出来る? 四十

秒?」

「四秒。……準備できたわ。行きましようか」

ほむらはカップを手にとると、流し台に置く。そしてママのほうに振り返った。

「作戦は歩きながら話すわ。とにかく、今は美樹さんと合流しましょう」

今から新幹線に乗り込めば、先回りが出るはずだ。ママ、なぎさ、ほむら、杏子の四人はほむらの家を後にした。

ワルプルギスの夜当日。私と紫は見滝原にあるホテルの最上階にいた。私は地霊殿にあるようなソファアーに腰掛け、窓の外を見ている。外は既にかなり風が吹いており、町に人通りは少なかった。

「大きな魔力が近づいていますね」

他の魔女とは違う。大きさもそうだが、質も桁違いに高い。ほむらが勝てないはずだ。

「ワルプルギスの夜。今の時点では最強の魔女よ。でも、囲んで叩けば勝てない相手ではないでしょうね」

紫はそう言つて微笑んだ。確かに、ワルプルギスの夜は強大だが、今までの時間軸で一回も勝てていないのかといえそうですがそうではない。ワルプルギスの夜を倒すことが出来た時間軸も存在している。ただ、そういった時間軸ではまどかが死んでいるだけだ。

「にしても、鹿目まどかという少女。確かに凄い魔力ね。これなら確かにこの世界を滅ぼしかねない」

「平凡な少女にここまでの魔力を持つことは珍しいことらしいです。ですが、理由を知つて納得しました」

魔法少女の持つ魔力はそのものの因果の量で決まる。もともとまどかの因果はそれほどでもなかったのだが、ほむらがループを繰り返すことによつて複雑に因果が絡み合

い、大きな因果となった。これはほむらも知らないことだった。

「不憫というか、哀れというか」

「いえ、健気……ですよね」

そう、ほむらは健気だ。たった一人の友達のために、自分を犠牲にして戦い続けている。本当にまったくもって——

「理解できないわ」

そう言つて、紫は軽く顔を歪めた。私もその意見には賛同だ。ほむらがまどかのことを非常に大切にしていることは知っている。自分の命に代えてでも守ると決意していることを知っている。

「だからこそ。ほむら一人を残したらかわいそうです。ワルプルギスの夜との戦いが終わったら、皆殺しにしてあげなくては。仲間はずれを作ったら可哀想ですし」

一番初めに殺すのは誰がいいだろうか。やはりほむらか。彼女が時間を戻せば、全てが無駄になってしまう。いや、ほむらだけがこの世界から消えるという可能性もあるが、楽観視はできないだろう。

「始まったみたいね。ここも巻き込まれるかしら」

私は窓の外をぼんやり見る。そこでは巨大な魔女と戦う五人の魔法少女の姿があった。

「あら、苦戦しているようよ?」

私はソファアから立ち上がると、紅茶を淹れ始める。そして紅茶の入ったカップを紫に差し出した。

「苦戦しているだけです。勝ちますよ。彼女たちは」

今までの時間軸と比べると、今回は非常に条件がいい。五人の魔法少女に私が作ったグリーンフィードが沢山。

「何せ、あのグリーンフィードを造るのに何百人という人間の命が使われているんです。勝てないわけがない」

私の言葉通り、ほむらたちは傷つきつつも確実にワルプルギスの夜にダメージを与えている。ワルプルギスの夜が力尽きるのも時間の問題だろう。

「さて、準備は整っているかしら」

紫は紅茶を一口飲むと、胡散臭い笑みを浮かべる。私はソーサーにカップを置き、その問いに答えた。

「勿論。整っています」

崩れたビルの破片の上で、私たちは空を見上げていた。先ほどまでの嵐は何処へや

ら。空は晴れ渡り暖かい光が私たちを照らしている。

「終わった……のよね」

私は流れる雲を見ながら小さな声でつぶやいた。

「ええ、終わったわ」

横にいるママが私のつぶやきに答える。

「ふわああ……疲れたのです」

「おつかれーなぎさちゃん」

なぎさがぐったりと寝返りを打ち、さやかが優しくなぎさの頭を撫でた。

「みんな、本当にお疲れ様」

ひとりコンクリートにぺたんと座っているまどかが、目に涙を浮かべて言った。その手には、ひとつのグリーンフシードが握られている。それは先ほどまで戦っていたワルプルギスの夜のものだった。

「さて、レスキューが来る前にとつとと退散しようぜ。いつまでも魔法少女の姿でこんなところに寝ていたら補導されちまうからな」

杏子は一気に体を起こしてまどかのほうを向く。それに合わせて私たちも起き上がりまどかのほうを向いた。

「えへへ、ほんとにやるの?」

まどかが苦笑しながらもグリーンフシードの下端をつまむ。私たちは変身を解くと、ソウルジェムを手を取った。

「まあまあ、確かに悪ふざけだけど、折角だしいいんじゃない？」

まどかは戸惑いつつも、一回深呼吸をする。そしてワルプルギスの夜のグリーンフシードをまつすぐ突き出した。

「えっと、それじゃあ。私たちの勝利を祝して……」

「「「「「かんぱーい!!」」」」」

七人の声が混ざり合い、静まり返った見滝原の街に響く。それと同時に私たちはまどかの持つグリーンフシードにソウルジェムをくっつけた。その瞬間、私たちは固まってしまふ。グリーンフシードとソウルジェムに混じって、ひとつのワイングラスがあったからだ。私は冷静に伸びている腕の数を数える。ひとつ、ふたつ、みつ、よつつ、いつつ、むつつ……ななつ。私はその見慣れない白い手袋の先を目で追った。

「おめでとうございます。貴方達の勝利を祝福致しますわ」

「——ツ!?!」

そこに立っていたのは女性だった。変わったデザインのドレスに白い手袋。腰まで伸びた金髪。そして何より、顔面に張り付いた不気味な笑み。

「おい、お前誰だよ……」

杏子が首だけを動かしてその女性のほうを見る。何故体ごと女性のほうに向けないのかと思つたが、違う。向けないのではなく、向けられないのだ。それどころか、私は一歩もその場から動けなかった。

「これは失礼致しました。幻想郷の管理者の八雲紫と申します」

その女性はまどかの持つているグリーンフシードを摘み上げると持つているワイニングラスの中に入れる。そしてグラスの中をぐるりと回すと、グリーンフシードごとワインを飲み干した。

「今日は少々用事があつてこちらの世界に來ました。なに、少し世界を救いに來たんです」

女性は両手を胸の前で合わせて傾け、につこりと微笑む。それは所謂可愛らしい仕草というやつなのだろうが、私はその仕草に不気味さしか感じなかった。

「せ、世界を救いに？ ワルプルギスの夜を倒しに來た……ということかしら」

私はなんとかその女性のほうに向き直る。私が動いたことによつて、ようやく皆少しずつ体勢を変え、八雲紫に向き直つた。

「それは貴方たちが倒したでしように。私が言っているのは——」

その女性はまっすぐまどかを指差した。

「世界を滅ぼす魔女になる、ソレです」

次の瞬間女性の纏っていた雰囲気が変わる。今まで放っていた不気味な雰囲気一気に殺気が混じった。

「まどか!! 逃げてッ!!」

私はまどかを庇うようにまどかの手を引っ張る。そして魔法少女の脚力にものを言わせて一気にその場から飛び退いた。

「あああああああああッ!! 痛い! 痛い! 痛いよ……」

その衝撃でゴキリという鈍い音と共にまどかの肩の関節が外れる。それはそのはずだ。人間の腕はそのような衝撃に耐えられるようには作られていない。だが、なりふり構っていられる場合ではなかった。先ほどまどかのいた場所に『止まれ』の看板が突き刺さっている。一秒でも遅ければまどかは串刺しになっていたことだろう。

「酷い事するわ。あれじゃあ中の神経ごと切れているんじゃないかしら」

ようやく事態を把握したのか、他の四人も散り散りに逃げ始める。私もまどかを抱え上げ、皆と離れるように走り出す。あれは拙い。いや、ヤバイ。今までいくつもの時間を軸を旅してきた私だが、あれは……

「うぎゃー!」

「いたっ!」

「へびっ!」

私は何かにぶつかって後ろに尻餅をついた。私はすぐさま立ち上がり、何にぶつかったのか確認する。そして、騒然とした。そこに転がっていたのは先ほど別の方向に分かれたばかりのマミ、さやか、杏子、なぎさの四人だった。

「つて、固まるのは駄目だ!!」

杏子がそう叫び、再び私たちは反対方向に逃げ始める。とにかく距離をとって、早くまどかの怪我の治療を行わなくては。肩なんてあまり嵌めたことはないが、応急処置だけでもしなくては。私は崩れかけたビルの中に逃げ込み、近くになった部屋にまどかを寝かせた。

「まどか、少し我慢して」

魔力で傷を治そうにも、まず間接を嵌めなければそもそもできない。私は苦しむまどかの腕を掴むと、一気に捻った。

「あああああああああああああ……」

絹を裂くような悲鳴が部屋に響く。この声で今の場所がバレたかも知れない。私はまたまどかを抱え上げると、ビルの外に向けて走り出した。

「ビルの外は、屋上でしたとき」

先ほど入ってきたビルの入り口を抜けた先は、何処にでもあるようなビルの屋上だった。

「——ッ!？」

私はとつさに振り返り、扉の先を見る。そこには先ほどのエントランスはなく、無機質な階段が下に向けて続いているだけだった。

「一体何が……」

「あら、結構強引な方法で間接を嵌めたのですね。ソレ、既に脂汗まみれですわよ」

私は声のした方向を見る。ビルの柵の外側、十メートルほど離れた場所に八雲紫が座っていた。勿論、そんな場所に足場などあるはずがない。八雲紫は空間の裂け目のような場所に、優雅に腰掛け、ワイングラスを揺らしていた。その中身は先ほど見たワインではなく、私にとって見慣れたものだった。あれは、血液だ。

「あなたは、一体何? 何が目的でまどかを狙うの!？」

私は魔力でまどかを治療しながら八雲紫を睨み付ける。八雲紫はにっこり微笑むと、グラスの中身をゆっくりと空中に溢した。血液は少しづつグラスから滴り落ち、空中にある何かを赤く染める。それは、空間の裂け目に貫かれたさやかだった。

「さやか!？」

さやかは口から血を流し、虚ろな目には意識があるとは思えない。それどころか、生きているかもわからない状態だ。

「端的に言えば世界平和の為。この世界を滅ぼす魔女を殺しにきました。いや——」

八雲紫は不気味な目でまどかを見た。

「魔女候補を」

「いや、一体何をかっこつけているんですか。さっさと殺せばいいじゃないですか」

聞きなれた声が入り口のほうから聞こえてくる。その声の主はいかにも面倒くさそうな目を三つ、私に向けた。

第十一話「確かにそれを辿れば目的地に到達するかも知れませんがね。目的を達せられるかはさておいて」

私が先ほど飛び出した屋上の出入り口。そこに古明地さとりが立っていた。その様子は気味が悪いぐらいいつも通りで、見慣れた気だるげな表情も、今は不気味な何かにしか見えない。

「あ、はい。どうも、古明地さとりです。昨日は大変お世話になりました」

さとりは言葉の節々に皮肉をたっぷり含ませながらそう言った。

「古明地さとり……貴方は、やっぱり……」

私は茫然とさとりの顔を見つめてしまう。次の瞬間、さとりがにやりと笑った。私はその笑みに危機感を感じ、咄嗟にさとりから距離を取ろうとしたが、さとりにとっては今の一瞬で十分だったらしい。

「つと、そんなこと考えていたんですね。私がまどかの魔法少女としての素質を利用して世界征服……漫画の読み過ぎでは？ ああ、漫画の読みすぎはマミのほうですね」

そう言つて薄ら暗い笑みをさとりは浮かべる。

「昨日は本当に悲しかったんですよ。私は今まで一生懸命ワルプルギスの夜に向けて準

備を進めてきたというのに」

「そんな、見え透いた嘘を……」

さとりは一瞬悲しそうな表情をしたが、すぐに元の表情に戻る。

「嘘じやありませんよ。何回も何回もこの一ヶ月を繰り返している貴方には分かってもらえらと思つただけけど」

「分かるわけ——」

いや、本当にそうだろうか。さやかは恭介と結ばれ、願い事も私たちの役に立つものだ。マミが死ぬ原因となるお菓子の魔女も、さとりが発生する前に百江なぎさとして戦力に加えた。そして増えた魔法少女全員に十分に供給出来るだけのグリーンフィードを作り出した。

「おや、どうやら分かつていただけたようですね。ですが、正確には違います。私が何とかしたかったのはワルプルギスの夜ではなく、まどかが魔女化してこの世界を滅ぼすことと自体です」

「だったら、今までまどかを殺す機会なんていくらでもあつたじゃない！　なんで今更……それも、全部上手くいったあとに……」

やっと私の長い旅も終わったと思つたのに。私の叫びに、さとりはやれやれと首を振る。

「いや、だって私がまどかを殺したら、貴方が時間を戻すじゃないですか。それだけは避けたかった。それだけです。貴方が時間を戻したら、私が外の世界に飛ばされると言うイレギュラー中のイレギュラーなこの時間軸がなくなってしまう。そうなれば私はまどかに出会うこともなかった。危ないところでした。危うく何も知らないまま、ただただ世界の滅亡を迎えるところでした」

知らなければ、干渉できない。今回を逃したら、さとりは魔法少女のことを知りえない。だからこそ、この時間軸で決着をつけたいのだろう。だが、私からしたらそんなこと知ったことじゃない。さとりは無用心な足取りで私のほうに近づいてくる。

「だとしたら、ほむらを殺してからまどかを殺さなければならぬ。ですが、貴方も知つての通り、私は弱い。貴方と戦つて勝てる見込みなんてないでしょう。だから、私は貴方に協力した。まどかを殺さない方向で、世界の破滅を止めようとした」

私はさとりから距離をとるように、一歩づつ後ろに下がる。それでも尚、さとりはこちらに近づいてくる。

「ですが、その必要もなくなりました。私は一度幻想郷に帰ることが出来た。幻想郷に帰れば、貴方を殺せる妖怪の力を借りることが出来る。まさしく他力本願というやつですが、協力者には事欠かない。なにせ『世界の破滅』がかかっているんです。目の前にいつ爆発するか分からない爆弾があつて、安心して眠れるものはいない。無力化できる

なら、無力化したい」

ガシャンと私の背中がフェンスにぶつかった。これ以上後ろに下がることは出来ない。それでも尚近づいてくるさとりに私は動くことができなかつた。

「ごめんなさい。世界平和のために、死んでください」

さとりは私の頬に触れると、申し訳なきように微笑む。その顔は、この一ヶ月見てきたさとの表情そのものだった。さとりはポケットから小振りなナイフを取り出すと、逆手に持つて振り上げる。魔法少女はナイフで刺された程度では死なない。だが、それはさとりも知っていることだろう。だとしたら、何かナイフに細工がしてあると予想するのが自然だ。刺されたら死ぬ。私は直感的にそう感じた。

「……例えば世界が滅びようとも、まどかは絶対に死なせない。まどかには指一本触れさせない!!」

私は力任せに後方へと飛び出す。フェンスを大きくひしゃげさせ、そのまま重力に任せて落下した。私はまどかを抱きしめ、落下の衝撃に備える。地面にぶつかった瞬間、私は一気に起き上がり、走り出した。

「いたっ!」

結果、私は屋上でさとりと正面衝突した。私は屋上の床を転がり、咄嗟にまどかを抱えて立ち上がる。紫もさとりも先程の位置から動いていないように見えた。つまり、動

いたのは私たちだけだ。

「起死回生の一手、だったのかしら。それともただ我武者羅に逃げただけ？　なんにしても、残念だったわね」

八雲紫はそう言って不敵に笑う。どうやら、これが八雲紫の能力らしい。時間停止……いや、瞬間移動か？　時間停止なら少しは私も感じ取れるはずだ。何も感じないということは瞬間移動の類だろう。

「確かに起死回生の一手かもね」

私は倒れているさとりをちらりと確認し、一気に腕の盾に魔力を込めた。次の瞬間、この世界の時間が停止する。私は八雲紫とさとりが停止していることを確認し、紫の言うところの起死回生の一手が成功したことを悟った。

「まどか、逃げるわよー！」

私は急いで串刺しになっているさやかを回収し、まどかを片手で抱えてビルの下に飛び降りる。見滝原がいい感じに水没していてよかった。私は水たまりから自身のソウルジェムを拾い上げると、さやかを肩に抱えながらまどかの手を引いて走り出す。

「ほむらちゃん、さっきのつて……」

肩の傷が癒え、まともに動けるようになったまどかが私の手に握られたソウルジェムを見る。

「さつき飛び降りた時に咄嗟に思いついて投げたのよ。下が水たまりで助かったわ」
「なんでそんな危ないことを？」

私はさやかを肩に担ぎ直し、隠れるように角を曲がった。

「さとりを心を読まれないようにするためよ。私は今まで時間停止を使わなかったわけじゃない。使えなかったの。さとりは私がいつ時間を止めるかわかる。さとり自身はそれ程脅威じゃないけど、あの得体の知れない八雲紫という妖怪と組んでいる今、何をしてくるかわからない」

だから、ソウルジエムを読心の範囲外に投げ捨てた。そして、ここまで離れたらある程度自由に時間停止が使える。

「問題があるとすれば……私が時間を止められるリミットが近づいていることかしら」
「それって……」

私は盾の砂時計に目を落とす。砂時計には微かに砂が残っているだけだった。

「時間を動かしている状態で、あと一時間。時間を止めていれば砂が落ちることはないけど、いつまでも止められるわけじゃない」

私は比較的濡れていない場所にさやかを寝かせる。抱きかかえていて分かったが、さやかは死んでいるわけではなかった。

「ソウルジエムがこんなに濁ってる。あと少し遅かったら危なかったかもしれない」

私は盾の中からグリーンフィードを取り出すと、さやかのソウルジェムに当てる。濁り切っていたソウルジェムは一気に輝きを取り戻し、次の瞬間にはさやかは意識を取り戻していた。

「あぎやあああああ!! ……はっ! え?!」

さやかは叫びながら起き上がると、周囲を見回してぽかんと口を開ける。だが、すぐに我に返ったのかカタカタと震えだした。

「そっか、ほむらが時間を止めて助けてくれたんだね」

私はまどかとさやかの手を握り直す。

「ええ。……一刻も早く合流した方がいいわね。さやか、ママが今どこにいるかわかる?」

「ママさんは私と反対方向に逃げたから……こっちだと思う」

さやかの先導のもと、私たちは時間の止まった見滝原を走る。私の時間停止は結構な量の魔力を消費するが、グリーンフィードが有り余っている今、ある程度の無茶はできるだろう。

「よしよし、ママさん見つけ」

さやかの記憶は正しかったらしく、すぐにママとなぎさと見つけることができた。二人ともまだ八雲紫に襲われていないらしく、傷らしい傷はなかった。

私はさやかの手を離し、マミの手を握る。マミはいきなり止まった世界に戸惑い、辺りを見回すが、すぐさま状況を理解し私と皆をリボンで繋いだ。

「時間停止。やっぱり便利よね。……佐倉さんは？」

マミは止まった世界でほっと一息つくと、改めて周囲を見回す。

「まだ見つけてないわ。何処へ逃げたか分かるかしら」

「私たちとは違う方向に逃げたのです。確か、あっちだったような……」

なぎさの先導で私はまた走り出した。マミのリボンで繋がっていることによつて、ある程度自由に大人数で動けるようになった。マミのリボンは魔力で生成されているため、絡まることも引つかかかって千切れることもない。

静まり返った見滝原を今度はなぎさが先導して走る。時間停止はまだ持続しそうだ。

「見つけたのです！」

なぎさが突然立ち止まり、遠くを指差す。そこには千切れた腕をなんとか繋げようとしている杏子の姿があった。

「うわっ！ 腕千切れてる！ マミさん、早く！」

さやかが一直線に杏子の下に駆けつける。マミがリボンを繋いだ瞬間に、さやかは杏子の腕の治療を開始した。

「くっそー、つかねえ……って、さやか!? いつの間に——」

「黙って待つてて！ いま付けるから……」

さやかは片手にグリーンフシードを持ち、お腹のソウルジエムに押し当てながら杏子の腕を治療する。ものの数分もしないうちに杏子の腕は完全に元通りになった。

「うわ……きも」

「きもって何だよ！ 折角治してあげたのに」

「いやキモかったのは治る行程であって治したさやかじゃねえよ。……ありがとな」

怪我の治療がひと段落すると、杏子は改めて私たちを見る。そして状況を察したのか面増くさそうに頭を掻いた。

「たつく、みんなボロボロじゃねえか。ここまできつ酷くやられるとはねえ。ほむら、時間停止はいつまで持つ？」

「グリーンフシード次第よ。今ある全てのグリーンフシードを時間を止めるために使うのだとしたら、六十時間と五十分。実際には皆のソウルジエムの維持と怪我の治療、戦闘で使う魔力分も考えたら丸一日持つか持たないかといったところね」

そう、あまり時間があるわけではない。全員合流できた今、早く次の手を考えたほうがいいだろう。

「つて、まだあんなのと戦うつもりなのか？ あれはさとりとは別物だぞ？」

「そうなのです。さとりお姉ちゃんは戦闘力は皆無なのです。ですが、あの八雲紫。あ

れは正真正銘の化け物なのです。逃げるのもままならなかったのですよ」

確かに、八雲紫の使う術の正体がわからない。それに能力だけが脅威だとは考えない
ほうがいいだろう。

「今のままじゃジリ貧ね。私たちだけで勝てる相手とも思えないし」

逃げるにしろ戦うにしろ、何かしらの対策を考えないとすぐに全滅してしまう。

「……ほむらちゃん、もういいよ」

皆が考え込む中、まどかが不意に呟いた。まどかは握っていた私の手を離すと少し距
離をとる。

「まどか？ もういいって？」

まどかは微笑んでいるが、その顔は何処までも悲しそうだった。

「私一人で八雲紫のところへ行く。八雲紫の目的は、私を殺すことなんでしょ？ だっ
たら私一人が死ねば——」

乾いた破裂音がひとつ響いた。そして直後に痛み出す私の手のひら。そこまで確認
してようやく認識する。赤くなったまどかの頬。そうか、私はまどかをぶったのか。

「ほ、ほむら……ちゃん？」

「そんな、そんなこと言わないで……それが正しいとしたら、私は今まで何のために
……」

膝に力が入らない。小さく水しぶきをあげ私は水溜りに膝をついた。
「でも！ このままじゃみんな……」

「無駄だよ、まどか。八雲紫はここにいる全員を皆殺しにするだろう。例えまどかが自ら八雲紫のところに行つたとしてもね」

突如、私たち以外の声が聞こえてくる。いや、この時間の止まった世界に私たち以外の存在がいるはずがない。いや、この声の主なら可能なかもしれない。

「自ら殺されに行こうだなんて馬鹿げてるよ。もったいないじゃないか」

私たちは声のしたほうを向く。そこにはビルの残骸から顔を覗かせるインキュベーターの姿があつた。

「キュウベえ、しばらくぶりね」

「ママが鋭い視線をインキュベーターに向ける。しばらくぶりか。確かに私も一週間以上キュウベえの姿を見ていなかった。」

「確かに、僕もママたちと同じく姿を隠していたからね。なにを不思議そうな顔をしているんだい？ 君の魔法は僕が授けたものだ。停止した時間に入り込むぐらい、僕たちの技術では造作もない」

「確かに、こいつらの科学力なら可能だろう。私はまどかを守るようにまどかの前に立ちふさがる。他の皆も武器を構えた。」

「何か勘違いをしてないかい？ 僕は建設的な提案をしに来ただけだ」

「貴方の言うことに耳を貸すだけでも？」

「貸さざるを得ない。暁美ほむら。八雲紫が現れたことによつて選択肢はなくなつたも同然さ」

「選択肢が無くなつた？ どういうことだろうか。」

「君たちが助かる方法は一つしかないと言つているんだよ。鹿目まどか、僕と契約して魔法少女になつて欲しいんだ」

「ふざけないで。そんな話——」

「暁美さん。少し待つて。キュウベエの話最後まで聞きましょう」

「ママはそう言つたと視線で話の続きを促す。インキュベーターはやれやれといった表情をつくると話を続けた。」

「八雲紫はこの時間軸で全てを終わらせるつもりだ。まどかが死んだとしても時間遡行を行わせない為に暁美ほむらを殺すだろう。僕としても鹿目まどかという素質の塊を失うわけにはいかない。だからこそその提案だ。まどかの祈りで八雲紫と古明地さとりを消してしまえばいい。そうすれば、皆助かるじゃないか」

「それではまどかが魔法少女になつてしまふじゃない！」

「暁美ほむら。まどかが死ぬのと、まどかが魔法少女になることは同列なのかい？」

……なんとなく、インキュベーターの言いたいことはわかった。まどかが殺されるぐらいなら、魔法少女になったほうがマシではないかと言っているのだ。

「だけど、まどかが魔女になったらこの世界は滅亡するのです」

「確かにそうかも知れないね。でも、その前にソウルジェムを割れば何の問題もない」

「わからないわね」

マミがインキュベーターに一步寄る。

「希望から絶望への相転移。それがなされないと貴方たちはエネルギーを収集できないはずよ。ソウルジェムを割ってしまったえばその相転移は行われない。貴方たちは鹿目さんの持つ感情エネルギーを収集できないんじゃない？」

「僕が救いたいのは鹿目まどかじゃない。君たち四人だよ。このまま放置してれば、君たちは残らず八雲紫に殺されるだろう。それほどの力をあの妖怪は持っている。一度に魔女候補を五人も失うというのは僕としても避けたいのさ」

確かに、こいつらの考えそんなことだった。まどかは何かを考えるように俯いている。

「ま、そういうことならいいんじゃないやねえの？ 魔法少女になっちゃえよ、まどか」

数分続いた沈黙を破ったのは杏子だった。

「どうせこのままじゃ私たちがみんな死んじゃうんだ。だったら問題を先送りにするって

のも悪くはないんじゃないの？」

杏子の言うこともわからなくはない。いや、本当に選択肢はそれだけか？ 少し考えた後、私はその先に希望を見つけた。インキュベーターが気がついていいるかはわからない。いや、気がついていないはずだ。

「インキュベーター、貴方の言いたことはわかったわ。でも、私たちから強要することはできない。いや、そんなことしたら私が許さない」

私は暗にまどかに契約してもいいと伝える。まどかは私の意図に気がついたのか気がついていないのか、バツと顔を上げた。

「ほむらちゃん、私……私！ 魔法少女になる」

「こうなってしまうって私としても反対する理由はないわ。でも、その素質、願い事を無駄遣いしては駄目よ」

八雲紫と古明地さとりを消したいなどといった願い事はもつてのほかだ。そんな願い、何の生産性もない。

「うん。大丈夫。ちゃんと考えてる」

この一瞬で願い事を考えたわけではないだろう。まどかは多分この一か月間、どのような願い事をしたか考えていたはずだ。まどかは六人と一匹の顔をぐるりと見まわし、一度大きく深呼吸すると、じつとインキュベーターを見る。

「キュウベえ、聞いて。私は、みんなで幸せに暮らしたい。誰一人かけることなく、みんなまで」

「それが君の願いかい？」

インキュベーターは一度首を傾げた。きつとインキュベーターには理解しにくい概念だったのだろう。

「わかった。君の願いはエントロピーを凌駕した。さあ、解き放つてごらん」

まどかの目の前で見慣れたピンク色のソウルジェムが生成させる。まどかはそれを両手で握りこむと大事そうに胸に抱えた。

「つて、それ具体的にはどういった願いなのです？」

「どういったつて言つても、言葉通りだよ？」

まどかは何かを試すように魔法少女に変身すると、武器である弓を構える。その様子は非常にさまになっていた。

鹿目まどかの周囲には奇妙な存在が二つある。一つは契約した覚えのない魔法少女、暁美ほむら。彼女に関しては謎は解けた。彼女は違う時間軸で僕と契約した魔法少女

だ。彼女は鹿目まどかという少女を救うために何度も時間も時間遡行を行った。その結果、鹿目まどかは今までに類を見ない程の素質を手に入れた。彼女はイレギュラーではあるが、僕らの計画の邪魔にはならないだろう。

問題はもう一つの存在、古明地さとりだ。彼女の話信じるとしたら、古明地さとりは幻想郷の地下に広がる都の管理者らしい。何の間違いでこつちの世界に来たのかはわからない。だが、危険な存在と言わざるを得ないだろう。確認を取るのに時間がかかったが、彼女は人の心のみならず、僕らの思考を読むこともできるらしい。それ以降、僕は古明地さとりに近づいていない。古明地さとりが暁美ほむらに協力的なうちは下手に接近して僕らの計画を読まれるわけには行かないからだ。

それに古明地さとりは幻想郷の住民だ。幻想郷に関しては、八雲紫と契約関係にある。僕らは幻想郷には関わらない。逆に八雲紫は魔法少女システムに関わらない。そう思えば今回の介入は契約違反だといえるのだろうが、彼女とてなりふり構っていられないのだろう。

ここまでは、僕の計画通りだ。さとりが接触したという箱の魔女、エリーに幻想郷の行き方を教えたのは僕だ。エリーにさとりを救わせ、幻想郷に向かわせる。さとりは幻想郷に戻ったなら、必ず自分よりも力の強い妖怪、それも外の世界に干渉できる妖怪に援助を求めよう。僕らの計算では九十パーセントの確立で八雲紫に援助を頼むと

踏んでいた。

八雲紫にまどかの命を狙わせ、まどかの契約を促す。いや、八雲紫に狙われたら契約せざるを得ない状況になるはずだ。そして、魔法少女になったまどかは八雲紫を殺す。そうなれば、僕は幻想郷で自由に活動することができる。この世界に比べれば素質の高い少女が沢山いるはずだ。

まどかを魔法少女にし、八雲紫を始末する。僕の計画は完璧だ。そして、既に半分以上完遂できていると言えるだろう。あとは、鹿目まどかが八雲紫を殺すのを見届けるだけだ。

インキュベーターがまどかに契約を迫った時、私はある一つ作戦を思いついた。だが、この作戦はこの世界を諦めるも同然だ。そして、ある意味まどかを盾に使うようなものだ。私の時間遡行は盾の中の砂時計の砂が落ちきるまでは使えない。落ちきるまでの一時間、私だけでは八雲紫の追撃から逃げ切れまいだろう。だから、唯一対抗できそうなまどかに八雲紫の相手を任せ、砂が落ちきる一時間耐える。砂さえ落ちきれば、全てをやり直すことができる。時間遡行さえできれば、全ての元凶のさとりがこちらの世界に来ることもないかもしれない。

まどか、ごめんなさい。私は貴方の為に貴方を利用するわ。でも、全部なかったことにしてあげる。今回のループで答えは見えた。もう少し待っていて、まどか。

古明地さとりに話を持ちかけられた時、私の脳裏にふとインキュベーターの顔が思い浮かんだ。インキュベーターとは相互に不可侵の条約を結んでいる。私は魔法少女システムに干渉することができない。だが、それはインキュベーターの行いが幻想郷に影響を及ぼさない場合に限る。鹿目まどかという少女が魔女になった場合、地球が滅びる。それは幻想郷の滅びも意味する。これは明確な条約違反だ。向こうが先に手を出したなら、こちらから干渉するのも問題ないだろう。

「まどか、準備はいい?」

止まった時間の中、まどかは調子を確かめるように弓を数度引く。そしてにつこりと微笑んだ。

「見て、ほむらちゃん。かつこいい? かわいい?」

まどかはずっと魔法少女に憧れていた。だが、憧れと現実が違う。憧れはあくまで憧

れだ。現実になることはありえない。

「ええ、よく似合っているわ」

私はまどかの髪をそつと撫でる。私はまどかの魔法少女姿が好きだった。だが、この姿を見ているということは、私は失敗したということでもある。私はまどかの準備が整ったのを確認すると、時間停止を解除した。

「見つけたわ」

時間停止を解除した瞬間、魔力を感知したのかすぐさま八雲紫は私たちの前に姿を現した。八雲紫は魔法少女姿のまどかをちらりと見ると、軽く眉を顰める。

「曉美ほむら。貴方の目的はそれの契約を阻止することではなくて？」

「事情が変わったわ」

私はまどかの手を握り時間停止を発動する。止まった時間の中八雲紫の背後に回りこんだ。まどかは力いっぱい弓を引き、八雲紫に向けて撃ち放つ。その一撃はワルブルギスの夜程度なら一撃で消滅させてしまうほどの威力を持っている。当たれば破片も残らないだろう。時間停止を解除した瞬間、必殺の一撃が八雲紫に飛来した。

「エグイ一撃を撃つわね」

だが、その一撃は一瞬で空間の割れ目に吸い込まれる。あれの正体はわからないが、絶対的な盾だと思えばいいだろう。

「まどか、数で攻めたほうがいいわ。威力があるから取り敢えず当てることを考えま
しょう」

「わかった」

まどかはもう一度弓を引き、八雲紫に向かって解き放す。その一撃、いや矢は放たれ
た瞬間無数の光の矢に分裂し、八雲紫に襲い掛かった。八雲紫は完全に自分の身を隠せ
るほどの空間の切れ目を作り出し、光の矢を防ぐ。次の瞬間、私たちの頭上からまどか
の矢が降り注いだ。

「まどか!？」

「安心して!」

私は咄嗟に頭上を見上げ、いつの間にか上に生成された空間の切れ目からまどかが
放った矢が出てきていることを確認する。時間を止めて回避しようかとも思ったが、ま
どかには何か策があるらしい。まどかの放った矢が私とまどかの体に当たる。だが、そ
の矢で私たちの体が傷つくことはなかった。

「大丈夫だよ、ほむらちゃん。この矢は魔なるものには効かないから」

「でも、これでわかったわね。八雲紫の能力は、ポータルを生成すること」

物質をA地点からB地点に移動させる穴を作り出す。その能力を使って、結界の中に
ある幻想郷とこっちの世界を行き来しているのだろう。

「あまり攻撃向きな能力でないのは確かね。でも、私の銃器類は使えないことはわかった。まどか、私はサポートに集中するから、攻撃は任せたわよ」

物理的な銃器での攻撃では、先ほどのように攻撃をこちらに返されたときにこっちが傷ついてしまう。

「わかったよ、ほむらちゃん」

まどかはもう一度弓を引き絞る。さあ、敵の正体は割れた。あとは一時間耐えるのみだ。

今頃紫はほむらと戦っている頃だろうか。まあ、あの八雲紫だ。人の子一人殺すなんて朝飯前だろう。まどかが魔法少女にならない限り、苦戦などするはずがない。

「まあそれを阻止するために動いているわけですけど」

私は無造作に倒れたビルの角を曲がる。次の瞬間、私はマミの思考を感じ取った。どうやら近くにいるようだ。

（暁美さんと鹿目さん、大丈夫かしら。でも鹿目さんの才能なら、どんな相手にも負けな
いはず）

まどかの才能？ 私是不穩な単語に眉を顰める。地面に降り立ち、魔力を出さないように慎重に近づいた。

（鹿目さんが契約することが助かる唯一の道だとしても、あまりいい気はしないわね）

まどかが契約？ それはあり得ない。ほむらが一番避けたいと思っっているのはまどかの契約のはずだ。

「動くな」

突如背後から声を掛けられ、私は固まってしまふ。ゆっくり後ろを振り向くと、私に槍を構えている杏子の姿があつた。

「ホント、警戒心の欠片もねえな。心が読めないってだけで随分とポンコツになりやがって」

「また、遠隔操作ですか」

杏子は私の腕を掴み地面に押し倒すと、腕を鎖で縛り始める。鎖の凹凸が私の腕に食い込むが、杏子はお構いなしだった。

「散々キュウベえに文句を言っていたのに、結局良いように自分の体を扱うのですね」
「……黙りやがれ。そうせざるをえない状況に追い込んだのはアンタじゃねえか」

会話ができる距離にいるのに心が読めないというのは、なんだか妹と話しているようだ。だが、違うところが一つある。こいしの場合読む心がない。だが、杏子の場合

が遠くにあるだけだ。

「さて、マミのところに向かいましょう。近くにいるのでしょうか？」

「……アンタが仕切ってんじゃねえよ。黙って歩け」

私は杏子に槍を突きつけられたまま、静かに歩き出す。崩れたビルをぐるりと歩き、私はマミの前に出た。

「あら、佐倉さん一体どこに——ツ!?（古明地さと……なるほど、佐倉さんは私を餌にさとりを捕えたのね）」

マミは困ったものだと言わんばかりに肩を竦めながら私にリボンを巻き付けた。杏子はそれを見て、私から鎖を外す。

「さやか、もう出てきていいぞ。こいつさえ捕まえちまえばいくら心を読まれても問題ない」

杏子が声を掛けると遠くからさやかが走ってくる。その後ろにはなぎさの姿もあった。

「……さとりお姉ちゃん（あの、えっと）」

なぎさは私を見てすぐに目をそらす。考えが全くまとまっていならしいが、どうも私に対して罪悪感を抱いているようだった。さやかは逆に物凄い敵意を私に向けてきている。

「お久しぶりですね、なぎさ。変わりないようでも何よりです」

私は笑みを浮かべてなぎさに話しかける。なぎさは小さく悲鳴を上げて一歩後ろに下がった。それを見て、さやかはわかりやすく表情を歪める。そして身動きができない私を突き飛ばし、上に跨った。

「アンタみたいなのがいるから……（人の命を一体何だと思っているんだ）」

さやかが拳を振り上げ、私の顔面に振り下ろす。当然両腕は縛られているため、そのまま顔で受け止めるしかない。さやかは一体何に対して怒っているのか。それ自体をさやか自身は理解できていない。ようはただの憂さ晴らしだった。まあ命を狙われているというこの状況は私が作り出したものなので私を殴るのは間違っていないのだが。

「さやか、痛いです」

「使い魔の犠牲になった人たちのほうがもつと痛い。私たちを助ける為に戦っているまどかのほうがもつと痛い……騙され利用されたなぎさちゃんのほうがもつと痛い!!（許せるもんか、許せるはずがない!! こんなヤツ、こんなヤツ——）」

人が人を殴る音というのは意外に無機質だ。この音は骨と骨がぶつかり合う音だろうか。痛いとは感じる。血液が目に入り私の視界を赤く染める。額でも切ったかと思ったがどうも違うらしい。血が流れているのはさやかの拳だ。まあ、当たり前だ。私の顔を殴る分、さやかも拳を私の顔で殴られているわけなのだから。

そのあと、しばらく私はさやかに殴られ続けた。それはさやかの息が切れるまで続き、今私の体は電信柱に縛られた状態にある。近くにはマミとなぎさ。杏子とさやかはまだかとはむらの様子を見に行つたようだった。皆の心を読む限り、まどかは八雲紫を倒すために魔法少女になつたらしい。なんというか、本末転倒もいいところだ。この世界に来てから、行動の一つ一つが裏目に出ている。宇宙を書き換えるほどの素質を持つたまどかだ、八雲紫とて勝てる相手ではないだろう。

「あ、あの……（さとりお姉ちゃん）」

なぎさは私に何かを言いかけたが、目を伏せ話すのをやめる。マミの視線に気が付いたからだつた。なぎさはどうも私に謝りたいらしい。だが、マミの手前それでもできない。できれば私と二人きりになりたい。二人きりになって、事の真相を聞きたい。そう思っているらしい。

「……まだ、お姉ちゃんと呼んでくださるのですね」

「なんの話かしら？（お姉ちゃん？　なぎさちゃんの心を読んだのかしら）」

私の独り言にマミが過剰に反応する。私はそんなマミを無視して独り言を続けた。

「貴方に話した内容に、嘘偽りはありません。出来ればこの世界を救いたかったのです

が、そうもできなくなりました。貴方たちが立てた作戦。魔法少女になったまどかに、八雲紫は殺されるでしょう。そうなれば、世界の滅亡を知る者はいなくなる」

「確かに、鹿目さんが魔女になったら地球ごと壊滅するかも知れないわね。でも、そうはさせないわ。私たちは鹿目さんを決して絶望させない。もし鹿目さんのソウルジェムが濁り切ったら、私は迷いなくそれを撃ち砕くわ（確かに確実な方法ではない。でも、それが起こるのは決して今ではないもの）」

「私は出来れば……」

マミは途中で切った言葉の続きが気になったようで、私に問い返す。

「できれば、なに？（命乞いかしら?）」

「まどかを助けたかった。心の底からそう思います」

その答えが、マミには許せなかったらしい。マミは無表情になるとまっすぐマスクETT銃を私に向ける。

「一体どの口が!!（見苦しい。今更命乞いなんて。心にも思っていないことをペラペラと……）」

「心を読めもしないのに『心にも思っていないことをペラペラと』なんて、まるで私の心を読んだかのようなことを思うのですね」

「——ッ!?!」

「ママは私の問いに怒ったらしく、私の右肩を撃ち抜く。ははは、これでは射的の射的だ。なんて、気楽な考えが脳裏を過った。実際は射的なんて可愛らしいものなんかではない。完全に、銃殺される捕虜じゃないか。」

「そうです。私は心が読めるんですよ。人間の汚いところ、悪いところ、下賤なところが見えるんです。でも、ですがね。それと同じだけその人の良いところ、綺麗などころも見える。まどかや貴方が掛けてくれた優しさも、親切も、裏表なく受け取ることができません。その人の優しさが嘘偽りないものだとは確信できる。それが、どういうことだかわかりますか？」

「ママはもう一発、今度は私の左足を撃った。魔力でできた弾丸は、私の太ももを貫き電柱に穴を開ける。」

「その人の優しさが、親切が、笑顔が、一つ一つ私の心に届くんですよ。この人はなんの裏表もなく、私に好意を寄せてくれている。私のことを大切にしてくれている。私のことを友達だと思ってくれている。憶測なんかじゃない。心が読めるから、確認できるんです。だからこそ、私は思うんですよ。出来れば、私に素直に好意を寄せてくれたまどかを救いたかったと」

「そんなこと——」

「それは、貴方にも言えることなんですよ？ 私のはね、ママ。貴方から受けた優しさを覚

えています。嘘偽りのない親切を覚えています。こうして嫌われてしまった今でも、忘れることはありません。忘れるわけがありません。マミが心の底から行ってくれた行為を、好意を、忘れるはずがありません」

だから、だから、私は。

「だからね、マミ。私は、貴方に生きて欲しかった。ほむらの経験してきた時間の中で、お菓子の魔女に食べられてしまう貴方を救いたかった。絶望して魔女になってしまふさやかを救いたかった。一人で背負おうとする杏子を救いたかった。孤独に戦うほむらを救いたかった。魔女となり望んでいない結末を迎えてしまふまどかを救いたかった。私を姉と慕うなぎさを救いたかった」

だから、私は。だけど、私は。

「これが、私の今の心情です。心の読めない貴方にも分かるように、口に出しました」

マミは、わかりやすく狼狽している。私の言葉に混乱し、困惑している。こういう人間の辿る思考は簡単だ。読まなくてもわかる。マミは私に近づくと、私の額にマスケツト銃を突きつけた。その先端で私の額を抉らんばかりに振じる。

「やつぱり、命乞いじゃない。もしそれが本当だったら、なんであなたは鹿目さんを殺そうとしたの？ 辻褄が合わないわ（適当なことを……許せない、許せない!!）」

そう、怒りだ。マミは私の言葉を理解できず、その全てを怒りに変えた。こうなった

人間には、もう何を言っても無駄だ。説得しようとしても、焼け石に水。全ての感情を怒りに変えて、ぶつけてくる。

「私にも、家族がいます。実の妹が一人と、家族同然に可愛がつているペットが多数。私にも守らなくてはならない世界があるんです」

「貴方が殺した見滝原の人たちにも、家族はいたはずよね？（やっぱり、自分のことばかり）」

「世界の終わりを回避するためなら、安い犠牲と考えています。そうです。その人たちは、私の都合で殺しました。私が勝手に多くの見滝原市の人間を、個人的な理由で殺したわけです」

「一体何の権限があつて——」

「ママがマスケット銃に力を込める。力んで引き金を引いてしまわないか心配だったが、引き金に指はかかつていなかった。」

「私だからこそ、ですよ。他の誰にも同じことは出来ない。人の心がわかる私だからこそ、最も確実に、生きていたくない人間を選択できる」

「生きてたくない人間？（自殺を考えている人つてことかしら）」

「生きる価値のない人間。私の主観ではなく、自分で自分のことを価値のない人間だと思つている人間。夢も希望もなく、ただ生きる為に生きている人間。私が犠牲にしたの

は、そういう人間です」

「だからと——」

「だからと言って、それが人を殺していい理由にはならない。だから言ってるじゃありませんか。私が殺したと。この件に関して罪の意識を感じているわけではありませんが、責任は私にあると理解していますよ」

さて、そろそろだろうか。私は別にマミに向って話しているわけではない。対話をしているのはマミだが、私はなぎさに向って話しかけていた。マミの暴力を黙って受けているのもそのためだった。

「話はそれだけかしら？（もう、いいわ。これ以上話を聞いても無駄ね）」

さて、ようやくマミが痺れを切らした。マミはようやく引き金に指を掛ける。私は、この瞬間を待っていたのだ。

「ええ、それだけです」

私は横目でちらりとなぎさを見る。なぎさは私の視線に気が付いた。さて、ここから先は私の専売特許。想起——

「死になさい（悪は、絶たなければいけない）」

（さとりお姉ちゃんっ……）

一発の銃声が響く。マスキット銃が吐き出した弾丸は私の脳を滅茶苦茶に破壊し、侵

入方向の反対側から飛び散らせた。

「……呼吸は止まっている。脈拍もなし。魔力の反応はあるけど、残り香のようなものね（さすがに、頭を潰せば死ぬわよね）」

ガチャンと、マミの持っていたマスケット銃が地面に落ちる。

「うふふふ……あははははは……（これで、やっと……）」

マミはフラフラとした足取りで何処かへ去っていく。アレに目的地などない。ただ数週間とはいえ一緒に過ごした存在を、無抵抗の相手を一方的に撃ち殺したという感覚が、彼女から現実味というものを奪い去っているだけだ。そう、私は死んでいない。正しくは、死んだように見せかけているだけだ。あの時私が想起したもの。それは幻想郷にいるキョンシー、宮古芳香だった。今の私に脈拍はない。眼球は光に反応しない。

「さとりお姉ちゃん……（なんで、さつき私のほうを見て笑ったんですか……）」

マミに殺される瞬間、私はマミではなくなぎさのほうを見た。そして、なぎさに微笑みかけたのだ。それこそ、姉が妹を見るように。なぎさは目に溜まった涙を手で拭うと私を拘束しているリボンを切る。力なく顔面から倒れる私を見て、なぎさは私が死んだことを実感した。

「（さとりお姉ちゃんが死んだ。これで、本当によかったんでしょか）」

なぎさは私の頭を抱きかかえる。もう一度手で涙を拭うが、今度は拭い切ることが出

来なかった。溢れ出る涙が頬を伝い、私の顔に落ちる。

「さとり、お姉……ちゃん（なぎさは……なぎさは……貴方を姉のように慕っていたので
すよ）」

ぼたり、ぼたりと私の顔になぎさの涙が落ちる。

「なぎさは……（なぎさにとつては、さとりお姉ちゃんはお母さんの命の恩人です。い
や、絶望しそうになっていたなぎさを助けてくれた、命の恩人なのです）」

……なんと健気な娘だろう。やはりなぎさに目をつけたのは正解だった。なぎさは
私を裏切ったのではない。ママに流されただけなのだ。私は額に開いた穴に涙が落ち
るのと同時に、額の穴を治していく。次第に目を見開くなぎさをよそに、私はゆつくり
と起き上がった。

「ーッ!? さとりお姉ちゃん！（嘘……なんで……）」
「……あ、……」

私はなぎさの顔を見て先ほどと同じ笑みを浮かべる。そして下から手を伸ばし、なぎ
さを優しく抱きかかえた。

「なぎさ」

私はそのまま、顔についている目玉から涙を流す。そして、優しく囁きかけた。

「ありがとう……こんな私を慕ってくれて。ごめんなさい……こんな私で」

ごめんなさい、なごさ。私はまた貴方を利用するわ。

第十二話「ありがとう。そう言ってくれるのは貴方だけです」

「力が強いというのは、最も強いとは全く違う意味なのよ？　力だけがこの世の全てだったら、今頃ヒグマかライオンあたりが世界を征服しているでしょうね。でも、今この世界で一番繁栄している種族は人間。何故だかわかるかしら」

八雲紫は空中に作った空間の切れ目に腰掛けながら、優雅に微笑む。

「人間には知恵があり、能力がある。戦いというのは常に力あるものが勝利するわけではない。どう？　今噛み締めているでしょう？」

八雲紫は地面に転がる魔法少女二人を見下ろして言った。

「地面と一緒に」

はじめは互角だった戦いも、次第に一方的になっていった。ほむらとまどかは遠距離攻撃を繰り返したが、紫に当たることはない。逆に、何処からともなく飛んでくる紫の攻撃を二人は避けることができない。二人が勝つには、まどかの攻撃を一撃でも紫に当てればよい。だが、それすら出来ていないのが現状だった。

「まあ、簡単な話よね。刀というものは、剣士が持つからこそ意味がある。刀の振り方も

知らない幼児に与えたところで、ままごと以上のことは出来ない。力というのはね、使えるだけじゃ駄目なのよ。扱えるようにならないと」

次の瞬間、地面に倒れていた二人が消える。どうやら、時間を止めて何処かに移動したらしい。戦いが始まって三十分。そろそろ二人の魔力も限界だろう。

「といつても、これ以上消耗させたくないのよねえ。アレが魔力を使い切ったら、その時点で詰みなわけだし。だとしたら、ここは追わずに適度に回復させたほうがいいかしら？」

紫は呑気にそんなことを考えた。だが、紫は知らない。あと三十分もしないうちにほむらの時間遡行が使えるようになるということ。

「はあ……はあ……追って、こない？」

崩れかけたビルの際に身を隠しながら、ほむらとまどかはソウルジェムにグリーンシールドを押し当てる。ほむらと違いまどかの魔力の容量は大きい。だが、その分燃費が悪い為、かなりの速度でグリーンシールドを消費しているのが現状だった。このままでは残りの時間を戦い切ることができない。そう危惧したほむらは一度紫との距離を開けることにしたのだ。

「おかしいよ、ほむらちゃん。今までだったら直ぐにでもワープしてこっちに来てたのに」

まどかが不安そうな顔でほむらに訴えかける。確かに、先ほどまではソウルジェムの回復のために距離を開けてもすぐに追いつかれていた。それが、今回は気配すらない。追われていないことが逆に恐怖へと変わる。そんなまどかを見て、ほむらは少し不安になった。

「まどか、怪我は大丈夫？」

「うん、大した怪我じゃないよ。すぐに治ったし、痛みもない。ほむらちゃんは？」

「私もよ」

ほむらはちらりと盾の中の砂時計を確認する。今まで時間停止能力のおかげで紫の攻撃を回避できていた。だが、その時間停止が使えるのもあと少しの間だ。逆に言えば、時間停止能力が使えないようにならないと時間遡行ができない。つまり、砂が落ちきった瞬間に時間遡行をしなければほむらたちはあっけなく紫の攻撃を貰い死んでしまうだろう。

「ねえ、ほむらちゃん……ちよつと、弱気なこと言っていないかな？」

まどかは呼吸を落ち着けながら、ほむらの顔をじつと見る。そして弱弱しく微笑んだ。

「私、あの人に勝てる気がしない。こんなことなら、八雲紫を倒す力が欲しいってお願いしたらよかつたかな？」

「……大丈夫。大丈夫よまどか。とっておきの秘策がある。後二十分。あと二十分耐えたら、この状況をひっくり返せるわ」

「必殺技かなにか？」

まどかはほむらの言葉に目を輝かす。まどかは、ほむらがこのループを諦めていることを知らない。それどころか、時間進行が最優先。その為ならまどかの命さえも犠牲に出来る覚悟がほむらにはあった。まどかを救うためにまどかを犠牲にする。普通に考えたら矛盾しているが、ほむらはその矛盾にすら気づけないほど追い詰められていた。

「……そうね。ある意味、私の一番の必殺技。……来たわよ」

ほむらは使い切ったグリーンフシードを盾の中にしまい、まどかの手をとって立ち上がる。次の瞬間、空間が割れ、八雲紫が姿を現した。

「回復できたかしら？ 魔女になつたら元も子もないしい。さて、最後に提案してあげるわ。貴方たち二人のソウルジェムを私に渡しなさい。そうすれば、苦しまずに殺してあげるわ。双方共に手間が掛からなくてオススメよ」

「まどかを魔女になんて、絶対にさせない。貴方こそ、今すぐ自分の城に帰るべきね。こっちの面倒はこっちで見ろ。関係ない貴方が関わるべき問題ではないのよ。この『余

所者』」

「余所者だからこそ、こちらの問題に巻き込まれたくないのよ。理解しているかしら？」

貴方たちは今核爆弾のスイッチを手にしていることを」

「貴方も理解していないのでは？ その核爆弾に再三攻撃を加え続けていることを」

少しでも時間を稼ごうと、ほむらは慣れない口論に打って出る。だが、その焦りが氣取られたのか紫はすぐに攻撃を再開した。

「あら、知らないの？ 核爆弾つて外から衝撃を加えた程度じゃ爆発しないのよ？ 逆に、強い衝撃で壊してしまえば、爆発することはない」

紫の生み出した光の玉が一気にまどかとほむらを襲う。ほむらは時間を止め必死にそれを避けるが、時間を止めた分だけこちらが消耗し、現実の時間の進みも遅くなる。紫にとつては四十分程度の戦闘だが、まどかとほむらにとつては既に数時間にも渡る死闘になっていた。あと二十分。その二十分が永遠に感じる。

「まどか!!」

「うん。いくよ!!」

まどかが放った矢は紫の作り出した空間の割れ目を掻い潜り、紫に迫る。だが、次の瞬間には紫は別の場所に移動している。空間の割れ目という盾、それと瞬間移動。この組み合わせが非常に強力で、まどかの攻撃は全く紫に届かない。

「やっぱり届かない。ほむらちゃん、どうしよう……」

「攻撃を続けるのよ、まどか。攻撃することで、少しでも相手の攻撃の手が止まる。攻撃は最大の防御よ」

そう、あと二十分。あと二十分耐え切れば、ほむらたちの勝ちだ。

このまま状況が動かなければだが。

「……まどかたち、大丈夫か？　かなり押されているみたいだけど」

杏子は双眼鏡を覗きながら、ポツリと呟く。その顔には冷や汗が流れていた。

「信じるしかない。私たちが行ったところで、すぐに殺されるだけだよ。まどかとほむらだからこそ、まだ戦えてる」

さやかは杏子の隣で強く手を握り締めた。応援できるほどの距離に行くわけにはいかない。移り変わる戦場を追いながら、ただ見守るしかなかった。

「مامィさんたち、大丈夫かな。さとりを監視してるって言ってたけど」

「大丈夫もなにも。あの弱つちいさとりを監視してるだけだ。مامィが遅れをとる事はない。さとりに今逃げられると厄介だ。あの読心能力が紫に加わったら、あつという間にやられちゃうだろう」

「その心配はないわ」

後ろから声が聞こえて、杏子とさやかは振り返る。そこには服を軽く血で汚したママミが立っていた。

「——ツ!? マミ!? どうしてここに……さとりは?」

杏子は双眼鏡を取り落とし、ママミの肩を両腕で掴む。ママミは弱弱しい笑みを浮かべながら呟いた。

「殺したわ。ちようど、初めて美樹さんと会った時と同じように」

「……そっか、それが正解かもですね」

さやかはママミの言葉を聞いて、どのような状況だったのかをすぐに察する。つまりは、縛り付けて頭に弾丸を撃ち込んだということだ。あの時行わなかったことを、今やった。そういうことだろうと。

「さやかと初めて会ったとき? どういうことだ?」

杏子が双眼鏡を拾いなおし、また戦場のほうを見始める。杏子の質問はもつともだ。杏子は、そのときのことを知らない。

「私がさとりを初めて見たとき、殺そうとしたのよ。こう、マスケツト銃を額に突きつけてね。今思えば、あの時殺しておくべきだった。あの時やり残したことを、今やっただけよ」

「でも、これで八雲紫のところにさとりが行くことはないですね。……なぎさちゃんはやさかか?」

「さやかは周囲を見回してなぎさの姿がないことに気がつく。マミはさやかに指摘されて、ようやくそのことに気がついた。」

「そういえば……まださとりの死体の前にいるのかしら」

「——ツ!? おい、冗談じゃねえぞ……」

杏子の言葉に、マミとさやかは杏子のほうを見る。杏子はまた双眼鏡を取り落としていた。

「それでさとりとなぎさ二人きりにしてきたってのか!？」

「なに言ってるんの杏子。マミさんがさとりのやつを殺したからなぎさちゃん一人でしょ?」

「忘れたとは言わせねえぞさやか。アンタ、一回さとりの頭を剣で串刺しにしてるじゃねえか!! 頭に剣が刺さって平然としてるやつが弾丸一発程度でくたばるもんか!!」

杏子は先ほどの場所に向けて走り出す。ようやく事態を把握したのか、さやかは顔を真っ青にしながら杏子の後を追う。マミは困惑しながら二人の後を追った。

「待って! どういうこと?」

「そっか、そのときマミはいなかったか。さとりのやつ、一回私とさやかの喧嘩に巻き込

まれたことがあるんだよ。その時、私は槍でさとりの腹を、さやかは剣でさとりの後頭部を眼球にかけて貫いた。だがその時、さとりのやつは倒れるどころか痛がりもしなかつたんだ!!」

そう。二人が喧嘩したとき、既にマミとなぎさは姿を隠していた。そう、知らないのだ。さとりの妖怪としての耐久性を。

「それじゃあ今頃さとりは……」

「なぎさのやつが食い止めてりやいいが……とにかく急ぐぞ!!」

三人は急いでさとりを縛り付けていた場所に向かう。だが、そこにはさとりどころかなぎさの姿すらなかつた。争った痕跡はない。

「くそ。やつぱりいねえ……」

杏子は固く拳を握り締め、さとりを縛っていた電柱を殴りつける。マミは信じられないようなものを見る目で切られたリボンを見つめていた。

「し、知らなかつたのよ……だって、呼吸も心拍も止まってたし……!! 大丈夫よ!

なぎさちゃんもいないってことはなぎさちゃんもさとりを追つたに違いないわ!

私たちも追いかけてみましょう!」

「馬鹿、樂觀視しすぎだ。なぎさはさとりの仲間になった。そう考えるのが自然だよ。さとりのやつが生きていたとしても、あの拘束から抜け出すことは出来ねえはずだ。リ

ボンが切られているってことは、なぎさが協力したってことだ」

「そんな……嘘よ！ あのなぎさちゃんそんな……」

ママはヒステリックを起こしたように騒ぎ立てる。そんな様子を見て、杏子は頭を抱えた。

「奴は心が読める。小学生一人誑かすなんて朝飯前なはずだ。とにかく急ぐぞ。やつが八雲紫に接触する前にどうにかして食い止めねえと」

さやかはしやがみ込み、足跡を探すべく周囲を見回す。

「待って！ なぎさちゃん居た！」

そして、なぎさを見つけた。なぎさは少し離れたところに倒れていた。服は泥だらけだが、傷は見当たらない。さやかは急いでなぎさを抱きかかえる。その様子に、杏子は静かに安堵した。

「なぎさちゃん！ しっかりして!!」

ママがなぎさのソウルジエムにグリーンフシードを当てようとするが、ソウルジエムが濁っている様子はない。ただ単に気を失っているだけだった。

「……う、……はわ!? 大変なのです!! さとりが！」

なぎさは飛び起き、駆け出そうとする。

「だ、大丈夫!? さとりがどうしたの!？」

「さとりが生きてたのです!! 早く追わないと!!」

なぎさはさやかを振りほどき、走り出そうとする。だが、さやかは必死にそれを抱きとめた。

「待って、ここはいつもの方法で行くぞ。あいつの足だ。まだそう遠くには行つてねえはず……」

杏子は魔法少女に変身し、ソウルジェムを取り外す。なぎさはそれを見て、何か決意を固めたように一度目を瞑った。

「そうなのです。焦つちや元も子もないのですよ。わかったのです。みんなのソウルジェム、私が責任を持って預かります」

それを聞いて、マミとさやかも頷く。そして二人とも魔法少女に変身し、ソウルジェムをなぎさに預けた。

「それじゃあ、いつも通りに行くわよ。私と佐倉さんと美樹さんでさとりを追跡。なぎさちゃんは少し後方ね」

「わかったのです」

追跡している側が気が付かれたら意味がない。マミの指揮の下、三人は動き出した。そう。三人は。

「ごめんなさいなのです」

「マミ、杏子、さやかが一定距離まで遠ざかった瞬間、なぎさが反対方向に駆け出した。双方遠ざかったことであつという間にソウルジェムの遠隔操作範囲外に出てしまう。そのまま、マミ、杏子、さやかの三人は意識を手放した。」

「でも、さとりお姉ちゃんの邪魔をさせるわけにはいかないのです」

なぎさは慎重に三つのソウルジェムをポケットの中にしまう。

「さとりお姉ちゃんが八雲紫を説得したら、誰も死なないのです。今まで私たちのために一人戦っていたさとりお姉ちゃんなのです。きつと八雲紫も説得できるはずなのです」

なぎさはソウルジェムの範囲内に入らないように注意しながら移動を始める。三人の肉体を残して。

あと十分。あと十分で砂が落ちきる。グリーンフィードの消耗と残りの時間を考えれば、十分乗り切れる時間だった。

「無駄なのがわからないのかしらねえ。遠距離攻撃は当たらないわよ?」

「そんなの、試してみないとわからないわ」

「そう。なら存分に試すことね。それこそグリーンフィードが無くなるまで」

これでいい。たった後十分逃げ切れればいいのだ。私は時間停止で空間の切れ目に入
ることを回避しつつ、まどかが攻撃しやすい位置に移動する。攻撃が当たることはない
が、攻撃を貰うこともない。そう、これでいいのだ。

「お待たせしました」

だが、ふとしたことで均衡は崩れる。突然、紫の横にさとりが現れる。私は咄嗟に距
離を取ろうとするが、その前にさとりは顔を擧めた。

「八雲紫、急いだほうがいいですよ。彼女、時間遡行を考えているみたいです。その準備
があと十分で完了するとか」

「——ッ」

気が付かれた。

「あの盾のようなものが時間停止、時間遡行を行うためのものです」

「そう。じゃあソウルジェムごと頂いちゃいませうかね」

巨大な魔力を感じ、私は咄嗟に時間を止め、距離を取る。

「ほむらちゃん、今のつて……」

「ええ、私の秘策が読まれたかもしれない」

まさかさとりが追いついてくるとは。いや、もしかして今まで隠れていただけなのか
？

「……いや、確実に読まれた。このままじゃ拙いわ。早くさとりを始末しないと」
「そう……だよね」

まどかは少し悲しい顔をしながら、さとりに向かって弓を引く。まどかの放った矢はまっすぐさとりに向かって飛んでいき、そのまま空間に固定された。時間を動かしたら、そのままさとりの体を貫くだろう。

「ほむらちゃん、あの」

「動かすわよ。準備を」

私は時間停止を解除する。次の瞬間、さとりは落下した。

「何ッ!?!」

「あ、どうも」

そう、さとりは八雲紫が咄嗟に開けた空間の切れ目に落ち、難なくまどかの一撃を回避した。次の瞬間、左腕に鋭い痛みが走る。流れ弾を貫つたかと考えた瞬間、私の意識は私の肉体を離れた。

「ほむらちゃん!?! ほむらちゃん!!」

「終わったわね。貴方の負けよ、鹿目まどか」

まどかは必死に意識がなくなつたほむらをゆするが、起きることはない。理由は簡単だ。ほむらの左腕は、肘から先が無くなつていた。

「彼女の命はこちらにあるわ」

八雲紫はそう言つて、ふらふらと何かをまどかに向かつて振る。それはどう見てもほむらの左腕だった。次の瞬間、ほむらが意識を取り戻す。涙を浮かべているまどかを確認し、遅れてやつてきた腕の痛みに呻いた。

「詰みよ。これで貴方の時間停止は潰した。いや、貴方を人質に取つたことになるのかしら」

紫はほむらの左腕から小指を筆取り、口の中に放り込む。その光景はまるでお菓子でも食べているかのように自然だったが、どう見ても人間の仕草ではなかった。

「ひっ……」

まどかの顔が恐怖に歪む。ほむらはその光景を見て、自分たちが完全に敗北したことを悟つた。

「そんな……私は結局まどかを……」

流れ出る血液と共に、胸の奥から湧き上がる冷たい何かをほむらは感じる。敗北を認めたほむらの心は、途端に絶望を感じ始める。紫の持つほむらの腕に嵌められたソウルジェムが、凄い速度で濁り始めた。

「あら、これ以上敵が増えても面倒ね」

紫はゴミでも捨てるかのようにほむらの腕を放り投げる。ほむらの腕はそのまま遠隔操作の範囲外に出たのか、ほむらはまた意識を失った。

「ほむらちゃん……私……」

まどかは優しくほむらの肉体を地面に寝かせる。そしてそのまま、紫のほうに歩き出した。まるでその身を捧げるかのように、変身を解いて紫に近づいていく。

「いい心がけね。そのまま絶望しきる前にこっちにいらつしやい」

紫はまどかの目の前にスキマを作り出す。そのスキマの向こう側には、優しく微笑む紫の姿が見えた。まどかは力なくスキマをくぐる。スキマをくぐった先は見えたとおりに紫の目の前だった。

「ごめんなさいね。私だって本当はこんなことやりたくないのよ？ でも貴方危険すぎるんですもの」

紫は優しくまどかの顔に手を伸ばし、頬を優しく触る。まどかは一度深呼吸をしようと、確かな目つきで紫を見た。

「お願い。殺すのは私だけにして。ほむらちゃんやみんなは見逃して」

「嫌よ。他はともかく、曉美ほむらは危険すぎる。また時間遡行されても厄介だし……最後のお願いを聞く道理もないしね」

そう言つて紫は微笑むが、まどかを横でじつと見つめていたさとりが突然目を見開いた。

「まどか、貴方まさか!？」

「私は取引がしたいの。もし私以外の安全を保障できないなら、私は魔力を暴走させて爆発させる」

「八雲紫、まどかは本気のようなです。もしそれが行われたら、地球どころか宇宙が消し飛びますよ」

紫はちらりとまどかの右手を確認した。そこには、ピンクのソウルジェムが握りこまれている。まさに、いつでも自爆できる用意がされているようだった。

「私のソウルジェムは、みんなの安全と交換」

そこには、先程までの弱腰で弓を引く少女の姿はなかった。紫はまどかを核爆弾に例えたが、まどかは今まさに自身を核爆弾に見立てて交渉を行っているのだ。

「さとり」

紫はまどかの真意を計りたいのか、さとりをちらりと見る。だが、さとりは黙って首を振った。

「……はあ、仕方が無いわね。でも、本当にそれでいいの?」

「……ええ?」

紫がぼつりと呟いた言葉に、まどかは反応する。

「貴方は魔法少女なのよ。今はね」

紫はまっすぐまどかに手を伸ばす、まどかはその手を警戒し、一步後ろに下がった。

「約束は守るわ。他の魔法少女には手を出さない。それでいいかしら？」

「……はい。約束、守ってくださいね」

まどかは握っていたソウルジエムを紫に手渡す。紫はソウルジエムを太陽にかざすと、一瞬笑って、そのソウルジエムをスキマの中に放り込んだ。

「ここはどこ？ 私、いったいどうなって……」

「惜しいなあ。惜しいよ。あ、いや。嘘惜しくない。惜しいのは貴方じゃなかったね。惜しいのはアイツで、貴方は惜しくないから自分の命を投げ出した」

惜しいってなんのこと？

「見事にキュウベえに踊らされてやんの。あーあ馬鹿らしい！ 魔女化のプロセスは、希望から絶望への相転移。ということは、はじめは希望がなきや」

希望？

「貴方は、どうして魔法少女になったの？」

私が魔法少女になった理由。どうして魔法少女になったんだっけ？ 八雲紫を倒すため？ 私たちが助かるため？ いや、違う。私は……私は……

「貴方の願いは何？」

私の願いは――

「キュウベえ、例えばだよ。宝くじの一等を当てたいって願い事をするじゃない？」

「なんの話だい？ まどか」

「いいから聞いて。その場合、絶対に一等が当たるんだよね？」

「もちろんさ。そういう願い事だからね」

「じゃあさ、もしもだよ？ もしも、その人一生宝くじを買わなかったら、一等は当たらないんだよね？」

「当たり前じゃないか。宝くじは買わなければ当たらない。まあ、そういう願い事をするぐらいだ。買わないってことは万に一つもないんだらうけどね」

「そうだね、キュウベえ。ありがとう」

「……理解できないね。なんで君から感謝されるんだい？」

「うふふ、内緒！」

私は静かに目を開ける。青空に白い雲。顔を横に向けると崩れかけた見滝原の街。やっぱり、まだ生きてる。当たり前前だ。だって当たり前のことだから。私は地面に手をつくと、ゆっくり立ち上がった。

「八雲紫さん。もう一度、交渉しませんか？」

私の目の前には八雲紫さんとさとりちゃんがいる。さとりちゃんは私がどんな交渉をしようとしているのかわかつたらしく、わかりやすく狼狽していた。

「ええ、いいわよ。言ってみなさいな」

紫さんは先程とあまり変わらない笑みを浮かべて私の言葉を待っている。私は小さく息を吐くと、はつきりと宣言した。

「紫さん、私は『みんなですべて幸せに暮らしたい』と願いました。誰一人欠けることなく、楽しく、幸せな日々を送ることが私の願い事です」

「あら？ それ本当？」

「本当です。さとりちゃんが証明してくれます」

私はさとりちゃんをじつと見る。さとりちゃんは少し困った顔をしたあと、確かに頷いた。

「そう。それは困ったわねえ。つまり今ここで貴方を殺してしまうと、貴方の願い事に矛盾が生じるというわけよね？」

「はい。その通りです。ですから、私達から手を引いてください。貴方が手を出さなくても、私は、私達は幸せな日々を送っていくことが出来ます」

私はじつと紫さんの目を見た。紫さんも何かを試すように私の顔を見ている。そして、一つの質問をした。

「例えば、貴方が魔女になって世界を滅ぼす、というのは幸せな日々と言える？」

「勿論、言えません」

「そう。じゃあ私から言うことは何もないわ。古明地さと。幻想郷に帰りましょうか」

そう言つて紫さんはスキマからほむらちゃんの腕を取り出し、私に渡す。そして、最後のダメ押しと言わんばかりに私に言った。

「貴方が手にした幸せを、無かつたことにしてはいけない。彼女が二度とそんなことを考えなくてもいいように、貴方が彼女を幸せにしなさい」

「わかっている。もう、繰り返しさせない。もうほむらちゃんに辛い思いはさせない」

紫さんは大きな空間の裂け目をつくると、先にさとりちゃんを通す。そして紫さんもその中に消えた。あとには、ほむらちゃんの手を握りしめた、私だけが残った。

「やったのです！ やっぱりさとりお姉ちゃんは凄いのです！」

遠くから走ってきたなぎさちゃんがくるくる回りながらはしゃいでるのが見える。私は倒れているほむらちゃんに近づくと、魔力で腕をくつつけた。

「——っ、……まどか。——ッ!? まどか!？」

ほむらちゃんは飛び起きると、盾の中の砂時計を確認し、盾に手を掛ける。私はほむらちゃんが時間遡行を行う前に、ほむらちゃんを正面から抱きしめた。

「!? ま、まどか?」

「もういいよ。もう、頑張らなくていいよ」

「どういう——」

喋ろうとするほむらちゃんの言葉を遮るように、私は更に強く抱きしめる。

「今まで私なんかの為に、本当にありがとう。今度は、私が頑張る番。私がほむらちゃんを幸せにする。だからね、もう繰り返し返さないで?」

ほむらちゃんは混乱したように一瞬目を白黒させたが、素直に私の胸に顔を埋める。そして、今までの全てを洗い流すように、声を上げて泣き始めた。

「本当にこれでいいのですか?」

私は呑気に縁側でお茶を飲んで、八雲紫に問う。外ではお燐とお空、エリー、あと八雲藍の式神が楽しそうに遊んでいた。八雲紫はぼんやりとそれを眺めている。

「ようやく終わったのよ？ それも全部計画通りに。これ以上何を求めるといふの？」
「計画通り？」

私は紫の式神が持ってきたお茶を飲む。紫はオウム返しにした私の問いに頷くと、小さな箱を私に手渡した。

「貴方から預かってきたものよ。約束通り返すわ」
「貴方に預け物なんてしてはいないはずですが……」

私はその小さな箱を手取る。ああ、これか。私は渡されたものの正体がわかり、妙に納得してしまった。

「これは、地霊殿のものですね」
「そうよ。これは貴方から私に渡されたもの。間違いないわよね？」

ああ、間違いない。箱に掛けた封印といい、箱のデザインといい、私が物を送るときに使用するものだった。

「中身は……」

「開けてもいいけど、縁側はやめておいたほうがいいわ。部屋を貸すから、そこで開けな
きゃ」

「……記憶、ですね。これは私の記憶だ」

私は八雲紫に記憶を預けた。なんの為に？ まあ、私の頭に戻せばわかるか。私は紫の式神に案内されるままに部屋に入る。そして一人になったのを確認し、箱の蓋を開けた。

暗くて寒くて熱くて明るい。地霊殿とはそんなところだ。私の名前は古明地さと。この地霊殿の管理人をやっている。地霊殿の管理人というだけで、そこまで偉い立場でもないのだが、そういう立場の者が少ないというだけで外からくる話は大体私のもとに入ってくる。

「まあ、無駄な仕事が増えるだけなんですけどね。星熊勇儀さんあたりが引き受けてくれるといいんですけど、いかんせんそういうことは苦手のようで。ええ、迷惑ですよ。これでも暇ではないので」

「そこまで露骨に嫌な顔をされるとは思っていなかったわ。でも勘違いするな。私は別にお願いに来たんじゃない。お前も手伝いたくなくとも思っただけを掛けに来たのよ（まあ、一回地底に来たかったという理由もあるけど。ここは太陽の光がないし）」

私の前に座ってらっしゃる小さな吸血鬼。彼女の名前はレミリア・スカーレット。地

上に紅魔館という大きな洋館を構え、そこで何かやつてゐるらしい。一体どうやつてあれだけの洋館を維持するだけの収入を得ているかは謎だが、まあ興味が無い。

「手伝いたくなる……ですか。一体どんな話で？」

「教えてあげてもいいけど、タダとは言わないわ。ちようど地底に別荘が欲しいと思つていたところなのよ。地底の土地を分けなさい。それが条件（私が夢で見た光景。二か月後、この世界は滅亡する。なんとしても阻止しないとね。これを機に、一気に私の勢力を拡大してやる）」

「え？ 嫌ですよ。吸血鬼に土地を与えたら碌なことがない。勝手にその辺の鬼から奪つてください」

「気にならないの？ 私の話が（なんだコイツ。無礼なやつだ）」

「ならないですよ。なんで私がそんな面倒なこと……面倒くさい」

「……はあ。無駄骨ねえ。咲夜、行くわよ（まさかこんなつまらないやつとは）」

レミリア・スカーレットは大きいため息をつくと、横にいた従者を連れて部屋を出ていく。私は扉が閉まったと同時に大きいため息をつき、椅子にもたれ掛かった。

「お憐、片づけといて」

「了解しましたー。つて、あの吸血鬼たち全く飲んでないし（勿体ない精神とかないのかねえ）」

まあ、逆の立場だったら私なら絶対飲まないが。こんな何が入っているかわからないお茶。私はティーセットをテキパキと片づけるお燐を横目に、先ほどの吸血鬼の話を頭の中で整理した。

「押しつけがましいといふかなんというか。大して分かってもないくせに」

どうやら、予知夢を見たらしい。二カ月後、外の世界で大きな事件が起こり、地球が壊滅する。その影響で、幻想郷も危ないようだ。

「それ以外何もわかっていないというのに、そんな曖昧な情報を取引材料にするなんて」
だが、それがもし本当ならば……

「何をブツブツ言ってるんで？（というかあの吸血鬼の話、よく分からなかったにやあ）」
「お燐。少し出かけるわ」

「え？ あ、はい。どちらまで？（閻魔様のところかな？）」

お燐は私に行先を聞いておきながら、そのままティーセットを持って部屋を出て行ってしまふ。私は一度自室に戻って身支度を済ませると、地霊殿を後にした。

「お姉ちゃんどこ行くの？ 私も一緒に行く!!」

地霊殿を出てすぐ、私は後ろから何者かに抱きつかれる。いや、何者か悟られず私に抱きつける者など地底には一人しかいなかった。

「あんまり面白くないわよ?」

「いいのー」

古明地こいし。私の実の妹だ。覚妖怪の特徴である第三の目を閉じてしまったことで、こいしは人の心を読むことはできない。いや、第三の目を閉じているのではない。こいしは心を閉じていた。何を考えているか私にも読めない。いや、そもそも何かを考えているのだろうか。私が意識を読むとしたら、こいしは無意識を操る。まあなんというか、愛らしい妹だ。

「で、どこ行くの?」

「地上よ」

「地上のどこ?」

「さあ、どこにあるのかしら」

吸血鬼は今回のように片っ端から声を掛けているのだろうか。なんにしても、あいつにはまだ声を聞いていないだろう。あれとあいつは仲が良くない。だとしたら、私が手を組むべきはあいつだ。

「わかった! 誰かに会いに行くのね」

「まあ、そうね」

「誰に会いに行くの?」

さて、何処に行けば会えるのやら。幻想郷で一番居場所が分かりにくいのはあいつ

だ。

「八雲紫」

「で、そんなよくわからない情報を頼りにここへきたと。いささか心配性すぎるのではありませんか？（あまりにも確かな情報が少なすぎる。何をそんなに焦っているのやら）」

八雲紫は呆れた顔で私を見てくる。まあ、紫の言いたいこともわかる。だが、わかるのだ。

「憶測なんかでこんなところまでは来ません。レミリア・スカーレットはこのままでは世界が滅亡すると確信していた。つまり、それほどはつきり見えたということでしょう」

あの吸血鬼が見た夢。それは予知夢としてはあまりにもはつきりしたものだ。

『本当に物凄かったね、変身したまどかは。まさか、あのワルプルギスの夜を一撃で倒すとは』

『その結果どうなるか、見越した上だったの』

『結果は一緒さ。彼女は最強の魔法少女として、最大の敵を倒してしまっただ。勿論

あとは、最悪の魔女になるしかない。今のまどかなら、五日もしないうちにこの星を壊滅させてしまうだろう。ま、あとは君たちの問題だ。僕らのエネルギー回収ノルマは概ね達成できたしね』

『戦わないのかい?』

『私の戦場はここじゃない』

『暁美ほむら……君は、一体——』

この一連の会話。レミリア・スカーレットはそれを見た。彼女はこの光景を見て、どうして二か月後だと予想したのだろうか。太陽の位置、空模様、まあこんなところだろう。私はレミリア・スカーレットが見た光景を包み隠さず八雲紫に説明する。八雲紫はその話を聞いて、表情が少し真剣になった。

「確かに、少し気になるわね（インキュベーター、あの面倒くさいのが関わってくるとなると……）」

「インキュベーター?」

八雲紫は頷くと、白い紙にペンを走らせる。そこに描かれたものは小さな猫のような生物だった。

「猫!」

「こいしが両手を挙げて喜ぶ、紫はそんなこいしを見て苦笑を浮かべた。」

「そんなに可愛いものではないわ（とくにこいつはね。面倒くささで言ったら目の前のこいつと同じぐらいには）」

「孵卵器なんて名前がついているところを見るに、確かに可愛らしいものではなさそうですね」

八雲紫は紙に書かれたインキュベーターを見ながら話を続ける。

「こいつはね。その名の通り孵卵器。取り敢えず、これの説明をしましょうか（まあ、説明するまでもなく、もう心を読んで知っているかもしれないが）」

「はあ、なんとも荒唐無稽な話ですね。エネルギーを集めるために人間の子供を魔法少女にして魔女にするだなんて。つまりは宇宙人ということですよね？」

八雲紫の話は胡散臭くとても信じられるような話ではなかったが、心を読む限りでは本当の話らしい。吸血鬼が話した結末は十分に起こりうる。八雲紫はそう判断していた。

「たまにいるのよ。突拍子もなく強い力を持った魔法少女っていうのが。そういうのが魔女になると、力の分だけ凶悪な魔女になる（まあ、世界を破滅させる規模となると珍しいどころの話じゃないけど）」

「つまり、世界を滅ぼすほどの力を持った魔法少女が魔女になる。それも二か月後に。そういうことですか？」

「貴方から聞いた話を纏めると、だけどね。でも、この予知夢が本当に起こりうるかどうか確認する手立てはあるわ。幸い、レミリア・スカーレット嬢は名前を聞いている。『まどか』それに『暁美ほむら』。この二人を手掛かりに少し調べてみますわ（インキュベーター……本当に面倒くさい話だわ。力でなんとかなる相手でもないし、敵対しているわけでもない。魔法少女に関する条約も結んでるし……）」

八雲紫は非常に協力的だった。まあ、それはその筈だ。もしこの予知夢が現実のものとなれば、世界は滅亡する。それは八雲紫としても何としても避けたいはずだ。だとしても、インキュベーターとの条約か。確かに面倒だ。

「ええ、よろしくお願ひします。この件に関しては協力を惜しみません。まあ、私が持ち込んだ案件ですし」

「何かわかったらこつちから伺うわあ。移動に関しては私の能力のほうが便利ですし（条約を破棄せず、明確に敵対することもせず。相手にも利を持たせた形でこちらの目的を達する。簡単な話ではないわね）」

さて、話は終わりだ。私はお茶の礼を言うといいしを連れて立ち上がった。

八雲紫に話を持ち掛けて一週間。大体の調査が終わったのか八雲紫が地霊殿を訪ねてきた。私は人払いを済ませると、八雲紫と向き合う。私の横には角砂糖を積んで遊んでいるこいしがいるが、紫曰くこいしにも今回の話を聞いて欲しいとのことだ。

「ひとまず結論から言うわ。スカーレット嬢が予想した世界の終わり。これはかなり高い確率で現実のものになる。鹿目まどか、暁美ほむら。確かに外の世界に実在したわ（それも、かなり近い場所にね。だけど、不可解なこともある）」

紫は二枚の写真を机の上に置く。なるほど、これが鹿目まどかと暁美ほむらか。

「ただ、魔女になりうる鹿目まどかは、世界を滅ぼすほどの魔力を持っていなかった。素質はあるみたいだけどね。それに関しては暁美ほむらもそう。私が観察した限り、病弱な少女にしか見えなかった（それどころか、暁美ほむらに関しては死にかけてたし。手術で何とかなったみたいだけど）」

「スカーレット嬢の思い違い？」

確かに、そんな状況の少女がああ凛とした少女と同一人物とは思えない。

「いえ、スカーレット嬢の見た暁美ほむらとは、びっくりするほど様子が違った。二人ともいきなり豹変する可能性があるわ。これに、最後の一言『私の戦場はここじゃない』」

これ以上の戦場が、何処にあると言うのかしらね（少なくとも、地球が破滅した後の世界じゃないことは確かでしょうね）」

この先はないとしたら、その前か。

「過去……ということですか」

「はい正解。その言葉があまりにも気になったものだから、この世の果てまで行って時空の歪みを調べたわ。そしたら、奇妙な並行世界を見つけた。その世界はどうも時間の流れがずれているらしくてねえ。これから晝美ほむらが迎えるであろう未来があったわ（一週間じゃ確実とはいかないけど）」

「貴方、時間旅行もできるのですね」

あなたが神か。

「馬鹿なことと言わないで頂戴。時間の流れが少しずつ違う世界をいくつもいくつも回って、一本のストーリーに繋がただけよ（私も時間停止の能力が欲しいわあ）」

どうやら神ではないらしい。ただの努力家だったようだ。要はバラバラのページを一冊の本に纏めたということだろう。

「そこから、見えた結論を言うわ。最終目標は、鹿目まどかの願い事を消費させること。魔女にならないように契約させるのよ。彼女の途轍もない魔力で魔女になりたくない」と願ったら、魔女になることはないでしょう（魔力の向く方向を変える。大きな力は、制

御してこそ価値がある)」

そういうものなのだろうか。八雲紫はそのあとでも並行世界の話をしていく。私はその話を聞きながら、どういう風に動いたらいいかを考えていた。

「つまり、私が鹿目まどかの家に潜入して、彼女を直接誘導すると」

「で、私がお姉ちゃんをサポートをすればいいんだね！」

「ええ。そういうことよ。私はインキュベーターに顔が割れているし。というわけでこつちで向こうに行く準備を整えるわ。貴方も貴方で準備をしておいて頂戴（主に外の世界の常識の勉強とかね）」

八雲紫はそう言うと、スキマの中に消える。私は大きいため息をついた後、横に座っているこいしの頭を撫でた。

「面倒くさいわ」

でも、世界の破滅には代えられない。

「それ、本気で言ってるの？（端的に言つて、馬鹿で無謀ね）」

「本気で言ってるしやる。この中に私の記憶を詰め込みます」

計画前日。私は八雲紫の屋敷に来ていた。そこに用意されていたものは向こうの世

界の服に靴。そして簡単な日用品だ。私は海外のからの交換学生として鹿目まどかの家に忍び込むらしい。その為の手続きや書類は全て紫が用意したようだ。

「それ、本当に意味あるの？（何も知らずに外の世界に飛び込んで、計画が遂行できるのかしら）」

「ええ、勿論です。こいしの存在をインキュベーターに悟られるわけにはいきません。この計画を始めた一カ月分の記憶を抜き取り、この中に閉じ込めておきます」

表舞台に立って動く私とは違い、多くの者の無意識に干渉するこいしの存在は見つかってはいけない。こいしだけが動くならインキュベーターでさえこいしを見つけないことはできないだろう。いや、いることすら気が付かない。だが、そこに少しでもこいしがいると知っている者が紛れると話は変わる。

「私がこいしを意識することで、そこに何かがあると悟られてしまう。もしそうになると、狡猾なインキュベーターのことです。きっと貴方の存在まで看破してしまうでしょう」「まあ確かに。この計画で重要なのは貴方よりも妹さんのほうだしね。わかっただ。でも、それで本当に大丈夫？ 目的を見失ってもっと酷いことになったりしない？（私としてはそつちのほうが心配ね）」

「ある程度は大丈夫だと予想します。暁美ほむらが転校してきたら、ある程度は状況を把握できると思いますので」

私のことは私が一番よく知っている。世界が破滅しそうになってることを知れば、自主的に動き出すだろう。

「だとしたら、鹿目まどかの家に行つて数日したら記憶を消しましょうか。貴方は表面きは海外からの転校生ということになってるし、その段階から記憶がないとそもそも鹿目まどかに接触することすらできないし（初めのうちに基盤を作ってもらわないとこちらとしても困るわ）」

「ええ、そうしましょう」

「日程的には……転校初日。そうね。キリがいいから暁美ほむらがループしてするのに合わせましょう（その数日前に向こうに送るとしたら……飛行機のチケットを無駄に予約して辻褄を合わせて……面倒くさいから藍にやらせましょうか）」

ああ、それはいい。多くの人間と関わる前に記憶を消したほうがいい。タイミング的にはぴったりだ。

「では、始めましょうか。名付けて、『まどかちゃん』のついでにほむらちゃんも助けちゃおう大作戦』本当は二人とも殺してしまうのが一番なんだけどね。それをすると、インキュベーターがどのような干渉してくるかわからないし（インキュベーターにはまだかの魔法少女化で満足してもらいましょう）」

人が人になる前から地球に干渉しているような生命体だ。技術力だけを見てもかな

り手ごわい相手だと言える。そんな相手の妨害など受けたら鹿目まどかの魔女化などあつという間だろう。

「インキュベーターにも少しは旨みがないと。鹿目まどかの契約。これが最大の妥協点よ（まあ、それ以上は絶対に譲らないけど）」

「……思い出した。我ながらなんて失態を……最終的に計画通りにいったからいいものを。だけど——」

私は頭を抱えながら部屋の隅を見る。そこにはこちらに向かって手を振っているこいしの姿があった。

「お姉ちゃんすつごく面白かったよ。もうやることなすこと全部裏目に出てさ！ 当初の予定ではここまで敵対的な関係になることは予想だにしていなかったよ」

「そうよね。貴方はずつと私の近くにいたのよね」

「それだけは、何処までも計画通り。お姉ちゃんのジタバタは無駄じゃなかったよ。私は気が付かれない」

それはそのはずだ。あの世界には、こいしの存在を知るものはいなかったのだから。

「あら、目が覚めた？ 全部思い出したって顔ね」

襖を開けて、八雲紫が部屋の中に入ってくる。私は畳から起き上がると、立ち上がって紫と対面した。

「申し訳ございません。醜態を晒しました」

「いいんじゃないかしら。これで、やり遂げたことがしよぼかつたらまだしもね」

貴方たち姉妹は世界を救ったわけだし。八雲紫はそう言つて微笑んだ。

「ところで、記憶を取り戻して気が付いたのですが……貴方、魂をどこにやったんです？」

前までは普通に心が読めていたのですが」

「急に幻想郷に戻ってきた時は流石に焦ったわ。私の心が読まれたら貴方の記憶を消した意味がなくなるもの。でも、貴方の読心術を何とかする方法をあの巴マミが見つけた。私はその真似をしているだけよ」

なるほど。自分の魂と肉体の境界を弄り、分離させているのか。まあ、なんにしても私が八雲紫に会いたくなくなる理由が一つ増えた。これからは極力関わらないようにしましょう。

この世の果て 何処かもわからない世界で

「全く、してやられたよ。何処までが君の策略だい？」

インキュベーターはくるりと首を捻って八雲紫の顔を見上げる。八雲紫はインキュベーターを見下ろすと、不敵に笑った。

「勿論、一から十までですわ。これでも最大限の譲歩はしたのです。不可侵の契約を破ったのは大目に見てくださいね」

「それに関してはこっちもだ。鹿目まどかが魔女化したら、幻想郷にも多大な被害が及ぶだろう。その時は君も死ぬからいいかと考えていたんだが……」

ああ、お互い様だ。そう言つて、人ならざる者たちは笑う。

「でもいいのお？ 鹿目まどかがあのような契約をしたということは、少なくともあの六人の中から魔女が生まれることはないわよ？」

「それに関しては大丈夫。この世界には魔法少女が何千何万といる。母数が巨大だけにこちらが被る被害も少ない。それにだ」

インキュベーターは八雲紫を駆け上がり、肩に乗る。

「まどかが契約した時点で、実をいうと半分はエネルギーを収集できているんだよね。今回はそれで満足しておくことにしよう。それに、まどかが魔女になる可能性もゼロじゃない」

「前向きね。でも、それはあり得ない。あの子が願った幸福は、そんな小さなものではないわ」

八雲紫は肩からインキュベーターを跳ね除ける。インキュベーターは飛び降り、地面に着地した。

「ふーん、そうか。じゃあ、楽しみにしておくよ。幸福から得られる感情エネルギーが一体どれ程のものかをね」

「結局よ。さとりが紫を説得したってことでいいのかよ。まどかから聞いた話とちよっ

と違うぜ?」

「間違いないのです。だってさとりお姉ちゃんがそう言ってたのです。事実、その通り八雲紫は帰ったのですよ!」

「ママの家でのお茶会。そこで上がる話題は自然とさとりのことが多かった。

「私はあんまりいい思い出ないんだけどね。なぎさちゃんの言うことももつとみただけ、鹿目さんの話だとそのあと二人を殺そうとしていたらしいし」

「そう……なんだよね。私が見た限りでは、そこまで助けてくれたようには……」
「でもさとりお姉ちゃんは説得するって!!」

「なぎさは頬を膨らまして怒る。他の皆はなだめるように納得するしかなかった。

「まあ、八雲紫がまどかのことを諦めて帰ったことは確かなんだし。助かったことをもつと喜ぼう! このケーキめっちゃ旨つすよ!! それより、もつと考えなきゃいけないことがあるでしょ。特にほむら!」

「さやかはビシツとほむらを指さす。ほむらはモフモフとケーキを食べながら首を傾げた。

「ほら! あんた時間止める魔法使えなくなったでしょ! どうすんのさ!」

「ほむらはそのままケーキを飲み込むと、真面目な顔になる。どうやら、考えが全くないわけではないらしい。」

「ワルプルギスの夜との戦いで溜め込んでいた兵器はあらかた使ってしまったし。力が強いわけでも足が速いわけでもない。でもまあ、何とかなるわ」

「大丈夫だよ、さやかちゃん。ほむらちゃんには私がついてるもん！」

「まどかがあ？ 心配だなあ……」

「ひどーい！」

マミの部屋が笑いに包まれる。確かに、時間停止の魔法を失ったほむらは、魔法少女としては生きていけない。だが、彼女が不幸になることはないだろう。

彼女たちの幸せは、宇宙を書き換えるほどの力によって約束されているのだから。